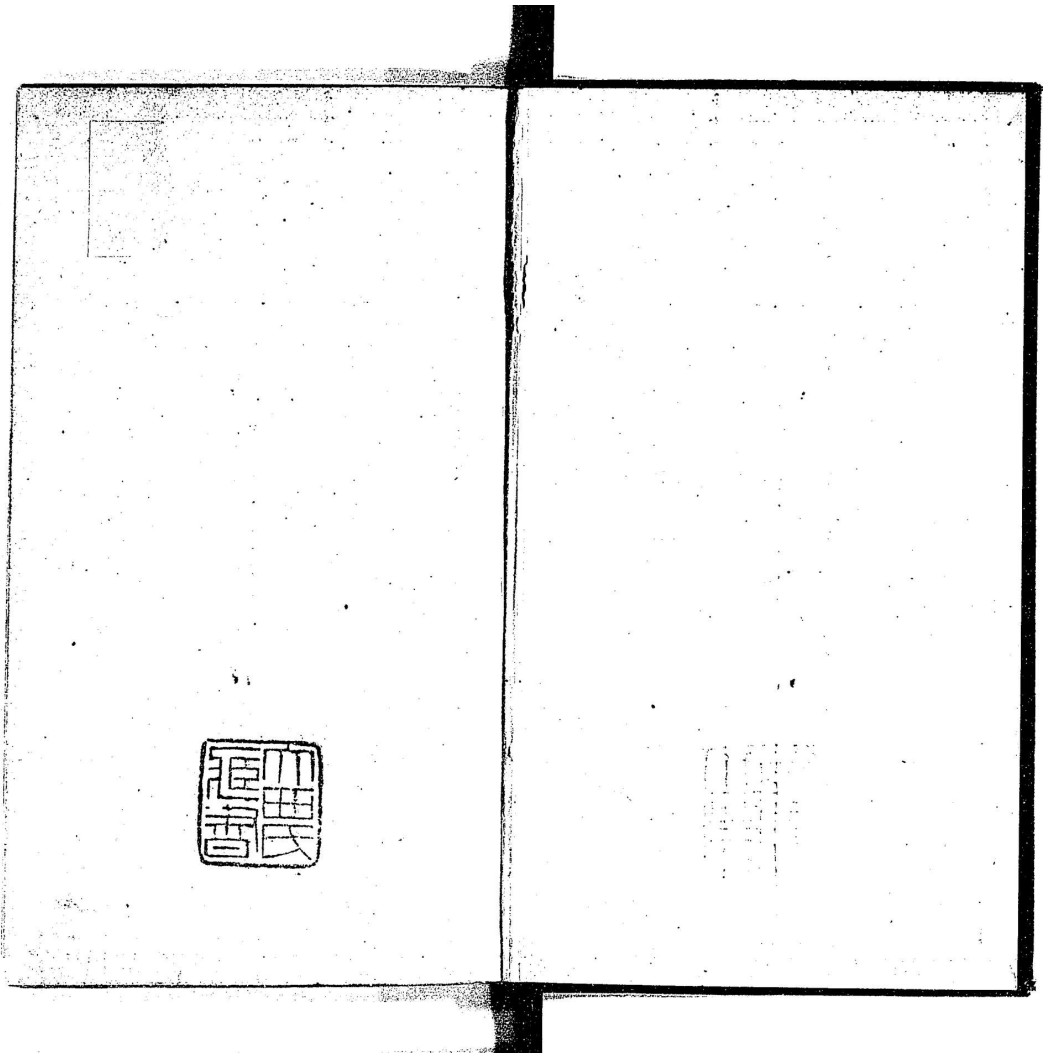


作詩大成

森槐南題字  
井土靈山著



森 槐南先生題字  
土 居 國 先生題  
井 靈 山 先生著  
土 山 先生作

# 作詩大成

東京 崇文館 發行

921  
I469A



石  
竟

517185

集孔翠  
為求

庚戌歲抄

魏南方來題署



二南遺響日新  
祖述千秋有若人  
翻閱應知言志訣  
生畢竟性情真

爲靈山詞兄  
題作詩大成首

土居香國

詩道淵源遠。大雅久闕焉。楚騷流爲賦。  
 西漢何斐然。蘇李相唱和。五言啓厥先。  
 栢梁已灰滅。唯有風流傳。建安七子起。  
 麗則綺繡聯。典午多作者。我推淵明賢。  
 平淡含至味。千古無續絃。劉宋至陳隋。  
 豔靡徒爭妍。康樂登臨詠。明遠樂府篇。  
 理趣兩相得。茫茫誰比肩。宣城貴清俊。  
 風格亦難捐。李唐定天下。鳳翥而龍鶩。  
 四傑並轡出。羣才爭翩翩。沈鬱杜少陵。  
 飄逸李謫仙。盤屈韓昌黎。和平白樂天。

各從其所好。爾後一千年。規撫爲師表。  
 末流多變遷。宋詩頭巾習。理路落言詮。  
 元詩如病女。風骨纖且孱。明詩如優孟。  
 衣冠徒周旋。藝苑日蕪穢。滿目榛莽連。  
 我性素鶩劣。況遭塵網牽。刪述雖有志。  
 何以能成編。兔園聊舐毫。兒戲眞自憐。  
 世運屬休明。操觚人幾千。安得揮椽筆。  
 躍鱗出深淵。

庚戌歲晚自題作詩大成

靈山外史

例言

- 例言
- 一 本書は初學者のため、作詩の捷徑を指示す。大體古人の説く所を骨子として、參するに愚見を以てす。
  - 一 作詩の書古來世に知られたるもの汗牛充棟雷ならずと雖も、浩瀚繁冗に失せざれば、淺近卑俗に流れて、簡明要を得たるもの少し。是余の謫劣を顧みず、本書を編纂したる所以なり。
  - 一 邦人音韻の學に精しからざるより、詩を作るも聲律を忽諸に付するもの多し、五言律詩の如き第二字の孤平を忌むこと、極めて知り易き例なれども、王朝時代より今日に至り、詩を以て家を成す者にして猶十中八九は知らず、本書は此點に於て最も意を用う。
  - 一 古詩平仄法は森槐南先生が漁洋の説を唱導せられてより、邦人



中聊か之を學ぶものあるも猶曠々たり。されども是亦古人の詩を精讀すれば、自ら知り得べきことなり。本書は特に其門徑を示す。一 詩法は廣し、到底此一小冊の盡す所にあらざるも、聊か初學の津梁となすを得ば、編者の望足れり。

庚戌歲晚

靈山識

序論

第一章 七言絶句

- (一) 平仄の式……………一
- (二) 起承轉合……………五
- (三) 前對格、後對格及全對格……………九
- (四) 古人の作例……………一五
- (五) 實接……………一九
- (六) 虛接……………二九
- (七) 用事格……………四四

(八) 拗體……………五

第二章 五言絶句

(九) 仄韻の詩……………五

(一) 平仄の式……………六

第三章 七言律

(一) 平仄の式及拗體……………六

(二) 對聯……………六

(三) 杜律の諸體式……………六

第四章 五言律

(一) 平仄の式及拗體……………六

(二) 杜律の諸體式……………六

(三) 變體……………六

(四) 排律……………六

第五章 近體類語

(一) 節序……………六

(二) 雪月花……………六

(三) 登臨……………六

(四) 人事……………六

第六章 五言古詩

|          |       |    |
|----------|-------|----|
| (一)      | 一韻到底格 | 二七 |
| (二)      | 換韻格   | 三〇 |
| 第七章 七言古詩 |       |    |
| (一)      | 平仄の定式 | 三九 |
| (二)      | 七古作例  | 三三 |
| 目次終      |       |    |

# 作詩大成

靈山 井土經重述

## 序論

詩といふ字の意味を調べて見るに、書經の舜典に「詩は志を言ふ」其傳に「心之之く所、これを志といふ、心之くところあれば必ず言に形はる、故に曰く、詩は志を言ふ」とあり。されば詩の古字は、言扁に之と書き、誣又は説を以て行はれたり。

詩經國風關雎の序には「心に在るを志となし、言に發するを詩となす」と、前漢書藝文志には「其言を誦する、之を詩と言ふ」と、鄭康成の六藝論には「詩は絃歌諷誦の聲なり」と、古來種々の註釋あ

成 大 詩 作

れども、要するに心に感ずるところを言に發して、諷誦詠歎するなり。我邦にては詩を『カラウタ』と訓ずれども、歌も詩も其意に於て大差なし。

支那にては詩を以て六經の一となせり、六經とは詩、書、禮、樂、易、春秋なるが、此詩と云ふは、周の盛時、諸國に於て諷誦せられしもの、中より、孔子が三百餘篇を採りて、刪定を加へしもの、即ち詩經の一書なり。後世詩を談ずるものは、先づ之を以て詩の本源となせども、周以前にも諷誦せられたるもの多し。

要するに心に感ずるところを諷誦詠歎することは、人類自然の通則にして、如何なる野蠻國といへども、歌謠のなきものなし。古今集の序にも『枝に啼く鶯、水に住む蛙、何れか歌をよまざるべき』と云ひしも此理なり。

論 序

支那の歴史に見はれたる最も古き歌謠は、堯の時の擊壤歌、康衢謠等なり。次で夏、殷、周三代を経て、戰國の末に至れば、楚人の文學大に行はれて、諸國皆其感化を受く、所謂先秦の文學は大抵楚の産物なり。就中屈原、宋玉の一派最も盛にして、其言太だ長し。詩變じて賦となりしは之がためなり。漢に入りて、樂章を作り絃歌せしもの多く、後世樂府の起源は此に在り。而して其音節は多く四字を以て句となすこと、古來の通則なり。稀には三字、五字乃至七字を以て句となすものあれども、今字を加へて節奏を調へ、後世の七言の句とは全く異なるなり。七言の詩は武帝の栢梁體に徇まり、五言は李陵、蘇武の唱和を權輿とすと云へども、卓文君の白頭吟は蘇李に先ちて純然たる五言の詩なり。

次で魏晉南北朝を通じて、隋に至るまで、七言は多く行はれず、詩

と云へば大概五言に定まれるもの、如く、唐に至りて始めて五七言並び盛なり。而も句數に定まりなし、且一定の聲律もなかりしもの、沈約の説によりて、今の所謂絶句、律體を生じたり。故に詩の歴史は隋唐の間に、一大鴻溝を劃して、古今の兩體を分つこととなりしなり。

古體とは即ち隋以前の體に擬して作るものにて、章句に長短ありて、聲律に定式無し。近體は四句(絶)若くは八句(律)にして一定の聲律を要す。是古今沿革の大要なり。而して今詩を學ばんと欲せば、先づ近體の絶句より入手するを可となす。

第一章 七言絶句

(一) 平仄の式

七言絶句は四句、二十八字より成る。絶は截にて、律詩の半截といふ義なり。

詩は古に於て凡て絃歌諷誦に資すべきものなりしが、漢代に樂府の一體ありて、専ら之を絃歌の用に供し、一般の詩はたゞ學者の志を述る具となれり、然れども七言絶句のみは、唐代に至りて、猶妓流の諷誦せるもの多し、離別の席に於て、陽關三疊の曲を歌ふなど、我邦の都々逸、端唄の如く、歌曲として持離されしが、それも後には變じて填詞即ち詞曲となれり。是れ詩詞の區別ある所以と知るべし。





詩の生命の繋るところ全く此に在り。我邦の端唄の例を以て之を云へば、

(起句) 羽織かくして袖引止めて、

(承句) どうでも今日は行かんすかと、

(轉句) 障子細目に引あけて、

(結句) あれ見やしやんせ此雪に、

の起承二句は、男を引止むることを述べ、意味相連接して、離るべからざるものなれども、轉句に至りて、障子を細目に引あくるは何の意味やら、起承と對照して、全く別意なるが如く、解釋に苦めども、結句を讀むに至り、始めて其意のあるところを了解し得べし。

涼州詞  
葡萄美酒夜光盃  
欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回  
此詩の起承二句は、玉盃に美酒を盛りて飲まんとすれば、胡人馬上に琵琶を弾じて興を添ふと、陣中の光景を述べ、轉句に至りて、沙場に醉臥するを笑ふなかれと云ふ、結句を讀まざれば、何の意か解し難し、乃ち古來征伐に赴きし將士は、大抵白骨を沙場に曝して、生還するを得ざれば、我等と雖も亦然らん、故に酒なりとも十分に飲みて、生前の歡樂を盡すべし、今夜の中にも、敵軍襲來して潔く戦死せば、再び酒も飲む能はず、暫時醉倒するも其狂態を笑ふなかれとの意にて、轉結二句によりて無限の感慨を見るべし。絶句は總て此調子にて作るべきなり。

題不識庵擊機山圖  
鞭聲肅肅夜過河  
曉見千兵擁大牙



遺恨十年磨三劍。流星光底逸長蛇。  
 此詩も起承二句は、謙信が夜半軍を警めて、西條山を發し、曉天河中島へ向ひ、信玄の本陣に迫れる光景を述べ、轉句は十年一劍を磨して何のために遺恨なりしや、結句を讀まざれば其意を知るに苦しむ。小豆長光の大刀を揮ふて、電光一閃の下に、信玄を兩斷となさゞりしが終生の遺憾とするところにして、遺恨の字此に於て萬鈞を引くの力あり。  
 之を要するに、起承は一意を以て成り、轉結又一意を以て成り、而して結句は起承二句の意を收束せざるべからず。  
 此法は獨り詩のみならず、平生の談話の上にも自然具備すべきものなり。之を具備せざれば、人をして傾聽せしむるの力なし。人に對して金を借らんと欲せば、先づ金を借ることを云ふ、是發端の辭とし

て、起句なり。次に其理由を敍べて發端の辭を確實ならしめざるべからず。次に別に其人の心を動かすべき意外の事を述べて、而して最後に成程と合點せしむるを要す。詩人は常に貧乏なるゆる斯る例を引くと云ふ譯にあらず、總ての談話或は文章皆起承轉合あり。文章に於ける抑揚頓挫は詩の轉句と其理同じ。活變の妙は此にあり。而して結句は起承二句と相呼應して收束を爲す、是れ文章の照應なり。  
 越中懷古  
 越王勾踐破吳歸  
 宮女如花滿春殿  
 義士還家盡錦衣  
 只今惟有鷓鴣飛  
 李白  
 此詩を説くもの、前三句を以て一意となす。蓋し三句を連ねて、古を述べ、唯結句のみ、今の寂寥を悲むものなれば、斯く解釋するも、可なれども、能く玩味すれば、前三句一意と雖も、層々次第ありて

成大詩作

同じからず。越王勾踐が臥薪嘗膽の苦を忍びて、遂に宿世の敵國たる吳を亡ぼして凱旋し、其功臣は何れも論功行賞の結果、錦衣を着けて、得意なりと云ふは、起承の意味にして、轉句は花の如き宮女が春殿に満つと、越王勾踐心驕り意満ちて、美人を聚め、遊宴に耽るさまを言ひ、前の臥薪嘗膽、戦に勝つとは全く反對の意を示す。さればこそ遂には國亡びて今は唯鷓鴣の啼くあるのみ、錦衣の義士も、花の如き宮女も春殿も無く、人をして憑吊の涙を灑がしむとなり。即ち艱難を以て成り、驕奢を以て敗るの意を寫したるものにて、轉句の宮女春殿は非常の力あるなり。若し之を三句一意とのみ解するときは、何等の妙味無し。

千○秋○題○書○  
公○亦○微○時○是○牧○童○  
森○春○濤○

第一七章言絶句

煙○雨○滿○村○春○變○雞○  
可○無○半○背○出○英○雄○  
此詩は轉句無しと雖も、意は即ち通ず。然れども煙雨滿村の文字なくんば、詩として何の趣味も無し。故に此一句ありて、始めて詩と云ふを得べき大切の文字なり。

(三) 前對格後對格及全對格

前對格とは起承二句を對句とするなり。青山に對する白水、白雲に對する明月の如き、之を對句と云ふ。

山○店○  
登○山○路○何○時○盡○  
風○動○葉○聲○山○犬○吠○  
決○決○溪○泉○到○處○聞○  
一○家○松○火○隔○秋○雲○  
これ即ち前對格にして、登々たる山路と決々たる溪泉、何時と到處、

成大詩作

盡と聞と字々相對す。起句の平仄、轉句の如くにして且押落と稱し韻を押まざるは前對格の正則なり、或ひは押落ならざるもあり。

舟行 蕭蕭落葉送殘秋  
今夜不知何處泊 斷猿晴月引孤舟

此詩の如きは前對格にして、起句も韻を押めり。後對格は轉結二句を對にするものにて、

寒食汜上作 廣武城邊逢暮春  
落花寂寂啼山鳥 楊柳青青渡水人

の如き是なり。斯く對語を以て結ぶを對結と稱す。後對格は前對格に比すれば、一層作り難きものなり。何となれば對句を以て、意を

第一七章言絶句

轉じ且つ收束をなさざるべからざればなり、若し漫然として對語を下せば、遂に一篇の意を結ぶ能はざるべし。四句全對格は、起承及び轉結共に對句を以て作るなり。

同武平一遊湖 曠鵬竹影蔽巖扉  
舟尋綠水宵將半 月隱青林人未歸

起承は竹影と荷風とを對して、良夜の景を叙べ、轉結は舟遊の興に乗じて、人の歸る遲きを云ひ、對結甚だ巧みなり。

絕句 兩個黃鸝鳴翠柳  
一上青天 聲含西嶺千秋雪  
門泊東吳萬里船

前詩は全對格にして起句に押韻あれども、此詩は押落なり。一讀せ

しところ、漫然所見を述べたるが如く、起承轉結の位置に意を注がざるが如くなれども、是杜甫が久しく蜀の成都嚴武の幕下にありて、東吳に遊ばんと欲する意あるときの作にして、黃鸝の翠柳に鳴くは、身の一所に淹滞せるに比して歎するなり、白鷺の青天に上るは、其飛翔自在を羨み、遠遊の意を示すなり。西嶺は、蜀の名山峨眉にして、山上の積雪消るときなきは、戰亂相續で、寇賊の滅びざるに比し、亂世のため道途梗塞して、遊意の果し難きを慨し、而して門前には蜀より東吳に往來する船あるを、空しく望見するのみにと、無限の感想を述べて、一篇の收束となす。全對格の詩も此の如く、用意周到なれば可なり。徒らに對語を排列するのみにては、何の價値もなかるべし。

(四) 古人の作例

七言の句は、二字二字三字と重疊して作るを通則となす、例へば、  
 落(字)鳥啼(字)霜滿(字)天(字)の如し。或ひは多少の變化あるも、圓熟  
 巧妙を極めざれば、誦し難きものとならん。  
 用語は陳腐を嫌ふと雖も、人の目に慣れざる生硬の熟字も亦不可なり。青山、白水、黄金、白髮の如きは數千年來用の來る語なれども、  
 用法の如何によりて、斬新なるものとなるべし。  
 同じく『あをし』といふ字にても、青蒼碧等皆其用法を異にす。青  
 苔は生氣を含みて清らかなる苔なれども、蒼苔は老いて荒れたる藓  
 などの物淋しきさまを形容するに用う。  
 紅涙は兒女の涙に用うべきも、男子には不可なり。赤心、丹心はあ

かき心、まごゝろの義に用うれども、紅心とは使ふべからず。山中の景色には白雲明月を用うべきも、水上の景色は碧雲明月を可とす。此の如きは古來慣用の熟字にて、之を濫用すれば詩にならざるなり。

獨り詩のみにあらず、日常の談話、文章の上にて、古來の慣用を破りて、誤まりたる語を使へば、他人の解し難きもの多かるべし。されば物徂徠も詩文を以て、小子輩修辭の資となすと云はれたれど、無用の小枝とは云へ、詩を學ぶは、熟語の用法を練習するに於て最も必要のことなり。

夕陽、斜陽はあれども、暮陽晚陽とは云ふべからず。而して晚暉、斜暉、夕暉は用う。啼鳥といふ熟字あれども、鳴鳥は俗にして用うべからず。故に鳥啼花落を鳥鳴花落とは用ひ難し。人民と云ふは多

くの場合に於て使はるゝも、社稷民人と云ふべきを、社稷人民と云へば俗に聞ゆ。これらの例は文字の道理上より定まれるものにあらずして、全く慣習の上より自然に馴致せられしものなり。詩を學ぶは先づ第一に熟語の用法を知ること肝要にして、其結果は文章の上にも、談話の上にも非常の影響を及ぼすべし。支那文學を修めんと欲するに、詩を以て階梯とすること亦宜ならずや。

李白の越中懷古に、越王勾踐破吳歸と起し、義士還家盡錦衣と承け、宮女如花滿春殿と轉じてあるが、其用語の穩貼にして、精彩あるは最も後人の規矩とすべきものなり。先づ越王勾踐と特筆大書したるは、正々堂々として莊重犯すべからざる威容を示し、軍勝つて勢盛んなる光景宛然目にあり。義士の字に就て或は曰く戰士の誤ならんと、然れども戰士にては意味無し。越王と臥薪嘗膽の苦を共にして、

遂に國讐を滅したる忠義を表彰するために義士の字を用ひしものと解して、此詩の妙を語るべきなり。還家盡錦衣は、勳功によりて富貴の身となりしことを述べしものにて、君臣の義に依りて戦に勝ち國を興したるを稱揚せり。然れども錦衣の字に早くも驕奢の兆あるを示し、轉句は宮女花の如く春殿に満ちて、越王が志滿ちて聲色に耽り、亡國の素因を爲すことを慨せり。春殿の春は無用の如くなれども、花の字と相視して、其遊宴の盛を形容するに最も力ある文字なり。文字の用法は斯るところに注意すること肝要なるべし。故に此三句は、越王の論贊とも稱すべき大史筆にして、僅々二十一字の中、越王の堅忍不拔と、其臣の忠義とを歎美するに始まり、驕奢を以て國家を失ふに終り、春秋の筆法を以て、後の人君を警戒するの深意を寓せり。而して只今惟有「鷓鴣飛」の一句を以て結ぶところ、最も

沈痛を極めたり。名詞のみを用ひて句を作れば、雄健なりと雖も、堆疊の弊に陥り易し。例へば水村山郭酒旗風。銀鞍白馬羽林郎の如し。數句の中、一句は之を用ひ得るも、二句以上を連ねて名詞のみを用うるは困難なり。因て働詞を運用せざるべからず。綠樹重陰蓋四隣。山頭水色薄籠煙。の蓋、籠二字の知きはなり。詩の巧拙は多く此働詞の運用如何によりて判せらる、故に古人も之を字眼と稱して、最も工夫を練ることとせり。詩に助字を多く用うれば句勢自ら弱くなり易し。唐詩の雄健にして、宋詩の纖弱なるは、助字の多少其一因たり。然れども用語の操縦上、之を棄つれば堆疊窒塞して、活動の餘地無し。但し之を用うるとき、十分其意を明かにして、十分の力あらしむべきなり。

成大詩作

助字の力あるものは、大抵兩三句若くは全篇に涉りて、活動せるものなり。

初<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>諫<sup>司</sup>喜<sup>ニ</sup>家<sup>室</sup>至<sup>一</sup>  
一<sup>レ</sup>旦<sup>ニ</sup>悲<sup>歎</sup>見<sup>ニ</sup>孟<sup>光</sup>  
不<sup>レ</sup>知<sup>筆</sup>硯<sup>縁</sup>封<sup>事</sup>

十<sup>レ</sup>年<sup>辛</sup>苦<sup>伴</sup>滄<sup>浪</sup>  
猶<sup>問</sup>備<sup>書</sup>日<sup>幾</sup>行

これは寶群が久しく江湖に飄泊したる後、拾遺即ち天子の左右に在りて、諫争する職に擧げられて、辛苦を共にせし妻の來り伴ふを喜びて賦せるなり。一旦の悲歎は、昔の辛苦と、今の榮華と、今昔の感に堪へず、悲歎交も至りしなり。筆硯封事に縁るは、天子を諫むる上書を草するなり。されども妻は猶昔の備書して貨錢を得、米鹽の料に充てたる時代を忘れず。日に幾行づ、書き得るやと問ひたりとの意なるが、不知と猶問と此二虚字は相關聯して、此一篇の詩

句絶言七章一第

を成せり。若し此二虚字を除けば、全く何の意味もなきものとならん。

煙<sup>籠</sup>秦<sup>淮</sup>  
商<sup>女</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>亡</sup>國<sup>恨</sup>

夜<sup>泊</sup>秦<sup>淮</sup>近<sup>酒</sup>家<sup>牧</sup>  
隔<sup>江</sup>猶<sup>唱</sup>後<sup>庭</sup>花

これも不知、猶唱の二虚字によりて、組織せられしものなり。秦淮は今の南京即ち金陵に近き狹斜の地にして、古來酒家妓樓多し。金陵は亦宋齊梁陳歴代の帝都にして、陳の後主驕奢淫逸を事とし、玉樹後庭花の曲を作り、宮人に歌はしめしが、一朝國亡ぶるも猶之を唱ふるものあり。此詩秦淮に宿すれば、煙月の景、佳なりと雖も、帝王興亡の跡を弔すれば、感慨の涙禁する能はず、然るに妓女は亡國の恨も知らずして、陳の後主の後庭花を唱ふるは、猶一層のあは

成 大 詩 作

れを添ふとなり。若し不知、猶の字を用るざれば、此好詩は得難し。

水紋珍篋思悠悠  
從此無心愛良夜  
千里佳期一夕休  
任他明月下西樓

此詩は愛する所の婦人に別れたる恨を述べたるなり。水紋の珍篋は、波紋の涼しげなる竹席にて、夏夜月下之を敷き、愛婦と共に樂みしものが、今夜よりは獨寐の淋しく、良夜の明月を愛する心もなく、西に傾き落つるもまよよと、すてばちの氣味なり。而し從此、任他の虚字によりて十分に其意を云ひ現はせり。任他はサモアラバアレと訓じ、俗のマ、ヨ、勝手にせいと云ふ事なり。一任、遮莫など書するも皆同じ。此李益と云ふ人は、非常に嫉妬深き性質にて、妻妾の許に通ひ來る情人などありはせぬかと、毎夜戸側に灰を散じて、

句 絶 言 七 章 一 第

其足迹を檢せしと傳へられたり。されば婦人に對する情も一層強く、斯る詩を作りしものならん。

虚字の用法は、實に大切なるものにて、濫りに用うべきものにあらず。古人の詩を讀む毎に、能く精思すれば自ら其法を悟るべし。一句の中に對語を用うるときは、器用らしく見ゆるものなり。されども前後の關係に注意せざれば、特に一句獨立せるものとならん。例へば

縁君莫話封侯事  
一將功成萬骨枯

の一將と萬骨と相對して巧みなり。然し前に封侯の事を語すことなかれと云ふに接觸して益々巧を見る。

又一句中に字を疊むものあり。  
水自潺湲日自斜  
鐘儻煙籠寒水月籠紗  
杜牧



成大詩作

獨在異鄉爲異客。王維  
得寵憂移失寵愁。李商隱  
閑愛孤雲靜。愛僧杜牧  
不問蒼生問鬼神。李商隱  
これも多きに失すれば、巧を弄して却つて拙に陥ることあり。  
二句にして分割すべからざるものあり。

長信秋詞

奉帝平明金殿開。且將團扇共徘徊。  
玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。

此詩の轉結二句は、玉顔は寒鴉が昭陽の日影を帯ふるに及ばずの意にて、我邦の訓點を施して之を讀むときは、以て其一意にして分割すべからざるを知るべし。長信は漢の宮殿の名にて、班婕妤寵を趙飛燕に奪はれ、幽居せしところなり。奉帝は宮中洒掃の任に當らんとの意にて、婕妤の謙辭なり、婕妤又團扇の秋に至りて棄てらるゝ

第一七章言絶句

を詠じて、君恩の衰へしを歎く、起承二句共に婕妤の故事を用う。題名に對して用語の苟もせざるを見るべし。飛燕の妹亦昭儀となりて、成帝の寵を専らにし、昭陽舎に居る。故に婕妤自ら昭陽の餘恩寒鴉にまで及べるを羨むことを詠せしなり。此詩の如きは、轉結我邦の讀法によりて、分割すべからざるを知ると雖も、然らざるも轉結は多く一意にして、分割すべからざるを可となす。

其他言ふべきこと多きも、他の各項の下に分説すべし。

(五) 實接

實接、虚接は周弼の説に基くなり。其言に曰く、絶句の法は、大抵第三句を以て主となし、首尾率直にして婉曲なきもの、これ異時の唐に及ばざる所以なり、實事を以て意を寓し接すれば、轉換力あり、

斷るが如くにして續ぎ、外振起して内平妥を夫はず、前後相應す、四句に止るといへども、而も不盡の意を涵蓄すと、要するに轉句を以て主要となし、實事を以て起承二句に接續するを實接と云ふ。實事とは何ぞ、現在の事實なり。其例を左に擧ぐ。

宮詞  
金殿當頭紫閣重  
仙人掌上玉芙蓉  
太平天子朝元日  
五色雲車駕六龍

宮詞は宮中の事を詠するなり。王建は唐の大曆十年の進士にして、宦者王守澄の族弟たり。故に禁掖の故事を知ること多く、宮詞百篇を作る、是其一なり。金殿當頭紫閣重は、宮殿の上に高く天に聳えて、神仙を祭る壇を設けたるなり。仙人掌上玉芙蓉は、天上の露を取り、玉屑と稱する一種の薬に和して飲めば、不老長生を得べしと

て、其露を承くるために作る。漢の武帝と承露盤といふも是なり。其臺を稱して仙人掌と云ひ、上に玉盃を安んず、玉芙蓉は即ち是なり。朝元は元旦にして、其日は天子百官の賀を受けて、最も禮義を正すべき筈なるに、神仙荒誕の説に惑はされて、五色の雲車に駕し、何の用を成さんと諷刺の詩なり。五色の雲車は五彩を以て雲の形を畫ける車にして、神仙を祭る時に用ふ。六龍は六馬にして、天子の乘輿は六馬に駕す。詩意、漢の甘泉宮の事を借り、天子禮に違ひ怪を好むを譏るなり。禮に奇器は宮に入れず、君は奇車に乗らずと、況んや非禮の器を作り、非常の服食を爲し、以て不死を求め、鬼神の車服に御し、以て淫祀を事とするをや。太平の天子と云へるは所謂反語にして、其實惑ふて悟らざるを諷す。其字面は典雅にして婉曲、是詩の妙なり。一言の議論を着けずして、千言萬語の論奏に勝

成 大 詩 作

るもの、全く實事を用うるの巧みなるにあり。周弼が實接の典範として之れを取る、亦宜ならずや。

自<sup>○</sup>是<sup>○</sup>三<sup>○</sup>千<sup>○</sup>第<sup>○</sup>一<sup>○</sup>名<sup>○</sup> 内<sup>○</sup>家<sup>○</sup>叢<sup>○</sup>理<sup>○</sup>獨<sup>○</sup>分<sup>○</sup>明<sup>○</sup>  
芙<sup>○</sup>蓉<sup>○</sup>殿<sup>○</sup>上<sup>○</sup>中<sup>○</sup>元<sup>○</sup>日<sup>○</sup> 水<sup>○</sup>拍<sup>○</sup>銀<sup>○</sup>盤<sup>○</sup>弄<sup>○</sup>化<sup>○</sup>生<sup>○</sup>

此詩、芙蓉殿上中元日の句、前首の太平天子朝元日と句法、意味殆んど相同しく、實事を以て起承に接したるものなり。詩意は、宮女三千の中に第一と稱せられし美人が、中元の日に當り、他の宮女は何れも、宮中式禮のため天子の御宴に侍して、歌舞を奏するに、一人閑靜なる別殿に取殘されて、無事に苦む餘り、盤中の水に化生即ち人形を弄ぶと、恩寵無き宮女の薄命を賦せしなり。化生は七夕星祭りの時、蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮べて、産兒にうぶ湯

句 絶 言 七 章 一 第

を道はせる戯れを爲す、此事本西域より出で、摩喉羅と稱す。今七夕に弄ぶべきものを、中元に之を用う。益々以て其無聊を知るべきなり。内家は教坊の妓院内に在るものにして、獨分明は特に目立ちて嬌艶なるを云ふ。題の吳姬は、吳は美人を多く出すを以て、單に美人と云ふに同じ。蓋し宮女を借りて、士の才能を負ふて、不遇に終るを歎するなり。宮中第一の美人にして、天子の寵を受けず、徒らに人形を弄びて妙齡を過すは、士の大才を抱きて、朝廷に知られず、詩文の如き雕蟲の末技を事として、生涯無名の人となるに同じ。是亦一字の議論無くして、無限の感慨を寓し、而も文字の綺麗愛すべし。芙蓉殿は曲江の上において、天子宮女と遊宴を爲すところなり。

江南逢李龜年

杜 甫

成大詩作

此詩は前對格なり。岐王は唐の宗室にして崔九は顯貴の地位に在りし人なり。而して李龜年は玄宗帝の恩寵を蒙りし有名の伶人にて、岐王の邸にも屢々召されて、杜甫も平生相知り、崔九の邸に於ても、度々其奏樂を聞きしが、安祿山の亂に天子蒙塵して、蜀に幸し、宗室貴戚も流離落魄、況んや伶人の如きをや。僅に身を以て都を落延び、天涯に漂泊せし末、今日此江南に於て偶然邂逅するも、昔日の事を思へば、悲痛感慨限りなし。江南の山水は勝景多く、時節は春に屬して、最も賞すべきなれども、却つて斷腸の種となる、況んや此落花紛々人の心を傷ましむるをやと、悲涼悽慘の意を寓して、一涙字を着けざるは實に高手と云ふべし。起承二句は過去を叙し、之

岐王宅裏尋常見  
正是江南好風景  
崔九堂前幾度聞  
落花時節又逢君

第一七章言絕句

に接するに正是江南好風景と、目前の實景を以てす、亦實接の法なり。

贈彈箏人  
天寶年中事玉皇  
鈿蟬金雁皆零落  
會將新曲教寧王  
一曲伊州淚萬行

天寶は玄宗盛時の年號なり。玉皇は玄宗の事なり。寧王は玄宗の兄なり。此箏を彈する人亦前首の李龜年の如く、玄宗の朝に事へし伶人にて、其盛時には斯曲を以て寧王に教へしこともありしが、安祿山の亂にて、民間に流落し、樂器の如きも悉く散失し、多くの曲を彈する能はず、纔かに伊州の一曲を彈するのみなるが、之を聽きて、昔日の事を追想すれば、感涙萬行禁すべからずとなり。鈿彈は箏の裝飾にして金雁は箏柱、伊州は天寶中、西戎より都に傳へられし歌

成大詩作

曲の名なり。此詩前首杜市の作と意匠殆同じと雖も、自然の妙は杜に及ばざること遠し。而も文字の上に工夫を費せし痕迹見えたり。詩格の高下を知らんと欲せば、此等の作を比較して研究すべし。

花飛蝶駭不愁人  
曉日靚粧千騎女  
水殿雲廊別置春  
白櫻桃下紫綸巾

鄴宮は魏の曹操の都を建てし所にて、晉五胡の亂に、石氏、慕容氏、高氏相繼ぎて此に居り、就中石季龍の驕奢、常に女騎千人を以て齒簿となし、悉く紫綸巾、熟錦袴を着けしむ。此詩之を詠せしなり。詩意、花は飛び蝶は駭きて、春色既に盡くと雖も、人をして愁へしめず。何となれば水に接し雲に連りたる輪奐宏壯なる宮殿の中には、別に一種の春色を貯へ置けばなり。さて其春色とは何ぞや、曉日に

第一七章言絶句

盛粧せる千騎の美人隊が、紫綸巾を冠して白櫻桃の花の下に整列せるは、目もさむるばかり美しく、千紅萬紫の芳艷を競ふに似たりとなり。櫻桃は初夏に花を開き、白色のもの其一種なり。曉日靚粧の句、即ち實事を以て起承に接せり。

愁雲漠漠草離離  
薄暮毀垣春雨裏  
太掖勾陳處處疑  
殘花猶發萬年枝

上陽宮は洛陽即ち今の河南府にありて、唐に東都と稱し、則天武后一時此に居れり。太掖は宮中の池、勾陳は天子の殿前なり。詩意、昔天子后妃の住はれし上陽宮も、今は荒れ果て、愁雲漠々、亂草離々、何處が太掖やら、何處が勾陳やら、更に辨別し難く、日暮蕭々たる春雨の降り灑ぐ破垣の中に、冬青の花の淋しげに咲けるが、

纔かに昔の傍を殘すのみなりと、極めて荒涼の光景を寫し、言外に無限の悲みを寓せり。萬年枝は冬青樹にして、多くは宮中陵墓に植

過<sub>二</sub>綺袖宮<sub>一</sub> 玉樓傾側粉牆空 重疊青山遶<sub>二</sub>故宮<sub>一</sub>  
武帝去來紅袖盡 野花黃蝶領<sub>二</sub>春風<sub>一</sub>

綺袖宮は東都永寧縣の西にあり、玄宗の建る所なり。此詩亦前首と同じく専ら目前の荒涼たる光景を寫して、中に懷舊の情を寓す。玉樓は傾き粉牆は空しく、唯青山舊に依りて重疊、荒れ果てたる宮殿を圍み、玄宗帝の此世を去り給ひし以來、數多の宮女も悉く離散して、舊影を留めず。獨り黃蝶の野花に戯れて、得意氣に春風を領するのみと、目前の實景を寫して、悲涼限りなし。黃蝶は多く秋の蝶

に用うる意なれども、此處は春とは云ひ寂寥の景秋に似たるを以て用ゐたるならん。且つ青山紅袖、姿致映帶の上より、黃字可なり、蝴蝶、映蝶の意にては何となく落つかぬ心地すべし。太宗を文皇帝、玄宗を武皇帝と稱するは唐人の例なり。以上の詩篇皆轉句實字を以て上に接す。

(六) 虚接

周弼曰く、虚接は第三句虚語を以て、前兩句に接す。亦語は實といへども意虚なるものあり、承接の間に於て略轉換を加ふ。反、正と相依り、順、逆と相應じ、一呼一喚、宮商自ら諧ふ云云と。前項に比較して虚實の異を知るべし。

答三章丹

靈徹

韋丹官に在りて詩を作り、歸休の意を述べて靈徹に寄す。依て之に答ふるに此詩を以てせるなり。起承は年老い心閑にして、外事に牽かれず、麻衣草坐以て身を寄するに足ると、自己の境遇を言ひ、轉結は他の身上に及んで、さて在官者に相逢ふて、其語るところを聞けば、何れも官を罷め祿を辭して、林下に退隱せんと云ふと雖も、其實官祿に戀々として、真に急流勇退の計を決するもの無く、徒らに口にのみ清高を銜ふなり、能く林下に退きて、清風明月を樂むもの一人も見えずとなり。韋丹を諷する意最も切なり。相逢盡道休官去の語、想を設けて起承に接す、之を虚接となす。

江村即事

司空曙

年○老○心○閑○無○外○事○  
相逢盡道休官去

麻○衣○草○坐○亦○容○身○  
林○下○何○曾○見○一○人○

釣を罷めて歸來、船を繫がずして其中に打臥せば、恰も月落ちて眠るべし。たとへ風起りて、船を吹き去ることあるも、蘆花淺水の中に漂蕩するのみ、別に心を勞するほどの事無しと、何事も自然にまかせるといふ極めて樂天的の詩なり。縦然の虚字によりて、風の起ることを假想して意を成す、是虚接なり。不繫船の三字、既に轉結の準備を爲すところ亦注意すべし。要するに虚接は多く虚字を用ゐて、斡旋の妙を得るを要す。唐詩の佳なるものは實接多く、宋詩の妙は虚接に在り、兩者を比較せば思半に過るものあらん。

宮○人○斜○  
幾○多○紅○粉○委○黃○泥○

野○鳥○如○歌○又○似○啼○  
雍○裕○之○

罷○釣○歸○來○不○繫○船○  
縦○然○一○夜○風○吹○去○

江○村○月○落○正○堪○眠○  
只○在○蘆○花○淺○水○邊○

應<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>春<sup>レ</sup>魂<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>燕<sup>上</sup>。年<sup>〇</sup>年<sup>〇</sup>飛<sup>〇</sup>入<sup>〇</sup>未<sup>〇</sup>央<sup>〇</sup>樓<sup>上</sup>。  
宮人斜は長安の郊外にあり、多く宮女を葬るところなり。詩意、此處は生前紅粉を粧ひ、歌舞を事とせし數多の宮人が、死して黄泥に委棄せられしところなるを以て、塚上の野禽も歌ふが如く啼くが如く、相悲みて弔ふに似たりと、起承は其實景を詠じ、轉結は全く假想を寫す、曰く死者の幽魂年々春燕と化して未央宮に入りて棲むならんと、是れ實事にあらず、虚を以て接するなり。

東<sup>〇</sup>風<sup>〇</sup>扇<sup>〇</sup>扇<sup>〇</sup>汎<sup>〇</sup>崇<sup>〇</sup>光<sup>〇</sup>。香<sup>〇</sup>霧<sup>〇</sup>霏<sup>〇</sup>霏<sup>〇</sup>月<sup>〇</sup>轉<sup>〇</sup>廊<sup>〇</sup>。  
只<sup>〇</sup>恐<sup>〇</sup>夜<sup>〇</sup>深<sup>〇</sup>花<sup>〇</sup>睡<sup>〇</sup>去<sup>〇</sup>。高<sup>〇</sup>燒<sup>〇</sup>銀<sup>〇</sup>燭<sup>〇</sup>照<sup>〇</sup>紅<sup>〇</sup>粧<sup>〇</sup>。  
起承は春夜月下の景を寫して、崇光香霧等の字能く海棠を形容し、轉結、花の睡るを恐れて、銀燭を燒くと、假想の結構を用う。所謂

擬人法なり。

飲<sup>〇</sup>湖<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>初<sup>〇</sup>晴<sup>〇</sup>復<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>。山<sup>〇</sup>色<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>濛<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>亦<sup>〇</sup>奇<sup>〇</sup>。  
水<sup>〇</sup>光<sup>〇</sup>激<sup>〇</sup>澗<sup>〇</sup>晴<sup>〇</sup>方<sup>〇</sup>好<sup>〇</sup>。淡<sup>〇</sup>粧<sup>〇</sup>濃<sup>〇</sup>抹<sup>〇</sup>總<sup>〇</sup>相<sup>〇</sup>宜<sup>〇</sup>。  
欲<sup>〇</sup>把<sup>〇</sup>西<sup>〇</sup>湖<sup>〇</sup>比<sup>〇</sup>西<sup>〇</sup>子<sup>上</sup>。晴<sup>〇</sup>時<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>水<sup>〇</sup>光<sup>〇</sup>激<sup>〇</sup>澗<sup>〇</sup>、雨<sup>〇</sup>時<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>山<sup>〇</sup>色<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>濛<sup>〇</sup>、共<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>愛<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>べ<sup>〇</sup>し、恰<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>美<sup>〇</sup>人<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>淡<sup>〇</sup>粧<sup>〇</sup>濃<sup>〇</sup>抹<sup>〇</sup>何<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>相<sup>〇</sup>宜<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>如<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>と、西<sup>〇</sup>湖<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>以<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>西<sup>〇</sup>施<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>艶<sup>〇</sup>色<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>比<sup>〇</sup>す、亦<sup>〇</sup>假<sup>〇</sup>想<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>比<sup>〇</sup>喩<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>り。

三<sup>〇</sup>峽<sup>〇</sup>歌<sup>〇</sup>。船<sup>〇</sup>頭<sup>〇</sup>彩<sup>〇</sup>翠<sup>〇</sup>滿<sup>〇</sup>秋<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>。  
十<sup>〇</sup>二<sup>〇</sup>巫<sup>〇</sup>山<sup>〇</sup>見<sup>〇</sup>九<sup>〇</sup>峰<sup>〇</sup>。一<sup>〇</sup>夜<sup>〇</sup>猿<sup>〇</sup>啼<sup>〇</sup>明<sup>〇</sup>月<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>。  
朝<sup>〇</sup>雲<sup>〇</sup>暮<sup>〇</sup>雨<sup>〇</sup>渾<sup>〇</sup>虛<sup>〇</sup>語<sup>〇</sup>。巫<sup>〇</sup>山<sup>〇</sup>十<sup>〇</sup>二<sup>〇</sup>峯<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>三<sup>〇</sup>峽<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>り、然<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>ど<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>江<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>望<sup>〇</sup>見<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>得<sup>〇</sup>べ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>もの<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>九<sup>〇</sup>峯<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>過<sup>〇</sup>ぎ<sup>〇</sup>ず、秋<sup>〇</sup>空<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>當<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>彩<sup>〇</sup>雲<sup>〇</sup>嵐<sup>〇</sup>翠<sup>〇</sup>、船<sup>〇</sup>頭<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>壓<sup>〇</sup>す。宋<sup>〇</sup>玉<sup>〇</sup>神<sup>〇</sup>女<sup>〇</sup>の



り。紙は後漢の世に始めて製すと云へば、秦の時代は猶竹帛を以て典籍とせしならん。詩意、始皇儒者の古を師として今を譏るを憎み、天下の儒書を聚めて之を燒棄せしが、其煙燭の消すると共に始皇の帝業も亦滅亡し、關河寂寞として、始皇の宮殿は空しく鎖され、陵墓は人の顧みる無し。而して書を燒きたる灰燼、未だ冷かならざるに、陳勝、吳廣先づ亂を山東に唱へて、天下の英雄響應し、劉邦、項羽の如き元來書を讀まざる者なれども、共に兵を起して、秦を亡ぼせり。此に由て觀れば始皇が讀書人を恐れて、書を燒き儒を坑にせしは迂愚の極なりとなり。承句祖は始の義にして、龍は帝王の象、祖龍は始皇の隱語なり。史記に、明年祖龍死せんと始皇果して崩す。劉邦は漢の高祖にて、儒者を賤んじ、馬上安んぞ詩書を事とせんと云へり。項羽も亦少時大言して曰く、書は姓名を記するに足ると、

此二事を引きて劉項元來書を讀まずと云ふは、能く故事を融合したるものと云ふべし。

折○載○沉○沙○鐵○半○銷○  
東○風○不○與○周○郎○便○  
自○將○磨○洗○認○前○朝○  
銅○雀○春○深○鎖○二○喬○

赤壁は、吳の周瑜が、火攻の奇策を以て、曹操の大軍を敗りしところなり。東風實は東南風なり。詩に於ては文字の省略此の如きは妨げなし。二喬は當時美人の姉妹にて、姉を大喬と呼び、妹を小喬と呼び、大喬は孫策の妻となり、小喬は周瑜に嫁す。曹操曾て鄴都に於て銅雀臺を築き、多く美人を貯ふ。詩意、赤壁の古戰場に來りて、摧折せる矛戟の、沙中に埋没せるを拾得したれど、鐵質半銷毀して、何物たるを知らず。自ら泥を除き洗磨して、纔に前代の舊物たるを

賦を作りて、朝に雲となり暮に雨となることを説くと雖も、實は荒唐の妄談にして唯月下猿聲を聞くのみ、豈真に神女なるものあらんやとの意にて、乃ち神女の賦を借りて、意匠を成す。  
以上諸篇轉句皆想像上より結構を成して、實事にあらず。以て虚接の何たるを知るべし。

(七) 用事格

周弼曰く、詩中事を用うれば既に窒塞し易く、況んや二十八字の間に於てをや。尤も堆疊を難んず。若し融化せざれば、事を以て意と爲し、更に加ふるに輕卒を以てすれば、即ち里謠巷歌に隣すと、典故を引き詩を作るの難きを云ふなり。  
後人詩を作る、故事を引用せざれば、讀書力無しとして之を輕んず。

然れども故事を用うるには、牽合附會を嫌ふ。融化自然の妙を得ざれば、却つて用ゐざるの勝れるに若かず。試みに盛唐諸家の絶句にして、人口に膾炙せるもの、故事を引かざるの作多し。學者宜しく意を此に致すべきなり。

周弼用事として擧ぐるもの十一首、中に就て焚書坑、赤壁、秦淮等は古跡憑弔の作にして勢ひ其當時の事を用ゐざるを得ず。此に據れば懷古、詠史等の詩は皆用事格なり。左に掲げて示さん。

焚書坑 竹帛 煙消 帝業 虛 關河 空 鑽祖 龍居  
坑 灰 未 冷 山 東 亂 劉項 元 來 不 讀 書  
焚書坑は長安の傍なる驪山にあり。秦の始皇が書を焼き儒を坑にせしところなり。古は紙無く、竹を編み帛に書し、以て書史となせしな

成 大 詩 作

り。紙は後漢の世に始めて製すと云へば、秦の時代は猶竹帛を以て典籍とせしならん。詩意、始皇儒者の古を師として今を譏るを憎み、天下の儒書を聚めて之を焼棄せしが、其煙燭の消すると共に始皇の帝業も亦滅亡し、關河寂寞として、始皇の宮殿は空しく鎖され、陵墓は人の顧みる無し。而して書を焼きたる灰燼、未だ冷かならざるに、陳勝、吳廣先づ亂を山東に唱へて、天下の英雄響應し、劉邦、項羽の如き元來書を讀まざる者なれども、共に兵を起して、秦を亡ぼせり。此に由て觀れば始皇が讀書人を恐れて、書を燒き儒を坑にせしは迂愚の極なりとなり。承句祖は始の義にして、龍は帝王の象、祖龍は始皇の隱語なり。史記に、明年祖龍死せんと始皇果して崩す。劉邦は漢の高祖にて、儒者を賤んじ、馬上安んぞ詩書を事とせんと云へり。項羽も亦少時大言して曰く、書は姓名を記するに足ると

句 絶 言 七 章 一 第

此二事を引きて劉項元來書を讀まずと云ふは、能く故事を融合したるものと云ふべし。

折<sup>○</sup>戟<sup>○</sup>沉<sup>○</sup>沙<sup>○</sup>鐵<sup>○</sup>半<sup>○</sup>銷<sup>○</sup> 自<sup>○</sup>將<sup>○</sup>磨<sup>○</sup>洗<sup>○</sup>認<sup>○</sup>前<sup>○</sup>朝<sup>○</sup>  
東<sup>○</sup>風<sup>○</sup>不<sup>○</sup>與<sup>○</sup>周<sup>○</sup>郎<sup>○</sup>便<sup>○</sup> 銅<sup>○</sup>雀<sup>○</sup>春<sup>○</sup>深<sup>○</sup>鎖<sup>○</sup>二<sup>○</sup>喬<sup>○</sup>

赤壁は、吳の周瑜が、火攻の奇策を以て、曹操の大軍を敗りしところなり。東風實は東南風なり。詩に於ては文字の省略此の如きは妨げなし。二喬は當時美人の姉妹にて、姉を大喬と呼び、妹を小喬と呼び、大喬は孫策の妻となり、小喬は周瑜に嫁す。曹操曾て鄴都に於て銅雀臺を築き、多く美人を貯ふ。詩意、赤壁の古戰場に來りて、摧折せる矛戟の、沙中に埋没せるを拾得したれど、鐵質半銷毀して、何物たるを知らず。自ら泥を除き洗磨して、纔に前代の舊物たるを

成大詩作

認知せり。さて此一物によりて、史上有名なる赤壁の大战を想ひ起したるが、當時周瑜に奇策ありと雖も、若し東北風起らずんば、如何にして曹操を破らん。周瑜の勝ちたるは、東北風の助に依るのみ。されば此風無きに於ては、曹操は直ちに進んで、吳軍を破り、大喬小喬の二美人を奪ひ、鄴都に携へ歸り、銅雀臺の深き處に貯へ置くならんと、春の字は李白の宮女如花滿春殿の春と同じく、事美人に關するを以て、情趣を添ゆるために用ゐしなり。議論は頗る奇想に屬すと雖も、詩に於て言ふべく、文に於て言ふべからず。要するに正論にあらざるべし。

集靈臺  
號國夫人承主恩  
却嫌脂粉汚顏色  
淡掃蛾眉朝至尊

平明騎馬入宮門  
張祜

第一七言絕句

集靈臺は華清宮中に在り、玄宗の作るところなり。漢にも集靈宮ありしが、此に詠ずる所と異なり。號國夫人は韓國秦國二夫人と共に、楊貴妃の姉妹にして、貴妃に資縁し、顯榮の地に列す。而も寵を恃み、色に誇りて、素面天に朝せり。婦人にして叨りに封爵を受るは僭なり。故に起手號國夫人と特書して其罪を明かにす、春秋の筆法なり。且つ曉天馬に騎りて、宮門に出入するは、三公九卿の事にして、兒女子の爲さるる所、夫人の意氣揚々として之を爲すは、公卿を侮蔑して禮を知らざるなり。脂粉を施さずして、天子に謁見するは、美色を恃みて驕傲憚る所なきなり。通篇婉曲にして、一の激語なきも、痛快骨を刺すの妙あり。然れども是直ちに號國夫人を詠するものにして、周弼が用事格の例として取るの意解すべからず。唯詠史の作として觀るべきのみ。或ひは此詩を以て杜甫の作るもの

と爲す。蓋し然らんか。

題 桃花夫人廟  
細腰宮裏露桃新  
至竟息亡緣底事

脉脉無言度幾春  
可憐金谷墜樓人

桃花夫人は息夫人なり。息は周末の一小國にして、楚の亡すところとなれり。而して其夫人美色のため虜はれて楚王に寵愛せらるゝこと多年、子女を生むと雖も、亡國の怨を懷きて、遂に楚王と語を交へず。細腰宮は楚王細腰を好みて、宮中餓死多しの語に基き、楚の宮殿を指す。露井の桃花を以て、息夫人の艶色に比せしなり。脉々言無く幾春を度るは、息夫人の楚王と語らざるを云ふ。而して息國の亡ぶるは何事に依ると云へば、楚王色を好みて、夫人を得んと欲するがためなり。即ち夫人の艶色は息國の禍本なれば、夫人たるも

の、何ぞ生を敵國に偷むことを爲さん。須らく自ら引決して、息國の奮恩に報すべきなり。然るに楚王の寵を承け、子女を生むとは、其貞節に於て大に議すべし。此に比すれば晋の石崇の侍妾綠珠の如き、其の艶色のため石崇議を蒙り、害に遭ふ時に及び、身を樓下に投じて、石崇の死に殉したる節義大に賞すべしと、綠珠を引ききて、息夫人に反襯せしむ。是用事の好例となす。金谷は石崇の園名なり。

秦築長城  
焉知萬里連雲勢

蕃戎不敢過臨洮  
不及堯階三尺高

秦の始皇萬里の長城を築きて、鐵石の堅牢に比したるが、匈奴も之を憚りて、爾來臨洮の地を過ぎて、中國を侵すことなし。然れども始皇長城を築くがため、數十萬の徒卒を發して、民の疾苦を問はざ

成 大 詩 作

るにより、衆怨を招きて、其社稷を亡ぼすに至れり。之に反して堯は土階三等、茅茨剪らずして、能く天下を治む。萬里雲に連る長城は却つて堯の土階に及ばずと、國を守るは山河の固にあらずして、徳に在りの理を説けり。

(八) 拗 體

七言絶句平仄の定式は既に述べたるが、拗體と稱して破格のものあり。其例は左の如し。

上皇西巡南京歌  
誰道君王行路難  
六龍西幸萬人歡  
地轉錦江成渭水  
天迴玉壘作長安  
出塞曲  
賈至

句 絶 言 七 章 一 第

萬里平沙一聚塵  
傳道五原烽火急  
南飛羽檄北來人  
此二首前半は仄起の格にして後半は平起の格の平仄を用う。又平起の格にして、後半は仄起の平仄を用うるものあり。然れども一句の中、第二字と四字と同じからず、第二字と第六字と相同じく、所謂二四不同、二六對の法は犯さるなり。次に一句の中の平仄全く近體と異なるものあり。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵  
故人西辭黃鶴樓  
煙花三月下揚州  
孤帆遠影碧空盡  
惟見長江天際流  
此詩の第一句、故人の人の字は、宜しく仄なるべくして平なり。知らざるものは失聲と爲さんが、實は全篇拗體の詩なり。黃鶴樓も實

成大詩作

は仄仄平なるべくして平仄平なり。天際流も然り。碧空盡も宜しく  
平仄平なるべくして仄仄平なり。是れ天際流の平仄平と相對して、  
碧天の二字の平仄を相交換せるなり。要するに古詩の聲調を帯びて、  
尋常の近體と異なるところあり。

滁州西澗  
獨○憐○幽○草○澗○邊○生○  
春○潮○帶○雨○晚○來○急○  
野○渡○無○人○舟○自○橫○  
上○有○黃○鸝○深○樹○鳴○  
舟自横の平仄平、晚來急の仄仄平は、正格の仄仄平、平仄平と同じ  
からず、猶拗體の部に屬すべきものなり。

旅望  
白○草○原○頭○望○京○師○  
黃○河○水○流○無○盡○時○  
李○頎○

第一七章言絶句

秋○天○曠○野○行○人○絕○  
馬○首○西○來○知○是○誰○  
此詩に至りては京、流、盡、無、知、五字の平仄近體に入らず、

贈楊鍊師  
道○士○夜○誦○蕊○珠○經○  
夜○深○經○盡○人○上○鶴○  
白○鶴○下○繞○香○烟○聽○  
天○風○吹○入○秋○冥○冥○

近體の平仄を以て、此等の詩を律すれば、一句として格に入るもの  
なし。  
要するに此の如き拗體は、古意古調を帯びて始めて可なるものなり。  
开を知らずして漫りに作るべからず。其詳細は更に古詩平仄の部に  
詳論すべし。

(九) 仄韻の詩

第一 章 七言 絕句

右の諸作を以て、近體絶句の定式と比較せば、思半に過るものあらん。白樂天の集中には、往々仄韻にして、近體の絶句と相同じきものを見れども、以て準則となすべからず。之を要するに仄韻の絶句は、必ず拗體なるべく、拗體は必ず古意古調なるべしといふ事を記憶すれば足れり。

日午獨覺無餘聲  
山童隔竹敲茶臼

清溪道士不識  
上天下天鶴一隻

洞門深鎖碧窓寒  
滴露研朱點周易

步虛詩  
上天下天鶴一隻

作 詩 大 成

七言絶句の正體は必ず平韻を用うべし。若し仄韻を用うるときは、其平仄の式、尋常の絶句と同じからず、三體詩側體の部に左の作例を擧げたり。

營州歌 營州少年愛原野  
胡兒十歲能騎馬  
後半は絶句にして、近體の平仄に合するも、前は全く古詩の調なり。

獨山家 獨山家 歇還涉  
主人語未開門  
南州夏晝偶作 醉如酒  
隱几熟眠開北牖

茅屋斜連隔松葉  
繞籬野菜飛黃蝶  
長孫佐輔

營州少年愛原野  
胡兒十歲能騎馬

獨山家 歇還涉  
主人語未開門



第二章 五言絶句

(一) 平仄の式

五言絶句は起句に韻を押まず、其の平仄は、七言の上二字を除去したるものとして可なり。例へば

|   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 起 | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ● | ● |
| 轉 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 起 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 平 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 起 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 轉 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 承 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 結 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

の如し。而して第一字は平仄を變ずることを得るも、第二字は孤平

成大詩作

仄起格

起 ● ○ ○ ○ ○ ● ● ●

轉 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

起 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

承 ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ●

結 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

第二章五言絶句

を嚴禁する七言の第四字の如し。例へば○○○○○を變じて●○○○  
 ●○と爲すことを得るも、●○○●○と爲すを得ず。然も第三字の  
 仄を平となすは拗體に入るの第一歩にして、既に正格にあらざれば、  
 容易に動かすを得ざるものなり。

題袁氏別業  
 主人不相識  
 莫謾愁沽酒  
 偶坐爲林泉  
 囊中自有錢  
 賀知章

此詩の起句は、不相の二字平仄を轉換したるなり。

これは天の字仄なるべくして平なるも、未だ拗體と云ふべからざる

夜送趙縱  
 趙氏連城壁  
 送君還舊府  
 由來天下傳  
 明月滿前川  
 揚燭



第二十五章 絕句

以上は其一斑に過ぎずと雖も、近體の平仄と全く別なるを知るべし。  
 時には近體の平仄と相同じき仄韻の五絶あるも、極めて稀にして、  
 猶古調を帯び、古樂府若くは俗謠に似たり。

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

春○自○  
 巖○深○  
 淨○松○  
 泉○響○  
 月○步○  
 歸○廣○  
 化○寺○

成 大 詩 作

不○日○ 古○結○ 返○空○ 日○相○  
 知○夕○ 鹿○城○ 廬○孟○ 景○山○ 鹿○暮○ 送○臨○  
 松○見○ 非○古○ 城○入○ 不○飛○ 臨○高○  
 林○寒○ 柴○疇○ 城○坳○ 深○見○ 柴○鳥○ 高○臺○  
 中○山○ 昔○下○ 林○人○ 還○臺○

但○便○ 今○時○ 復○但○ 行○川○  
 有○爲○ 人○登○ 照○聞○ 人○原○  
 響○獨○ 自○古○ 青○人○ 去○杳○  
 霞○住○ 同○來○ 裴○語○ 同○不○ 何○王○  
 跡○客○ 往○上○ 上○響○ 息○極○ 維○

但○便○ 今○時○ 復○但○ 行○川○  
 有○爲○ 人○登○ 照○聞○ 人○原○  
 響○獨○ 自○古○ 青○人○ 去○杳○  
 霞○住○ 同○來○ 裴○語○ 同○不○ 何○王○  
 跡○客○ 往○上○ 上○響○ 息○極○ 維○

但○便○ 今○時○ 復○但○ 行○川○  
 有○爲○ 人○登○ 照○聞○ 人○原○  
 響○獨○ 自○古○ 青○人○ 去○杳○  
 霞○住○ 同○來○ 裴○語○ 同○不○ 何○王○  
 跡○客○ 往○上○ 上○響○ 息○極○ 維○

但○便○ 今○時○ 復○但○ 行○川○  
 有○爲○ 人○登○ 照○聞○ 人○原○  
 響○獨○ 自○古○ 青○人○ 去○杳○  
 霞○住○ 同○來○ 裴○語○ 同○不○ 何○王○  
 跡○客○ 往○上○ 上○響○ 息○極○ 維○

昭君玉鞍  
今日漢宮人  
上馬啼紅頰  
明朝胡地妾  
此詩の如きは仄韻にして、平仄近體に協ふと雖も、語意共に淺く、極めて不用意の處、自然古調を帶ぶるものなり。太白に此例あるをもて、仄韻の詩も必ず近體の平仄を用うべしとするは大に非なり。

(二) 古人の作例

五言の句は、二字を増して七言と爲すべからざるを要す。猶七言を減じて、五言と爲すべからざるが如し。若し増減し得るものなれば、字句に無用若くは不足のところある證據なり。五言絶句は語短うして意長く、言外に餘情あるを貴ぶ。一句を練ら

んよりは、先づ全篇の着想に就て工夫を要す。古人の佳作は、多く四句一意にして分割すべからざるの妙あり。例へば

伊州歌  
打起黃鶯兒  
啼時驚妾夢  
不不得到遼西  
無名氏  
莫教枝上啼  
不不得到遼西  
の如き、全首殆んど一句として讀むべし。詩意は言文一致とも云ふべき、極めて淺近の語なれども、餘情は脈々として、閨閣の少婦が遠征の良人を慕ふ心の切なるを想ふべし。而も四句鐵釘を以て、板に打付けたるが如く、彼此移動すべからず。若し之を移動すれば全篇の意破壊せられて、不通のものとなるべし。

春眠不覺曉

處處聞啼鳥  
孟浩然

成 大 詩 作

夜○來○風○雨○聲○

花○落○知○多○少○

これを常語に譯すれば『春の朝、曉も知らずに寝過して、枕頭に朝日のうら／＼とさしこむ頃、フト目をさませば、窓外の處々に鳥の啼く聲頻りなり。好天氣の事と思はるれど、昨夜來風雨のありし容子なれば、折角咲きたる花も多少散りたるならん』となり。起承二句は現在を言ひて、轉句に過去の記憶を述べ、結句に落花の多少の想像を寫す。四句の變化は此の如しと雖も、其布置構結は、一句の移動を許さざるなり。而も一意連串して、字句を増減すべからず。五絶の作法は此等の詩より悟入すべし。

勸○君○金○屈○卮○  
花○發○多○風○雨○

滿○酌○不○須○辭○  
人○生○足○別○離○

于武陵

句 絶 言 五 章 二 第

此詩花發きて風雨多しの一句を除き、君に勸む金屈卮、滿酌辭するをもちあらず、人生別離足るの三句のみにて、意は即ち通す。屈卮は把手のある盞にして、之になみ／＼と酒を酌み、君に勸むるが敢て辭するを止めよ、人生は會者定離、斯く相遇ふて快談する機會も少ければ、十分に飲みて興を盡すべしとなり。されどもこれのみにては、日常の談話其まゝにして、何の餘情無し。故に花發きて風雨多しの一句を挿入し、好事魔多く、快友は遇ひ難しの意を述べ、突然別意の如くなれども、其實人生別離足るの句をして、餘情あらしむるに最も力あり。

美○人○捲○珠○簾○  
但○見○淚○痕○濕○

深○坐○蟬○蛾○眉○  
不○知○心○恨○誰○

李 白

成 大 詩 作

これも美人の愁容を見たるまゝに寫したるものなれども、無限の情趣を含めり。措語の上に就て云へば、此美人の貴族的なること、珠簾の二字にて盡せり。深坐の語窈窕嫺雅の態を現はして、深閨の淑女なるを知るべく。試みに深坐に代ふるに他の字を以てせよ、獨坐と云へば山寺の老僧、田野の閑人に似たる嫌ひあり。靜坐と云へば平凡に失して甚だ拙なり。默坐、孤坐、端坐何れも不可なり。但見の但は、不知の字と相對して、虚字の用法最も妙を極めたるもの。是亦他の字を以て代ふべからず。要するに全首二十字悉く自然に凝結して成りたるもの、如く、毫髮の投すべき間無し。是に至りて人力か天工か、得て辨ずべからざるの妙處あるを知るべし。李滄溟、太白を評して、五七言絶句に至りては、實に唐三百年一人なり、蓋し不用意を以て之を得たり、即ち太白も亦自ら其至る所を知らざりし

句 絶 言 五 章 二 第

ならんと、嘆美したるが、不用意にして自然の妙に至るもの、絶句の上乗なり。杜甫に至りては、絶句を作るにも、多少の學力を用ゐ、多少の工夫を要す、故に自然の妙に至るもの甚だ少し。

武侯廟  
遺廟丹青落  
猶聞辭後主  
空山草木長  
不復臥南陽

此詩の如き平仄は今體の正格なり。四句全對にして用意甚だ巧みなり。廟内の粧飾たる壁畫も丹青剥落して、廟外の草木は森然として繁茂し、幾百年の星霜を経たるや知るべからず。而して廟に祀られたる諸葛孔明其人は、漢室の恢復を志して、出師の表を上り、蜀の後主に辭し、幾たびか魏を伐ちたるも、遂に意の如くならず、再び

成大詩作

南陽の舊廬に歸臥するを得ざりき。成敗利鈍は顧みる所にあらず、斃れて後已むと云ひたる志を察するに、實に悲むべきものありといふ意を以て作りし詩なれども、稍板重澁滯の弊あるに似たり。

江碧鳥逾白  
今春看又過

山青花欲然  
何日是歸年

これは他郷に在りて春色の佳なるに對し、故郷を思ふの念ますく切なるを詠じたるものにて、起承の對語、巧を極めたり。然れども不用意の作と云ふべからず。要するに太白の絶句は、自然化成せるもの、如く、實に天工なり。杜甫に至りては、猶人工たるを免れず。詩を作るもの、此等の區別を知らざるべからざるなり。

題齊安壁

王安石

句絶言五章二第

此詩は四句全對にして、毎句眼前の景を叙したるのみ、別に意匠無く、律詩の前後を截去して、中間四句を取りたるもの、如し。

日淨山如染  
梅殘數點雪

風暄草欲薰  
麥漲一溪雲

梅花

王安石

牆角數枝梅  
遙知不是雪

凌寒獨自開  
爲有暗香來

暗香あるがために、雪にあらずして梅花たるを知ると云ふ頗る平凡の作なれども、宋詩の五絶として猶佳なるものなり。

西村  
遠近皆僧刹  
得魚無賣處

郭祥正  
西村八九家  
沽酒入蘆花

成大詩作

四邊皆僧刹に對して、魚を得るも賣る處無し、の句を案出せしものな  
らんが、これ宋詩の魔道に墮つるところなり。漁夫の風流なる生活  
を寫して、却つて殺風景となれり。

尋胡隱君  
渡水復渡水  
春風江上路

看花還看花  
不覺到君家  
高啓

明三百年唯一の好絶句、其妙は不用意を以て之を得るに在り。此等  
の詩は強て作らんと欲するも、容易に得べからざるものなれども、  
五言の佳處は、こゝに存することを知りて、作らざれば不可なり。  
總て五絶は承結二句にのみ韻を押しみて、起句は韻を用ゐざるが正格  
なり。七言の起承結三句に韻を押しむを以て正格とすると異なれり而  
して拗體に至りては、通韻を用うるも妨なし。

第二十五章 絶句

尋常の語、詩に入りて其妙此の如きものあり、之れを自然の天籟と  
云ふ。  
京師得家書  
江行無別語  
只道早還鄉  
家書十行  
袁凱

簡舒古廉  
君居我巷東  
三日春雨深

望見我家樹  
相思落花暮  
吳錫麒

家相近きも雨に阻せられて往訪するを得ざる事を得ざる、言外に他を  
招くの意を寓す、極めて婉曲の筆にして又極めて風流の詩なり。





律言七章三第

此詩は起頭兩句全く平仄を拗せり。

爲預臺節 九日使君席奉餞衛中丞赴  
報知上使 漢霜橫行西出師  
君將威凌草木  
更正軍鳴 將是中殺擐  
絃胡氣甲 管座傍羽  
醉欲傍座 東滅旌兒  
籬時旗兒

此詩に至りては、腹聯と結聯と、位地を轉換して、始めて正格の式に合するものなり。

勿怨他鄉暫離別 知白無夜  
黃河曲裏沙爲岸 君馬那鐘  
只言啼鳥堪求侶 到津春殘  
高館張燈復清 處邊風月  
夜鐘殘月雁歸聲

成大詩作

べし。但獨不見の三字は○●●ならざるべからざれども、此處に仄三連を用うるの例は甚だ多し。尤も多くは入聲を用う。此の如きは猶正格として見るべきも、以下示すは拗體なり。

銀燭朝天紫陌長 早朝大明宮呈兩省僚友  
千條弱柳垂青瑣 禁城春苑曉蒼蒼  
劍佩聲隨玉墀步 衣冠百轉流鶯響  
共沐恩波鳳池上 朝朝染翰侍君王  
玉墀の二字平仄を轉倒す、此の如きは句中の一字を拗するものなれども、結末の二句は全く平仄を轉換し。王維の此題に和する七律も、全く此と同じく末の二句を拗せり。

夜別韋司士

高適

成大詩作

前記の如き拗體は、初唐盛唐の作に於て甚だ多く、宋元明と時代の降るに従ふて、漸次見ること稀なり。今入に至りては斷じて之を許さず、蓋し唐初は近體の平仄未だ全く確定せざるがためならん。後世に至るに隨ひて、詩律益々嚴にして詩品は益々劣れり。李白の如きは全集中僅に十數首の七律、拗體七八首の多きに及べり。然れども後代の詩人として李白に勝るものなし。是に於てか知る、詩は其格調の高きを以て主となし、聲律の如きは、抑も末なるを。然れども今は此の法則を遵奉して作りしものにあらずれば、詩にあらずと爲す。故に之を論著すること爾り。

酌酒與裴迪  
白首相知猶按劍  
人情翻覆似波瀾  
朱門先達笑彈冠

律言七章三第

此詩の如きは四聯殆ど同一の一仄を用ゐたり。加之細雨濕、春風寒の三仄、三平を句尾に置くは、全く尋常の律詩と異なり。世或ひは下句に三平を用うるときは、上句に三仄を置きて相對すべしとて尋常の律詩にも之を用うるものあれども、开は拗體の何たるを知らざるなり。全體の上にて於て平仄を拗するものにあらずれば、漫りに之を用うべからず。

題省中院壁  
落花生白日靜  
腐儒衰晚謬通籍  
鳴鳩對雪常陰  
洞門對雪常陰  
退食遲回遠寸心

成 大 詩 作

衰・職・會・無・一・字・補・許・身・愧・比・雙・兩・金

杜子美の七律、此の如き拗體頗る多し。論者曰く、拗體式又之を變聲と云ふ、亦皆一定の平仄あり、平仄以て確指し難きも、音節以て熟按すべしと。又曰く七律の變此に至りて妙を極め、又此に至りて眞を極む。此山谷の所云繩削を煩はさずして自ら合するものなりと。又曰く、杜公夔州の七律、間拗體を用うるものあり、王有仲謂ふ、皆失意遺懷の作と。失意の作か得意の作か、得て知るべからざるも、規矩準繩の外に超脱して、其云はんと欲する所を云ひしなり。

鳳登金陵鳳臺  
吳宮花上草理幽徑  
三山半落青天外  
晉代衣冠成古丘  
二水中分白鹭洲

律 言 七 章 三 第

總爲浮雲能蔽日  
長安不見使人愁  
これは崔顥の黃鶴樓に擬して作りしものなるが、吳宮、晉代の一聯全く平仄を拗し、江自流、成古丘の如き平仄平を用ゐたるは、古詩の聲調を帯びたるものなり。  
宋に至りては、黃山谷の如き喜んで拗體の律を賦せり、

題落星寺  
星宮遊空何時落  
詩人畫山入座  
蜂房各自開戶牖  
不知青雲梯幾級  
著地亦化爲寶坊  
醉客夜愕江城床  
蟻穴或夢封侯王  
更借瘦藤尋上方  
平仄も此に至りては殆んど古詩と擇ぶところなし。更に古詩平仄の部を参照せよ。

(二) 對 聯

律詩の生命とするところは對聯にあり。對聯とは白日、青天又は落花、流水の如き對語を以て作り、二句を一聯と爲す。律詩は中四句必ず之を用う。例へば

登樓傷客心  
花近高楼客  
錦江春色來  
北極朝廷終  
可憐後主還  
右の錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今の一聯を頸聯又は前聯と云ひ、北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵の一聯を腹聯又は後聯と

と云ひ。之を合して中聯と稱す。律詩は必ず此中聯を有すべきものにして、これなければ律詩の資格を具備せざるなり。第一第二の句は起聯と稱するも、普通對句を用ゐず、若し之を用ゐるときは多く韻を押落しと爲す。左の例の如し。

望野三城戍  
西山白雪三  
海內風塵諸  
惟將遲暮供  
跨馬出郊時  
極目  
南浦清江萬  
天涯涕淚一  
未堪消埃答  
不堪人事日  
蕭條  
杜橋  
甫

これを雙起單結體と云ふ。  
又第一、第二は散句にして、第七、第八の句に對聯を用ゐたるものあり。

成 大 詩 作

見王監兵馬使。說近山有白黑二鷹。羅者久取。竟未得。  
 王以爲毛骨有異。他鷹恐。後春生。鷹飛避。暖。勁翮思秋  
 之甚。妙不可見。請余賦詩。二首。錄一。  
 雲飛立。玉盡清秋。在野。只教心力。破。不。惜。奇。毛。恣。遠。遊。  
 一。生。自。獵。知。無。敵。百。于。人。何。事。網。羅。求。  
 鵬。礙。九。天。須。却。避。兔。藏。三。窟。莫。深。憂。  
 これを單起雙收體と云ふ。對句を以て結ぶは、意最も慎密を要す。  
 又全首八句皆對聯より成るものあり左の如し。

登 高  
 風 急 天 高 猿 嘯 哀  
 無 邊 落 木 蕭 蕭 下  
 渚 清 沙 白 鳥 飛 迴  
 不 盡 長 江 滾 滾 來

杜 甫

律 言 七 章 三 第

萬里悲秋。帶客艱難。苦恨繁霜鬢。  
 百年多病。獨登臺。涼倒新停濁酒盃。  
 これを八句全對體と云ふ。雙起單結體は往々之あり、單起雙收體は少し、八句全對に至りては極めて稀にして、諸家の作中容易に見るべからざるものなり。蓋し作るとき難易の程度も之に準ず。  
 對聯は自然の妙あるを要す、漫りに牽合して作りしものは誦するに足らず。白雲千里に對する青嶂萬尋などの句を以てするも、唯文字の上より白雲と青嶂、千里と萬尋とを排列したるのみにて、白雲千里は自然の語なれども、青嶂萬尋は自然にあらず。卑近の例を以て云はんに、飛脚の脚の對に座頭の頭を以てしたるは語意自然の妙ありと云ふべし。馬車の馬に牛鍋の牛、黄金餅に白玉餡なども亦妙對なり。古人の詩中より句法の學ぶべき對聯を求むるに

律言七章三第

の如き是なり。湘潭雲盡以下の句は、第五字を拗したるものにて、唐の許渾の喜んで用ゐしところ、之を名けて許丁卯の句法と云ふ。

然れども杜子美既に

負鹽出井此溪女

打鼓發船何郡郎

などの句ありて、第五字を拗せり。敢て丁卯に始まりしものにあらざるなり。

雲○收○星○月○浮○山○殿  
 柳○梧○遠○近○千○官○塚  
 水○潭○雲○盡○朝○山○變  
 溪○聲○東○去○日○市○朝  
 殘○星○數○點○雁○橫○塞  
 雨○過○風○雷○繞○石○擅  
 禾○黍○高○低○六○代○宮  
 巴○蜀○雪○消○春○水○來  
 山○雨○勢○北○來○宮○殿  
 長○笛○一○聲○人○倚○樓  
 山○雨○勢○北○來○宮○殿

成大詩作

天○九○花○看○秦○遠○三○滄○金○日○渭○山  
 空○天○迎○院○地○樹○晉○海○關○色○水○色  
 絕○閨○劍○祗○故○依○雲○月○曉○纔○故○遙  
 塞○闔○佩○留○人○依○山○明○鐘○臨○都○連  
 聞○開○星○雙○成○如○皆○珠○開○仙○秦○秦  
 邊○宮○初○白○遠○送○北○有○萬○掌○二○樹  
 雁○扇○落○鶴○夢○客○向○淚○戶○動○世○晚

葉○萬○柳○入○楚○平○二○藍○玉○香○咸○砧  
 盡○國○拂○門○天○田○陵○田○階○煙○陽○聲  
 孤○衣○旌○唯○涼○渺○風○日○仙○欲○秋○近  
 村○冠○旌○見○雨○渺○雨○暖○仗○傍○草○報  
 見○拜○露○一○在○獨○自○玉○擁○袞○漢○漢  
 夜○冕○未○青○孤○傷○東○如○千○龍○諸○宮  
 燈○旒○乾○松○舟○春○來○煙○官○浮○陵○秋

前例は多く實境を寫したるものにて、之を實寫の聯となす。雄健、高雅若くは偉麗の句は、實寫に多し。情を寫すものに至りては、格調自ら卑弱に傾き易し。これ學者の最も意を用うべきものなり。杜甫の如き大家も、實寫のものと情を詠するものと 比較すれば、自然に此別あり、亦理の免れざるところならんか。然れども實寫のみを専らにして、情を詠せざれば堆垛窒塞して、流動の氣を缺くことあり。故に周伯弼四實、四虛、前實後虛、前虛後實の説あり。四實とは中聯四句悉く實寫を以てし、四虚は四句悉く情を詠じ、前實後虚は前聯は實寫にして後聯は情を詠じ、前虚後實は之に反するものなり。兩句一意にして對聯を爲すもの、これを流水對又は走馬對と稱す。例へば

已將心變寒灰後  
買栽池館恐無地  
豈料光生腐草餘  
看到子孫能幾家  
の如く、率然之を讀めば對句たるを覺えず、而して自然に對を爲すなり。流動靈活の妙はありといへども、動もすれば虚字に累はされ、文語と混じり易き弊あり。

(二) 杜律の諸體式

七律は杜子美の最も長ずるところなり。因て左に杜詩の中より作例を取りて、七律の體式を説明し、前二章の足らざるところを補はん。

涪縣城積寺官閣  
寺下春江深不流  
山腰官閣迥添愁  
舍風翠壁孤雲細  
背日丹楓萬木稠



成 大 詩 作

寺下の春江、山腰の官閣、對聯を以て起り。前聯の翠壁丹楓、孤雲萬木は、第二句の山の字を承けて其景を叙し。後聯の小院廻廊は官閣を承け、浴鳥飛鷺は起句の春江を説明し。結末は寺の字に接して結ぶ。これを立網分寫の法と云ふ。寺、江、閣、山の四字は、一篇の大綱にして、起聯兩句の中にあり。而して逐次之を分叙し、網立ち目舉りて、整然見るべし。

小○院○廻○廊○春○寂○  
諸○天○合○在○藤○蘿○外○  
浴○鳥○飛○鷺○晚○悠○悠○  
昏○黑○應○須○到○上○頭○  
臘○日○常○年○暖○尚○遙○  
侵○凌○雪○色○還○萱○草○  
歸○家○初○散○紫○宸○朝○  
漏○洩○春○光○有○柳○條○  
縱○酒○欲○謀○良○夜○醉○

律 言 七 章 三 第

例年臘日には暖氣未だ容易に生ぜざるが、今年の臘日は暖氣非常に早く、萱草は青色を還して、雪を凌ぎ、柳條は春光を洩して芽を出せりと、前半四句はたい氣候の例年に異なるを説く。而して張氏の説によれば、大寒の後必ず陽春あり、大亂の後に必ず至治あり。臘日にして暖、是れ寒極まりて而して春、治極まりて將に亂れんとするの象、詩特に表出すと。依て後半臘日朝廷の光景を説き、上に諷するところあるなり。然れども其語句前後錯綜して、解すべからざるものあり。蓋し口脂面藥は、臘日天子より賜はる例にて、唇又は面に塗り寒凍を防がしむ、ヒョグスリの類ならん。翠管銀罌は、西陽雜俎に盛るに碧鏤牙筩を以てすとある藥壺のことなり。九霄より下るは天子より賜はるを云ふ。乃ち後半の意味を釋すれば、朝臣の

口○脂○面○藥○隨○恩○澤○  
翠○管○銀○罌○下○九○霄○

成大詩作

列にある忝けなき、臘日の常例により、天子の恩澤を蒙り、翠管銀罌に盛りたるに脂面薬を宮中より賜はり、拜受して朝より退き、家に歸りて、良夜の一醉を謀ると。結聯より逆推して、第六、第五の句に及びて止む。作法最も奇なり。後に叙すべき事を前に叙す、之を倒挿化直の法といふ。化直とは直下に歴叙して、平凡に失し、板重の弊あるを救はんがため、故意に前後の位置を轉換するなり。特に歸家初散紫宸朝は紫宸朝散じて初めて家に歸るの意なれども、文字の位置顛倒して、頗る解し難し。これを倒裝の句と云ふなり。

傍人錯比楊雄宅  
懶惰無心作解嘲  
暫止飛鳥將數子  
楹林礙日吟風葉  
背郭堂成蔭白茅  
頻來語燕定新巢  
緣江路熟俯青郊  
龍竹和烟滴露梢

律言七章三第

これは變換避複の法なり。字の位置を變換して句法の重複を避るなり。起聯背郭成堂、緣江熟路に就て檢すれば背、成、緣、熟の四動詞は皆上にありて郭、堂、江、路の四名詞は皆下にあり。故に成堂、熟路の二語は字を顛倒して堂成、路熟と爲す。頸聯林礙日、葉吟風、竹和煙、露滴梢の四語皆同一の句法なり。故に之を變換して吟風葉、滴露梢と爲す。此法を知れば句法の重複を患へず。然れども古人金馬玉堂を變じて馬金堂玉と爲したる滑稽もあり。青松白沙を松青沙白とし、落花啼鳥を花落鳥啼の例に倣ひ、美人才子を人美子才とするも意通すべからず。腹聯は飛鳥數子を將ゐて暫く止まり、語燕新巢を定めて頻に來るの意なれども、句法亦新奇獨創なり。詩人此法を悟れば、平仄のために縛束せられて、何事も云ひ

成大詩作

得ざるの恨なかるべし。

十二月一日  
 即看燕子入山扉  
 短短桃花臨水岸  
 春來準擬開懷久  
 他日一盃難強進  
 豈有黃鸝歷翠微  
 輕柳絮點人衣  
 老去親知見面稀  
 重嗟筋力故山違

これは虚擬隔應の法なり。何をか虚擬と云ふ、燕子の山扉に入り、黄鸝の翠微を歴、桃花水に臨み、柳絮衣に點ずは、悉く是れ陽春三四月の景物にして、題の十二月一日と相適はず。應に來るべき春を豫想して、虚中に結撰したるものにて、眼前の實景にあらず。之を虚擬の法と云ふなり。而して春來準擬開懷久の一句を以て、前半四句の想像を點明す。準擬は俗の心構へなり、春にもならば襟懷を開

律言七章三第

暢して十分樂まんと待ち受くること久しの意なり。然れども老來故郷の親友知己の人々とも相遇ふこと稀にて、豫期せるほどの樂を得る能はざるを恐ると、感慨の意を寓す。一喜一憂交も至るの状想ふべし。句法の上より見れば第七句の一盃は第五句の開懷と相應じ、第八句の筋力の衰を歎じ故山と相負くは、第六句の老去親知と相應ず。即ち句を隔て、相應するを以て隔應法と云ふなり。第五句の春來準擬は、全首の關鍵にして、前半は實景の如くなれども實は虚なり。所謂空中の樓閣、無中に有を生ず。而して後半は喜中に憂あり變化自在、端倪すべからざる奇作と云ふべし。

曲江陪鄭八丈南史飲  
 雀啄江頭黃柳花  
 自知白髮非春事  
 且嬌鵲滿晴沙  
 且盡芳樽戀物華

成 大 詩 作

近侍即今難浪迹  
此身那得更無家  
豈傍青門學種瓜  
これは虚字運用法を示せり。律詩中虚字少くして、漫りに實字を以て充填するものは、板重粘滞して流動の致に乏し。されども虚字の用法宜しきを得ざれば、平弱に流れ易し。此詩起頭二句實字を多く用ひて、第三句以下虚字を用うるの準備を爲し、虚實相濟ふの法先づ成れり。之がため自知、且盡、即今、那得、難、更、猶、豈等の夥多の虚字を排列するも、平弱に失する患を免る。

所 思  
苦憶荆州醉司馬  
一柱觀頭眠幾回  
九江日落醒何處  
欲問平安無使來  
可憐懷抱向人盡

律 言 七 章 三 第

故憑錦水將雙淚  
好過瞿唐灩澦堆  
此詩腹聯の平仄を全く拗す。苦憶の二字全篇を貫きて、句々皆懷慕の情を詠す。因て之を一氣到底法と名く。可憐、欲問、故憑等虚字の運用亦妙を極む。第二句は司馬の謫地にありて、常に樽酒を開くことを云ふ、即ち醉司馬の醉の字を承くるなり。九江、一柱は荊州の地にして、醒、眠は醉字と呼應し、司馬の一醉一醒、且つ眠り且つ覺むる状を想ふべし。我懷抱人に向ふて盡き、無聊の餘り、司馬の安否を問はんとするも、使者無きを以て、雙淚空しく江水に落ち、思を千里の外に托すと、子美此時蜀に在るを以て、錦江を引きたるなり、瞿唐峽の灩澦堆は巫峽にありて、大江の險所なり。錦江大江に合し巫峽を過ぎ荊州に入る、起句荊州の字亦九江、一柱、錦水、瞿唐、灩澦の諸地名の總提たり。

これは先意後象の法なり前半は花落ちて春殘す宜しく落花を見て酒を飲むべしとの意を述べ、後半は翡翠麒麟の實景を借りて、人生行樂のみ何ぞ名利を求めんと歎息す。一片の花飛ぶすら春は既に幾分を減ず、況んや萬點の花落つるをや、何んか之を愁ひざらん、依て更に落花の終りまで看るべしと、以上三句一連落花を見て、春を惜むの情甚だ切なり。第四句漸く花を離れて酒の字を點じ、別に後半の結構を起す。然れども愁人の二字傷多と呼應して、針線極めて密

曲江飛却春  
一片花飛却  
且看盡花經  
江上小堂巢  
細推物理須  
何用浮名絆  
風飄萬點正  
莫厭傷多酒  
苑邊高塚臥  
此身

なり。小堂は曲江の傍芙蓉苑の中にあつて、天子の臨幸せられしところなれども、今や寂寞人無く徒らに翡翠の巢あるのみ。翳は耕にして赤き羽を有し、翠は青き羽を有せる小鳥なり。麒麟は石にて作り、貴人の墓上に立つるもの、地に倒れて塚に香火無し。王侯將相の富貴も、此等の光景を看れば、久しく待むに足らず、更に人世榮枯得失の理を推窮すれば、たゞ夫れ時に及んで行樂すべきのみ、何ぞ名利のために此身を羈束せらるゝを願はんやと、感慨無量、張季鷹の所謂我をして身後の名あらしむるは、生前一杯の酒に如かずとの意を申明せり。

曲江散雨  
城上春雲覆苑牆  
林花着雨臙脂濕  
江亭晚色靜年芳  
水荇牽風翠帶長

成 大 詩 作

龍○武○新○軍○深○駐○鞏○  
 何○時○詔○此○金○錢○會○  
 芙蓉○別○殿○漫○焚○香○  
 暫○醉○佳○人○錦○瑟○傍○  
 曲江は長安の名勝にして、春花開くとき士女群遊、最も繁華を極む。特に玄宗の盛時に當りては、四海太平、上下酣熙、天子曲江の芙蓉苑に幸して、上巳の日に金錢會を開くこと年々の例なり。金錢會とは、金錢を樓下に撒じて、衛士をして争ひ拾はしむるなり。而して宴を群臣に賜ひ、教坊の名妓、歌舞彈吹の歡を盡す。然るに安祿山の亂を経て、賊兵の蹂躪に遭ひ、肅宗位に即くに及んで、猶舊時の盛に復すること能はず。子美之を悲み慨きて此詩を賦せるなり。詩意は春雲城上より來りて、芙蓉苑の牆を覆ひ、四望暗澹として、一年の芳景も、晩色轉靜寂なり。林間の花は殘紅濕ひて、水上の萍は風に飄蕩せられ、先帝(玄宗)の禁衛たりし龍武軍は、新たに神武軍と

(100)

517185

律 言 七 章 三 第

名を命せられ、天子(肅宗)の駕に扈して、今此にありと雖も、雨のために衛士出遊せず。何人も天子の駐蹕を知らざるが如し。芙蓉苑の別殿には、宮女香を焚きて粧を疑すも、天子の幸を得ず。嗚呼此寂寞たる光景、陽春三月の時節とも覺えず、再び先帝開元の世の如き、太平の世界に遭ふて、金錢會を聞くの恩詔を蒙り、教坊の名妓を相手に酒を酌むは何の時ぞと。亂後の感傷殊に深く、咨嗟詠歎、無限の恨事を述ぶ。然れども表面は雨景の寂寥を述べたるもの、如く、全首を通じて、一の悲愁感傷の文字を着けず。之を即景寓情の法と云ひ、景に觸れて見る所を寫し別に一段の深情を言外に寓するなり。荷藻風に吹かれ水に濺ひて帯の如きは、綵舟の士女を載るなきなり。林花雨に濕ふて寂寞たるは、車馬の來らざるなり。此一聯穩麗の中に愴悽を含み、深漫の二字は衛士の無聊、宮女の薄命を形

(101)

成大詩作

容し盡せり。而して結末玄宗を憶ふの心特に切なり。  
此詩一本臙脂濕の濕を落の字に作る、王彦輔曰く、此詩嘗て壁間に題するもの濕の字蝸涎に蝕せられ、蘇東坡、黃山谷、秦少游及び佛印と之を見て補ふに、東坡は臙脂潤と爲し、山谷は老、少游は嫩、佛印は落と爲す。然れども終に濕の字の天然雨景に切合せるに及ばずと、詩人一字を下すの難き以て知るべし。若し今人をして補はしめば、襪となし冷となし染となし、又十人十色ならん。然れども纖巧に失せざれば、平凡に流る。濕字は到底動かすべからざるなり。

錦里先生烏角巾  
慣看客兒童喜  
秋水纔深四五尺

園收芋栗未空貧  
得食階除鳥雀馴  
野航恰受兩三人

律言七章三第

白沙翠竹江村暮  
相送柴門月色新  
これを半密半疎の法といふ。前半四句は錦里先生の烏角巾、園中の芋栗、客に慣るゝ兒童、階に馴るゝ鳥雀等數層の意義を堆疊す是半密なり。後半は秋水に舟を泛べて月下相送るの一意を推拓して結ぶ。是れ半疎なり。密なるところ其濃重を覺えず疎なるところ其薄弱を覺えざるなり。前聯賓客を看るに慣れたる兒童は、賓客の至るを喜び、階除に於て食を與へらる鳥雀は馴れて階除に近くの意なれども、句法頗る奇なり。後聯は所謂流水對にて、深さ纔かに四五尺の水なれば、恰も兩三人を載せ得る小舟を泛べ得たりの義にて、纔、恰の二虚字、實に其妙を極む。虚字の用法を講ずるもの取りて模範と爲すべきなり。

閑夜

成大詩作

これは對起雄偉體なり。起聯排山倒海の勢あるを云ふ。先づ陰陽相促して歳暮に迫り、客中天霽れて、霜雪の寒き光景を述ぶ。頸聯鼓聲の悲壯は閣上霜空に響きて聞くと、星影の動搖は閣下の江水に映するを見るなり。腹聯は曉天に聞く所を寫す。戰伐のために壯丁を徵募せらるゝ千家の父母兄弟別を惜みて慟哭し、漁郎樵夫も、處々に夷歌即ち從軍の曲を唱へて、殺氣野に滿てり。結末臥龍は諸葛孔明にして、躍馬は公孫述なり、孔明は蜀の宰相、公孫述は蜀に據りて帝と稱せしも、今や俱に死して黄土と化す。昔人既に見るべ

歲暮陰陽催短景  
野哭千家聞戰伐  
夷歌三峽起漁樵  
人事音書漫寂寥

律言七章三第

からず、又今日の時事憂ふべしと雖、世上の消息久しく絶えて知らずとなり。全首を通觀するに、先づ晚景より夜を徹して曉に至るの事を述ぶ、愁ひて眠らざるを知る。而して雄健悲壯以て之に加ふるなし。

見螢火一  
巫山秋夜螢火飛  
忽驚屋裡琴書冷  
却遠井欄添箇箇  
滄江白髮愁看汝  
偶復亂簷前  
來歲如今歸未歸  
歸未歸、平仄平を用ひて、聊か古調を帯ぶ。前六句は専ら螢を詠じて、形容の妙を得たるも、末二句は自己の身上に就て、無量の感慨



を述べ、客中漂泊居處定まらず、來年郷に歸り得るや否やを説き。前六句の喁々たる細響、此に至りて洪鐘一敲、衆山皆響くの態あり。後聯螢火の形容は最も精妙にして、詠物の軌範と爲すべし。

送李八秘書赴杜相公幕  
青籬白舫益州來  
石出倒聽楓葉下  
貪趨相府今晨發  
南極一星朝北斗  
巫峽秋濤天地迴  
櫓搖背指菊花開  
恐失佳期後命催  
五雲多處是三台  
これは對結整練法なり。黃生曰く、起語輕秀、接句猛健、三四更に奇險、五六稍率、七は突然として轉じ、八は悠然として合し、對結を用うと雖も、筆意其頓挫を極むと、確論なり。青籬白舫は李秘書の乗れる官船にして、巫峽より益州に入るや、秋濤奔盪天地も廻轉

するが如く、奇巖江中に突出したるところ、其下に楓葉の落る聲あり、櫓を搖かして岸上の菊花を背指するは、舟行の急なるがためなり。而して相公の幕に趨くの期に後れて、再度の急使に促がさるゝを恐ると、舟行の急なる所以を述べ、結聯は、南極の一星北斗に朝するを以て、李の杜相公に謁するに比し、五雲三台を以て、天子の寵命を受くる大臣たることを講稱し、對偶整齊極めて精練の作なり。且つ南極と北斗、五雲と三台、各句中に對語を有するは、奇筆と稱すべし。

第四章 五言律

(一) 平仄の式及拗體

五律の平仄は毎句七律の上二字を截去せるなり。但七律にありては起句に韻を押しを以て正格とし、五律は之に反するの差あるのみ。例によりて其定式を示すべし。

|     |   |   |   |   |   |   |
|-----|---|---|---|---|---|---|
| 起聯  | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 頸聯  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 腹聯  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 結聯  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 平起格 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

起聯 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
 頸聯 ● ● ● ● ● ● ●  
 腹聯 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
 結聯 ● ● ● ● ● ● ●

若し起句に韻を押しときは、仄起格の起句 ● ● ● ● ● ● ● 平起格の起句 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ となる。第一字は平仄何れにても自在なるが、第二字は七言の第四字と同じく孤平を許さざるを以て、● ● ● ● ● ● ● の句を作るべからず。我邦の詩人王朝時代より徳川三百年を経て、未だ之を悟るもの少く、往々此病を犯せり。但

● ● ● ● ● ● ● を變じて ● ● ● ● ● ● ● とせず  
 ● ● ● ● ● ● ● は妨げなきに似たり。又 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○



右の諸篇は、中四句對聯を用うるところ、律詩と異ならざれども、平仄は古詩なり。是に於て古詩とするものと、律詩とするものとの二者あり。趙宦光は對聯の有無を論せず、平仄の律に入るものを以て律詩となし。楊用修は對聯無きものを以て律詩と爲さず。要するに律詩の具備すべき必要條件は、平仄の定式に協ふと、對聯との二者にして、其一を欠けば律詩たるの資格なきもの、如くなれども、前例の諸篇、古來多く律詩の部に入る。拗體の律詩なるものありとすれば、亦妨げなかるべし。

(二) 杜律の諸體式

五律は諸家の作例甚だ多しと雖も、體式の完備せるは杜詩に若くはなし。依て其一斑を左に掲げん。

東○郡○趨○庭○日○登○兗○州○城○樓○  
浮○雲○連○海○岱○孤○障○秦○碑○在○  
從○來○多○古○意○

南○樓○縱○目○初○  
平○野○入○青○徐○  
荒○城○魯○殿○餘○  
臨○眺○獨○躊○躇○

これは四實の法なり。中四句皆實景を叙す。東郡は今の山東省にして、兗州城は其中にあり。杜子美の父杜閑、此州の司馬となりしとき、子美猶弱冠、父を省して此に至る。趨庭は家庭の訓を受けるの故事なり。先づ筆を此に起して、登臨地理を按ずることを述ぶ。浮雲は東海及び泰山に連りて、平野は青徐二州に入りて濶大なり。泰山には秦皇の功德を記せし碑石あり、兗州の近郊には、春秋魯の時代に建てし靈光殿の舊基を存す。依て古を懷ふの意を發して、願望低

成大詩作

徊すとなり。前聯の海岱、青徐は東西數千里、後聯の秦碑、魯殿は古今幾千歳の事を詠じ。古意の二字後聯を收め、臨眺の二字前聯を收め、而して縦目の字と相呼應す。作法極めて嚴密なり。且つ在、餘の二虚字、實景中に情を含みて、古意を迫出するところ、最も意を注ぎて觀るべきなり。ハイカラ的に云へば、前聯空間の觀念を述べ後聯は時間の印象を示すものと云ふべし。

巨石水中央  
沈牛答雲雨  
天意存傾覆  
干戈連解纜

江寒出水長  
如馬戒舟航  
神功接混茫  
行止憶垂堂

これは四虚の法にて、中聯四句専ら情を述べ、瀧瀬堆は瞿塘峽に在

律言五章四第

りて、巨石大江の中央に突出し、江水漲れば没して、舟其上を過ぎ、江水減すれば出で、舟行を妨ぐ。舟人其出没の度を檢して進退を決す。瀧瀬馬の如くなれば下るなかれの諺あり。石の出る馬背の大に似たるは既に覆舟の禍あるを云ふなり。而して此を過るもの皆牛を沈めて水神に献じ、以て航行の安全を禱る、神若し怒れば雲を呼び雨を起して覆没の患あるがためなり。蓋し天道は人をして時々傾覆の禍あるを知らしめて、安全に狂るゝを許さず、随つて造物者亦太古より此巨石を混茫たる水中に接着せしめたり。我今干戈争亂の日に當り、成都より夔州に下るに、處々に舟を泊し、幾たびか纜を解きて、此危険に臨み、魂驚き心悸して、戦々兢兢、行止を慎しみ、千金の子は堂に垂せずの戒を想ふとなり。即ち起承二句の外は悉く情思にして感慨甚だ深し。殊に天意、神功の句、瀧瀬堆を兼ねて、

成大詩作

君臣太平の安に狂れ、天の警戒を忘れ、亂世に至れることを逃ぶ。誰か云ふ性靈を主とするもの、平弱に流れ易しと、悲壯沈鬱此の如くなれば、亦可ならずや。

登岳陽樓  
昔開洞庭水  
吳楚東南坼  
親朋無一字  
戎馬關山北  
今上岳陽樓  
乾坤日夜浮  
老病有孤舟  
憑軒涕泗流  
これは二實二虚の法なり。吳楚、乾坤の一聯は實景として、親朋、老病の一聯は情思なり。洞庭は禹域第一の大湖にして、其名を聞くこと久かりしが、今や湖畔の岳陽樓に登り、其實境に臨めば、東南吳楚を析開して積水渺茫、乾坤も日夜水中に浮漾せるが如し。此莊

律言五章四第

々たる天涯に流落せる我身は、親戚朋友より一字の音書も寄せられず、老病の身を孤舟に托して、愈々落莫の悲に堪へざるなり。況んや時事益々非にして、關山の北、長安の帝都は、今尙賊勢猖獗、戎馬紛々たるをや。乃ち軒楹に倚りて遙かに天涯を望み、涕泗の流るゝを覺えずとなり。元來前實後虚は、龍頭蛇尾の弊に陥り易きものなり。特に此詩の前聯吳楚乾坤の一聯は、凌滄搖岳の氣勢を備へて、局面濶大、接するに尋常の句を以てすれば、忽ち前後の權衡を失すべし。而も親朋、老病の兩句、性情を主とすと雖も、前聯に劣らざる氣勢を有し、毫も惰氣無し。七八に至りて更に手筆を放開し、雄健悲壯前者に陪す。爲めに全篇を振起して、千古を凌轢するの概あり。

野望  
清秋不極

迢遞起層陰

成 大 詩 作

これは通首全實の法なり。胡應麟曰く、律詩句句景を寫せば、貌、  
 豐碩と雖も、往々之を繁雜に失す、又云ふ、景物を累寫して、言外  
 の意なくんば、則ち堆積窒塞、意味寡し、此詩、清秋、層陰、水天  
 城霧、風葉、山日、歸鶴、昏鴉、首より尾に至りて、寫景にあらざ  
 るなし、而も寄托遙深云々と、  
 起句の清風は明なり、接句の層陰は暗なり、層陰起りて野望を妨ぐ、  
 暗を以て明を害するなり。遠水天と淨きは明なり、孤城霧に隠るゝ  
 は暗なり。已に稀なるの木葉を風更に吹落すは明なり、遠山日の沈  
 むは暗なり、獨鶴は君子の未だ處を得ざるが如く、昏鴉は小人得意

遠水乘天淨  
 葉稀風更落  
 獨鶴歸何晚

孤城隱霧深  
 山廻日初沈  
 昏鴉已滿林

律 言 五 章 四 第

の地を占むるに似たり。一明一暗、以て實景を寫し、獨鶴、昏鴉亦  
 見るところによりて感慨を寓し、寫景にして情に歸到す亦作法の秘  
 を悟るべし。

亦知成不返  
 已迎苦寒月  
 寧辭擣衣倦  
 用盡閨中力  
 此は通首全實の法なり。空閨の女子、其夫の邊地を戍りて、今秋  
 も亦返らざるを知り、擣衣の時節、夫の寒を思ふて、砧杵を拂拭し、  
 衣を寄するの準備を爲す。苦寒の時は既に近きて、別離の苦は久し  
 く積めり。擣衣の勞倦を辭せずして、一刻も早く遠き邊塞に衣を寄

擣衣不返  
 苦寒月  
 擣衣倦  
 閨中力

秋至拭清砧  
 况經長別心  
 一寄塞垣深  
 君聽空外音

成大詩作

せんとの心専らなれば、全力を用ゐて、衣を搦つこと、砧聲を聞き  
て知るべしと、全首想像を以て結撰す。深厚の思、纏綿の情、所謂  
性靈派の生命とする所なり。先づ禱衣に就て、其人其時其心其勢、  
其聲を順次想像して寫し來りしところ、意境の精密を見るべし。

禹廟空山裏  
荒庭垂橘柚  
雲氣嘘青壁  
早知垂四載  
此是墨累意二の法なり。禹廟は巴峽に在り、荒庭の橘柚を見て、  
禹貢の所謂厥包橘柚錫貢の事を想ひ、廟壁畫く所の龍蛇を見て、禹  
の水を治め龍蛇を驅りしことを思ひ、青壁に生ずる雲氣を望み、白

秋風落日斜  
古屋畫龍蛇  
江聲走白沙  
疏鑿控三巴

律言五章四第

沙に走る江聲を聞きて、四載の勞、開鑿三巴を控ゆるの功烈を知る。  
されば遺廟をして此の如く荒涼ならしむるは、深く慨すべきことな  
り、四載は禹の水を治むるに方り、水行には舟に乗り、陸行には  
車に乗り、泥行には橇に乗り、山行には輦に乗りしを云ふ。而して  
中聯皆寫景所謂四實の法なれども、橘柚、龍蛇は廟内に屬して、起  
兩句を承け、雲氣、江聲は廟跡に屬して結二句に接す。寫景を疊み  
て其意を兩分せるなり。

送翰林張司馬南海勒碑  
冠冕通南極  
詔從三殿去  
野館濃花發  
不知滄海使

文草列上台  
碑到百蠻開  
春帆細雨來  
天造幾時迴



成大詩作

これは潤大半細の法なり。高官を帯びて、南海に至り、碑を立て、百蠻に示すと、第一句第四句之を述ぶ。上台に居りて文章を掌り、詔を拜して三殿より去ると、第二第三の句之を述ぶ。前半四句題意を釋して、毫髪も遺す所なし。而して後聯は途中の景を寫して、深婉綿麗の致を極め、結語滄海の遠き、歸期の近からざるを言ひて、深く其人を思ふの切なるを見る。李夢陽曰く、前半寫得て潤大なれば、後半必ず須らく深細なるべく、方に流れて粗豪の一派に入らずと、所謂潤大とは、三殿百蠻の語にして、深細は濃花細雨の一聯なり。按するに起聯は總提として、第三句は去る處より寫し、第四句は到る處に就て寫し、第五句は陸路、第六句は水路、結聯歸時に到着す、用意極めて密なり。

宿白沙驛

律言五章四第

これは逐句相生の法なり。水上の旅行、舟を泊して日未だ没せず、依て岸上を願望するに、人煙起りて客亭あるを知る。亭あればこゝに驛あり、驛の邊は其名の如く沙白く、之と相映帶して湖水の外は陸地の新草青々たり。乃ち草色を見て、萬物春に遭ふを知り。萬物に對して身は是れ渺たる一孤客、扁舟を泛べて茫茫たる煙波に隨ひ萬里水上の月を逐ふ。或ひは漸々南溟の際涯なきほとりに漂泊するならんかと、句々連接して、節々枝を生じ、枝々葉を生ずるの妙あり。南溟は莊子の寓言に本きて、天涯淪落の感を寓せるなり。

水宿仍餘照  
驛邊沙白氣  
萬象皆春氣  
隨波無限月

人煙復此亭  
湖外草新青  
孤棹自客星  
的的近南溟

成大詩作

今○夜○月○  
 遙○憐○小○兒○女○  
 香○霧○雲○鬢○濕○  
 何○時○倚○虛○幌○

此は對面生情の法なり。此時子美の妻子鄜州にあり。故に月に對して妻子を思ひ、今夜此明月を、我妻子は如何に物淋しく見るやらん。殊に幼少なる兒女は、未だ此父の居る長安を慕ふ情を解せず。無邪氣なるが却つていちらしう。妻は雲鬢の香霧に濕ひ、玉臂の清輝に照されて寒さをも厭はず、夜ふくるまで眠らずに、思ひを月に啣つならん。さるにても故郷に歸りて、夫婦打揃ひ、此明月を賞して、涙の乾くは何時なるぞと、情思綿邈、詞旨婉切なり。古人評し

閨○中○只○獨○看○  
 未○解○憶○長○安○  
 清○輝○玉○臂○寒○  
 雙○照○淚○痕○乾○

律言五章四第

て曰く、月に對して家を思ひ、偏に想ふて家人月を看るの思に到り、已に是一層を進む。併せ想ふて兒女未だ思を解せず、以て閨中の人に必ず思ふに至る、是二層を進む。又想ふて月に對し愁を舒ぶる状に到り、是三層を進む。今夜の涙を寫さず、反つて後日涙乾くことを寫す、是四層を進む。逐層皆對面より寫來りて、筆法奇創なりと。而して雲鬢、玉臂の一聯清麗悲婉真に是鍾情の極。前聯の流水對、亦是靈活比なし。

以上杜律に就て其一斑を擧るに過ぎずといへども、以て體式の如何を知るべし。初學之を熟誦諳知して筆を下さば、自ら望洋の歎を免るべし。

(二) 變體

成大詩作

五律は其聲律に於て、又其體式に於て、七律より嚴なるが如し。然れども時に或ひは其平仄を拗し、或ひは一の對聯を用ゐず、古詩と毫も異ならざるものあり。依て之を變體と名け、二三の例を擧ぐべし。

夜泊牛渚懷古  
牛渚西江夜  
青天無片雲  
空憶將軍  
餘亦能高詠  
明朝挂帆席  
楓葉落紛紛

牛渚は今の安徽省太平府の江中にあり。昔謝尚此地の將軍となりて、秋夜舟を泛べ、月を賞せしが、江上人あり、詠史の詩を朗吟す。謝尚其人を引見するに即ち袁宏と云ふもの、共に談論して、大に其才

律言五章四第

學を愛し、幕下に置く。袁宏の名聲これより揚れり。李白其舊跡を尋ねて、江山依然、明月昔に異らざるも、才を憐れみ客を愛する謝尚其人無く、袁宏の如き才を抱くと雖も、人に知られざるを悲みて此詩を賦す。余も亦高詠すと、自ら袁宏に比し、斯人聞くべからずと謝尚無きを歎じ。明朝帆席を掛けて、此一知己無き地を去らんとの意を示す。調格甚高く、感慨亦深く、實に古今の絶唱なり。而して古來詩を選するもの、これを五律として採る。平仄は正に律詩の定式に協ふと雖も、全首一の對聯無し。古詩か律か、到底判定すべからず、依て假に變體の五律となすなり。

終南別業  
中歲頗好道  
晚家南山陲  
勝事空自知

成 大 詩 作

王維佛に歸して、夙に跡を物外に寄す、故に此詩幽を窮め玄に入り、天機の到るところ、自ら流出す、然れども天分に由らざれば隻語を得べからず、初學の漫りに學ぶべきものにあらざるなり。而して其平仄は、定式の外に超脱し、所謂拗體の一種なり。周弼の三體詩取りて一意の格と爲す。蓋し一氣直下、水到りて渠成るの妙あるを以てなり。

行○到○水○窮○處○  
偶○然○值○林○叟○

坐○看○雲○起○時○  
談○笑○滯○還○期○

晚○泊○潯○陽○望○廬○峯○

挂○席○幾○千○里○  
泊○舟○潯○陽○郭○  
嘗○讀○遠○公○傳○

名○山○都○未○逢○孟○浩○然○  
始○見○香○爐○峯○  
永○懷○塵○外○蹤○

律 言 五 章 四 第

東○林○精○舍○近○  
日○暮○但○聞○鐘○  
此詩亦平仄を拗し、對聯に意を用ゐず、純然たる古詩なり。然れども周弼は一意の格として五律中に採録せり。潯陽は今の九江府の江邊にして、上に廬山あり、香爐は其一峯にして秀翠天に參す、麓に東林寺あり、晋の高僧遠公の居りしところ。浩然其高風を慕ふて、世の相隔るを歎す。結句餘情、脉々絶へずと雖も、前半四句、一氣直下、應接に暇あらざるところ更に妙なり。長江を遡りて、此處に至るまで、兩岸唯洲渚蘆荻のみ。名山都て未だ逢はずは能く其實境を寫せり。潯陽に泊して廬山を見るに及んで、何人も狂喜せざるを得ず。本地を経て益々此詩の妙を悟るべし。

(四) 排 律

律言五章四第

老已楚蘇幾五稻處才醉劇未  
吟用筵武年嶺梁士高舞談負  
秋當辭元遭炎求禰心梁憐幽  
月時醴還鵬蒸未衡不園野棲  
下法日漢鳥地足俊展夜逸志

病誰梁黃獨三慧諸道行嗜兼  
起移獄公泣危苡生屈歌酒全  
暮此上豈向放謗原善泗見龍  
江議書事麒逐何憲無水天辱  
濱陳辰秦麟臣頻貧隣春真身

成大詩作

乞白龍文聲筆昔  
歸日舟彩名落年寄李十二白二十韻  
優來移承從驚有狂  
詔深棹殊此風客  
許殿晚渥大雨雨

遇青獸流汨詩號  
我雲錦傳沒成爾  
夙滿奪必一泣譎  
心後袍絕朝鬼仙杜  
親塵新倫伸神人甫

排律は七言にもありと雖も、人多く作らず。五言を以て主と爲す。其平仄、對聯は普通の律詩と異なることなく、たゞ重疊聯接して、十句以上數百句に至るものあり。長短によりて局面に廣狹あり。布置結構亦之に副ふ。左に一二の例を擧ぐ。

成 大 詩 作

排律は段落の分明を要す。此詩第一段十句、太白の文才尋常に卓越して、名聲大に揚り、終に天子の知る所となりて殊遇を蒙むることを云ふ。白日以下第二段十句、寵恩の盛なるを辭して、乞暇野に下り、杜甫と交を訂して、詩酒の樂を縱にすることを言ふ。才高以下第三段十句は才高うして讒言に遭ひ、身貧うして窮途に墜し、蠻地に謫せらるゝの苦を云ふ。蘇武以下第四段十句は太白の忠誠他なきを明かにして其冤を辯じ、併せて其老病流落の身を憐れむ。太白の心事これによりて明白、辯護に力めたりと云ふべし。古人評して、天壤の間、公道を維持し、元氣を保護するの文字と云へるは眞に是なり。而して對仗の齊整、議論の正大と相待て、詩聖の詩仙に贈る作に負かずと云ふべし。

莫怪恩波隔

乘槎與問津

律 言 五 章 四 第

今○空○衣○壞○溝○蝨○藥○未○夜○浮○  
秋○夏○漂○潤○簷○溢○飛○醜○憂○永○雲○  
久○迷○香○聞○池○明○時○荒○燈○會○  
排○無○遠○偏○瓦○魚○關○須○楚○相○消○  
雨○雨○望○著○墮○出○廡○燎○菊○守○對○

これは二十句十韻なり。秋天霖雨の狀を盡して餘蘊無し。

從○蕭○書○漲○天○蛙○舟○直○愁○鼓○  
秋○瑟○蒸○水○低○關○閑○恐○深○笛○  
却○送○蠶○見○寒○雜○任○敗○酒○賽○  
少○寒○欲○堤○雁○疎○自○吳○細○西○  
晴○聲○生○平○征○更○橫○航○傾○城○  
游

排律は對聯に力を用うべく、句々鎔鍊を経て、渣滓を淘汰せざれば  
精金美玉の中に、一の瓦礫あるも、總體の美觀を損するの憾あるべ  
し。初學之を學ばんと欲せば、普通四韻の律を自由に作り得らるべ  
後、五韻、六韻乃至十韻を限りて練習すべきなり。

\* \* \* \* \*

以上既に近體の絶律に就て其大要を録せり。猶六言の絶律ありと  
雖も、其平仄は七言の第五字を除きたるものと同じく、以て類推  
すべし。而も六言は人の多く作らざるところなれば別に標目を掲  
げて之を説かず。又邦人中五七言の絶律に仄韻を用うるものあれ  
ども、唐宋元明を通じて絶て無きところなり。故に之を著録せず若  
し之を作らんと欲せば、絶句の仄韻に倣ひて、其平仄を拗すべし。

然るときは古詩の一派に屬して、復律詩にあらざるべし。學者之  
を諒せよ。





語類體近章五第

煙二鳴鳥落斗卯雪美綠春芳  
 雨十頭啼花柄色融人楊社事  
 空四春花香東天銀天煙  
 濛番水落草  
 三柳草養日  
 春春千九落月絮芋花如  
 寒波紅十花三飛綿天年  
 料激萬春飛  
 峭澗紫光絮  
 燕雨草月  
 子廉如籠  
 風織茵花  
 春春雙遠落  
 天風柑山花  
 杏駘斗如流  
 露蕩酒睡水  
 一少柳燒  
 雁女三痕  
 歸風眠青  
 花  
 信  
 風  
 暖  
 芳  
 甸  
 迎  
 暖  
 遲  
 日

成大詩作

踏柳早紫禊社煙春迎香春春  
 青眠春筍節雨濃分春風山晴  
 青坐孟社永細流桐春聽春春  
 帝花春燕日雨鶯華來鶯雲風  
 駘對立雁啓蝶社祈清尋陽東  
 蕩花春歸蟄舞日鸞明花和風  
 煙九晚雪水試社重新垂煙柔  
 景春春消暖馬鼓三春楊花風  
 芳艷暮養採淑撲韶新飛群條  
 草陽春花艾景蝶華陽花芳風  
 芳冶草落拾麗暖芳青東芳和  
 信春肥花翠景日華陽皇菲風

第五近體類語

|    |    |    |    |
|----|----|----|----|
| 聞神 | 己春 | 御文 |    |
| 金燈 | 應度 | 合武 |    |
| 口佛 | 猶春 | 元千 | 白櫻 |
| 說火 | 及歸 | 殿官 | 元日 |
| 百郎 | 無立 | 歲仗 | 春梨 |
| 空輪 | 願限 | 丹仗 | 水雪 |
| 中張 | 與春 | 風兵 |    |
| 似刻 | 梅今 | 門開 | 黃春 |
| 散玉 | 俱朝 | 白方 | 鷗雲 |
| 毫圖 | 自方 | 日同 | 出冉 |
| 光形 | 新始 | 明軌 | 谷冉 |
| 七寶 | 覺成 | 奏昇 | 唐社 |
| 裝液 | 人  | 平  | 張  |
| 影裡 | 從  | 上  | 輕喧 |
| 如  | 令  | 皇  | 暖闌 |
|    | 克  | 一  |    |

今朝當社日  
宋戴復古

成大詩作

晴春魚杏峽百鶯春紅細蘭春  
風光吹花蝶嘯梭星杏雨亭月  
蕩潑柳零深流燕的綠啼雅勝  
漾眠絮落深鶯剪際楊鵲集隴

紅芳千蜂蜻東花好綠蝶淡東  
情草峯抱艇風經鳥慘舞雲風  
綠芋靄花欺走柳暗紅鶯微脉  
意綿靄鬚欺馬緯暗愁歌雨脉

殘洞鶯落花黃花鶯梅綠美曲  
花庭聲紅事鳥明語花戰人水  
滿春恰浮闌遷柳綿帶紅天流  
地色恰水珊瑚喬暗蠻雪酣氣觴



語類體近章五第

|                |        |    |
|----------------|--------|----|
| 鶯○海○雀○雪○江○柳○煙○ | 水○十○   | 理○ |
| 暖○日○乳○岸○山○色○花○ | 流○日○   | 雲○ |
| 初○生○先○叢○如○黃○宜○ | 年○不○上○ | 帆○ |
| 歸○殘○春○梅○有○金○落○ | 逝○出○花○ | 別○ |
| 樹○夜○草○發○待○嫩○日○ | 却○亦○中○ | 舊○ |
|                | 被○殘○重○ | 礙○ |
|                | 垂○楊○尖○ |    |
| 雲○江○鶯○春○花○梨○絲○ | 冷○風○雨○ |    |
| 晴○春○啼○泥○柳○花○管○ | 眼○密○樓○ |    |
| 却○入○過○百○自○白○醉○ | 看○雨○   |    |
| 戀○舊○落○草○無○雪○春○ | 作○清○   |    |
| 山○年○花○生○私○香○風○ | 春○王○   |    |
|                | 寒○又○   |    |
|                | 暗○中○   |    |
|                | 似○     |    |

唐  
錢王同同杜同李  
起灣 甫 白

成大詩作

|          |            |        |
|----------|------------|--------|
| 老○子○水○   | 誰○草○無○客○   | 人○金○   |
| 多○外○     | 來○年○愁○     | 眠○爐○   |
| 綠○難○茅○晚○ | 往○風○少○擬○春○ | 不○香○春○ |
| 陰○數○檐○春○ | 問○力○樂○向○   | 得○爐○春○ |
| 似○竹○感○   | 花○颺○春○     | 來○漏○夜○ |
| 水○貼○裡○與○ | 枝○颺○聽○來○   | 月○聲○   |
| 送○地○扉○   | 緩○鶯○減○     | 移○殘○   |
| 春○楊○     | 墮○空○       | 花○     |
| 歸○花○閒○   | 絲○有○春○     | 影○剪○   |
| 弱○窓○     | 故○到○       | 上○剪○   |
| 如○更○人○   | 辟○園○愁○     | 欄○輕○   |
| 何○飛○靜○   | 歷○思○翻○     | 干○風○   |
| 尚○試○明○   | 清○倍○明○     | 陣○宋○   |
| 著○白○單○厲○ | 南○日○舊○高○   | 陣○王○   |
| 壘○日○衣○   | 酒○光○時○     | 寒○安○   |
| 鹽○如○     | 家○鳥○       | 春○石○   |
| 累○年○壓○   | 路○鳥○走○     | 春○     |
| 娛○枝○     | 濃○馬○       | 色○     |
| 又○我○梅○   | 共○薰○已○     | 惱○     |

語類體近章五第

【夏】

紅兩稍金夜九草  
 杏岸聞地聞門色  
 熱暑花風明一晚決夜歸寒引  
 枝風決寒雁食開  
 爛酷三蕉驕春黃流消生多盤  
 石暑庚衣炎店鳥永美鄉遊馬  
 雨樹谷酒思騎地  
 竹午亢分驕  
 醉熱陽秧陽  
 玉一盡玉病三簫  
 簫破放人入月聲  
 扇畏孟薰梅三春青春新春催  
 市日夏風霖墨水青困年陰暖  
 夜白沒倚感正賣  
 避趙仲荷涼樓鷗燒東物養錫  
 暑眉夏錢風煙天痕風華花天  
 清明  
 高蘇會同歐宋  
 遂陽  
 五五  
 日月 日月 成啓軾鞏 修祈

成大詩作

濃一華映花雪濃流水錦樓山  
 吐院堂階暖暗陰水生韓臺川  
 襟有翠碧能梨花伴挑人藏終  
 芳花暮草醺千照遲菜未綠不  
 薰春春來眼樹野日浴起柳改  
 嶺畫風春  
 嶼永至色  
 山煙寒野煙珠離桃  
 濕八繡隔濃迷食花濕樹落李  
 飛方閣葉欲柳柳留落鵲露自  
 雙無金黃染一圍晚梅先紅無  
 翠事屏鷗衣川村春村驚桃言  
 破詔曙送  
 漣書色好  
 漪稀開音  
 楊陸陳張蘇文王王  
 宋唐萬與彥禹  
 林李劉杜里游義耒軾博侑質  
 長  
 逋叻卿甫

第五近體類語

身下何保知藥端  
 自有以昌權且午  
 得清消消茂傳臨端  
 風煩暑忠向觴中  
 難暑真向夏午  
 更熱如水事  
 與散端不覺古晴  
 人由居替盧人清  
 同心一香留日  
 靜院貽跡復  
 中厥慮長  
 涼後兆年  
 生眼唐昆間深鹽唐  
 為前白芳歸樓梅玄  
 室無居壽績已宗  
 空長易群長佐帝  
 物此公當鼎  
 時窓共軒麴

榴綠棋  
 花陰消  
 如幽永  
 午火草日  
 滿詞  
 地水  
 槐雪  
 花藕  
 蛙紅  
 聲藥  
 閣翻  
 閣階

成大詩作

浮簞蝴午豆夏斗草朱竹麥午  
 瓜紋蝶眠苗簞指木夏寒秋日  
 沈如老醒肥清南榮  
 李水  
 盧望著午櫻畏熱伏梅黍  
 流茂橘雲單夢筍日  
 金樹熟寬衣回厨長消競標夏  
 燦連  
 石陰  
 嶺薰  
 雲風  
 烘解  
 日溫  
 北綠廬竹解  
 窓陰甌有溫銷殘斷伏  
 眠涼中孫風夏夏梅日  
 芭煮芍解火  
 蕉新樂籜傘  
 展茶開風張  
 梅納賜  
 雨涼肉  
 初浣九  
 夏花夏  
 五月  
 上同  
 上同

第五近章體類語

綠綠燕新草竹卷四筍雷竹  
分荷低溜徑色簾山抽露深  
田雨去迸迷水通嵐過空留  
水洗地涼深千燕色舊霹客  
新藏不侵綠頃子重竹歷處  
栽龜盈靜

稻葉尺語  
池松織五梅雲荷  
黃翠鵲晚蓮聲竹月落雨淨  
入竹喜雲浴風落水立竟納  
園煙傍浮風四雞聲閑虛涼  
林寒檐潤紅檐孫寒枝無時

已集時上  
熟鳳數殘金宋唐  
梅梢聲書字真陳白裴同杜  
居劉陸林文山與居易說甫

節基游道

成大詩作

在此南樓上  
不借人  
間一滴涼  
月蒼蒼  
天河只  
笛參差起  
暑不夜  
不可當  
開門高樹  
倚胡床  
月明船  
風生麥氣  
柳涼  
外涼  
池  
蓮自南畔  
香  
倚胡床  
月明船  
石梁茅屋  
有綠陰  
幽  
草勝花  
時  
度兩陂  
晴日暖  
地別院  
日卓午  
夏意  
夢覺流  
鶯石榴  
一開遍  
透籬明  
樹陰滿

語類體近章五第

宋·白·白·松·凄·月·白·紅·紅·秋·搗·火·  
玉·蘋·衣·風·風·色·雲·蓼·葉·雨·衣·流·  
悲·風·送·羅·苦·如·朋·  
秋·起·酒·月·雨·霜·月·山·河·秋·曝·授·  
瘦·淡·露·書·衣·

碧·雲·空·鳥·夜·荷·白·  
鱸·物·山·鵲·雨·雨·蘆·征·芳·砧·白·肅·  
紫·凄·獨·南·參·荻·紅·雁·菊·杵·蘋·霜·  
蟹·涼·夜·飛·禪·風·蓼·

搖·籬·流·草·柳·  
落·菊·火·黃·疎·

敗·王·落·山·江·梧·蟲·  
荷·繁·木·骨·風·桐·聲·殘·松·秋·白·沉·  
殘·登·蕭·嶺·山·一·雨·柳·菊·氣·雲·寥·  
柳·樓·蕭·嶺·月·葉·注·

楓·黃·秋·素·  
逕·葉·律·商·

成大詩作

【秋】

凜·促·落·露·秋·空·黃·寒·西·新·竹·黑·  
秋·織·葉·冷·陽·山·花·蛸·風·秋·陰·驚·

敗·乞·蟋·韻·秋·登·殘·秋·秋·荷·寺·子·  
荷·巧·蟀·氣·分·高·蛩·聲·光·枯·綠·翻·  
夕七 九九 日月 無·階·

鶻·解·白·冷·窮·衰·吟·殘·高·殘·暑·影·  
橋·夏·露·雨·秋·鴻·蛩·蚊·秋·荷·荷·涼·

元中 葉·受·  
嫩·剝·水·白·迎·殘·蠶·重·悲·秋·繞·槐·  
涼·棗·落·帝·寒·蟬·蛩·陽·秋·風·門·花·

九九 日月 香·灑·  
晚·詠·石·肅·金·秋·砧·丹·中·金·勝·地·  
秋·扇·出·殺·天·成·聲·楓·元·風·花·風·

廿七 清·厲·  
九·素·素·落·伏·秋·蘆·紅·蟲·商·同·  
秋·秋·節·木·火·霖·花·楓·聲·聽·



昨朝一葉見秋生  
 去無塵土淡若薄  
 一早生涼日  
 雨生涼日  
 獨登高處遍插茱萸  
 在異鄉為異客  
 每少一人  
 獨在異鄉為異客  
 每少一人  
 倍思親  
 遙知兄弟  
 自排雲上便引詩  
 鶴排雲上便引詩  
 我言秋日到碧霄  
 勝春朝  
 晴空一  
 板橋霜落楓寒  
 燕萬白江  
 雁插金燒落桂蘆橘  
 飛菜氣紅木香花柚  
 高莫寒葉秋飄雪寒

菊大絡白雁蟋梧西兼金張落  
 花火緯蘋陣蜂桐風段風翰楓  
 節流雋洲高鳴老急水玉尊江  
 冷露鱸冷  
 紅賦一河落山芭雁  
 蓼重葉漢葉山蕉橫秋蟋青亂  
 涪陽飄淡聲瘦破塞風蟀女蛩  
 蕭宵降如  
 白登斗賦蟲客黃雁瑟征霜雨  
 雁高柄秋聲心花帶  
 飛會西聲苦驚酒秋  
 燕萬白江  
 雁插金燒落桂蘆橘  
 飛菜氣紅木香花柚  
 高莫寒葉秋飄雪寒

第五近體類語

蘭酒洲曉秋落巢菊  
衰醒白鷺水雁熟散  
花秋蘆樓翻迷從金對  
始簟花危荷沙入風  
白冷吐石影渚打起聯

荷風園秋清飢葵荷  
破急紅萍霜鳥荒疎  
葉夏柿滿脆噪欲玉  
猶衣葉敗柳野自露  
青輕稀船枝田鋤圓

唐  
白元張鄭錢孟杜太  
居 浩  
易稹均巢起然甫宗

蘋鶴山  
風堪  
起昨入  
思夜畫  
悠吹  
悠蕭蕭  
月閑  
滿門  
樓逕  
自  
鴻宜  
雁秋  
欲  
來當  
江時  
欲載  
冷酒  
人  
白如

成大詩作

槿池影欄十  
花滴金分  
委露巖瑣秋秋  
露寫桂碎色秋  
渚日詩花滿夜  
蓮狂稠擣軒  
愁不霜窓  
無復香杵景  
紅坐丁凄  
粧到當清  
盪明更夜宋  
小居深井氣戴  
舟節吟梧涼復古  
濃動脫篩  
淡無月  
雲硯多籬

向影夜  
誰老雨  
說蜻洗新  
時蟬河秋  
泥靜漢雨  
漆引詩後  
園閑懷  
經機覺  
發有靈  
涼  
吹籬唐  
遠聲僧  
思新齊  
醒蟋已  
蟀  
遣  
遙草

語類體近章五第

落黃櫛霜芙蓉風燕食一潮霜葦  
木花帆林蓉翻知隨蓬生雁折  
千半落落葉荷社鳴秋水一雁  
山老處後上葉日磬雨國聲聲  
天清遠山三一辭巢睡兼語苦  
遠霜鄉爭更向巢鳥初度  
大後思出雨白去下起響

煙風  
澄白砧野蟋雨菊行半雨江多  
江鳥杵菊蟀濕爲踏硯過兩魚  
一孤動開聲寥重空冷山岸氣  
道飛時時中花陽林雲城秋腥  
月落歸酒一千冒落吟橘  
分照容正點穗雨葉未柚

清嚴  
明前情濃燈紅開聲成疎  
宋 唐 袁 遂  
黃賀梅歐李溫皇王殷許  
庭堯陽昌庭甫文  
堅鑄臣修符筠冉維注渾

成大詩作

思野清天潛魚霧白庭碧江夜  
婦靜風寒魚龍昏煙風雲村涼  
樓雲千一聚潛臨連吹蕭平金  
頭依里雁沙凍水海故寺見氣  
月樹夢叫窟水寺成葉霽寺應

征天明夜墜蟋風紅階紅山天  
人寒月半鳥蟀勁葉露樹郭靜  
馬雁一幾隕有欲下淨謝遠火  
上聚聲人霜衰霜淮寒村聞星  
霜沙砧聞林音天村莎秋砧流

明 宋

章何葛楊陳劉余崔雍司許劉  
美景長萬師 空 禹  
中明庚里道敞靖嗣陶圖渾錫

第五近體類語

【天長節】

白衰去  
 一漢允天九福聖鴻華草髮國  
 人代文縱重嘏誕儀封衰照正  
 有賜允  
 如來嘗  
 慶卹武椿不穆北佳嵩征秋秋  
 算鴛穆闕辰呼髮水盡  
 萬堯五  
 短碧後  
 壽天鱗華壽睿紫靈歡  
 無舜七祝康智極辰呼黃愁登  
 疆日鳳  
 沙心樓  
 干七閱寶楓南積敲多  
 丹堯周羽騶武算宸山與破在  
 楓殿入  
 陣晚日  
 紫舜合金衰擊萬仙無雲鐘斜  
 菊廊宴鏡龍壤壽齡疆平清時  
 濟  
 變銅聖虎千無嚴厲徐  
 輅虎德拜秋窮遂  
 成鴉燧

成大詩作

道萬蓬鴻夜梧庭宋老水九秋  
 上古鬢雁永葉樹玉樹落日色  
 霜乾轉信星庭露有挾痕清入  
 寒坤添從河除滋文霜留樽林  
 逢此今天低秋花悲鳴紅賦紅  
 白江日上半漸氣落牽蓼白鷗  
 雁水白過樹老濕木牽節髮淡  
 馬百菊山天豆井陶寒雨十日  
 前年花河清花梧潛花來年光  
 木風猶影猿籬風無垂聲為穿  
 落日似在鶴落老酒露滿客竹  
 見幾去月響晚葉對落綠負翠  
 黃重年中空初聲黃銚蒲黃玲  
 河陽黃看山晴乾花銚叢花瓏  
 明元  
 袁李魯張劉周黃陳韓陸陳蘇  
 景東與師舜  
 休陽淵昱基權庚義駒假道飲

語類體近章五第

【冬】

梅○橙○窮○雪○擁○小○臘○寒○奇○窮○三○雲○  
 知○黃○節○車○爐○春○月○風○寒○冬○冬○霞○  
 春○橘○  
 近○綠○ 冬○互○納○歲○寒○寒○冬○三○  
 日○寒○禾○晏○驟○流○蔬○寒○衣○  
 冠○  
 松○水○ 冬○朔○避○至○凍○寒○冬○開○肅○  
 耐○落○ 至○風○寒○日○日○山○烘○冬○  
 歲○水○ 黃○  
 寒○凝○ 南○歲○抄○水○凜○寒○冬○初○花○  
 木○衾○ 至○寒○冬○涸○烈○窓○山○冬○節○  
 葉○裯○ 水○負○酷○殺○歲○寒○高○殘○楓○  
 紛○滾○ 柱○喧○寒○集○晚○禽○寒○冬○菊○  
 紛○水○ 麗○  
 鞞○硯○九○折○噓○寒○嚴○隆○  
 瘥○水○冬○膠○背○柯○寒○冬○

成大詩作

瑤○駕○八○瑞○九○旌○錦○千○瑞○上○風○日○  
 池○六○千○雲○重○旗○繡○官○氣○苑○不○月○  
 宴○龍○春○多○城○日○山○拜○朝○黃○鳴○光○  
 關○暖○河○舞○浮○花○條○華○  
 千○萬○萬○九○  
 秋○國○斯○重○億○升○紅○億○祥○天○萬○天○  
 節○朝○年○深○萬○平○旗○兆○雲○杯○國○長○  
 斯○有○映○歡○慶○衣○地○  
 過○閭○祝○玉○年○象○日○呼○豔○壽○冠○久○  
 堯○闔○南○珂○  
 舜○開○山○鳴○ 戀○鈞○仙○簫○聖○劍○鶴○  
 鳳○天○仗○鼓○藻○佩○鷺○  
 臨○撫○醉○聖○ 和○廣○出○洋○光○鏘○綴○  
 億○百○堯○人○ 鳴○樂○宮○洋○輝○鏗○行○  
 兆○蠻○樽○生○

第五近章體類語

冬。冷。偷。春。多。得。暖。漸。橋。無。思。可。吟。詩。江。梅。

窓。退。殘。平。有。梅。衡。遣。  
相。看。生。時。落。芽。誰。  
對。短。意。詩。初。起。晚。林。山。  
弄。景。好。句。香。麓。村。還。  
朱。無。領。冬。橫。樵。下。冬。是。  
黃。營。梅。流。飛。樵。下。冬。是。  
亦。花。光。過。期。春。寄。  
自。未。野。多。氣。獨。已。蘇。  
長。動。絕。塘。往。微。茫。  
况。先。初。茶。事。雪。宋。  
有。香。冬。小。萬。宋。不。竹。林。  
兒。暮。瓦。陸。全。低。道。  
同。年。霜。游。忙。寒。道。  
此。自。楓。翠。雙。風。  
趣。適。楓。何。葉。雙。風。  
一。妨。欲。一。妨。欲。

成大詩作

冷。起。未。戴。梳。烏。頭。帽。早。暮。行。避。霜。披。夢。得。白。布。裘。初。寒。盤。唐。鳥。溫。雀。先。暖。酒。詩。成。手。

寒。梅。水。小。擁。一。肉。一。古。  
寒。未。仙。春。爐。線。陣。線。木。  
栗。綻。花。天。眠。長。遮。添。號。  
霜。呵。飛。硯。驅。避。千。長。  
月。凍。散。池。背。寒。山。松。  
苦。筆。集。冰。眠。香。積。點。  
衾。池。歲。北。獸。一。雪。雪。  
似。凍。云。風。炭。陽。冰。梅。  
鐵。合。暮。寒。紅。生。柱。香。  
風。衝。擁。雪。梅。雪。入。  
凜。寒。紅。意。返。車。夢。  
烈。出。爐。催。魂。

語類體近章五第

患野月樵高返寒破  
難日沒人杉照風柑  
思明棲歸殘寒疎霜  
年楓烏白子川草落  
改葉動屋落滿木爪

人別家  
聽折非願久  
除夕客中憶女  
回首已徂年

龍江霜寒深平旭管  
鍾風晴日井田日稻  
惜斷凍下凍暮散雪  
歲雁葉危痕雪雞翻  
徂行飛峯生空豚匙

宋 唐  
唐陸闕賈僧皇同杜  
名無甫  
庚游氏島己會甫

今宋高  
夜寒齋啓  
程何

成大詩作

夜旅人逐今更炬守樹  
思館不五歲拘散歲都  
千寒除覺更今除束林阿杜  
里燈夜來宵宵鴉戎家信  
獨作已盡夜爛四樹宅  
霜不眠入氣已明是十樹守  
髣明園空年生明盤歲  
朝客梅中明明涯朝已枝  
又心改日頤花與北  
一何容飛壺唐  
年事顏寒隨王暮簪杜  
轉唐暗裏一景喧喧甫  
悽高裏夜誼斜樞馬  
適去去  
故鄉風去誰能  
今光春能列

【雪】

(二) 雪月花

散風梁玉柳折玉寒玲天  
花雪苑雪絮竹樹更瓏花

瑞如三碎不凍粉虛形瓊  
花席白米夜雀蝶明雲塵

犬如銀綺玉瑞皇堆同銀  
狂手海帶殿雪耀鹽雲沙

雨飛埋玉訪白皓霏瑤銀  
凝絮徑戲戴戰潔霏臺

雪瓊琪藤素積玉斜梁瓊  
花屑樹六雪素屑斜園田

灞鋪雲霏六鶴種紛爲銀  
橋玉結雪出壘玉紛毛龍

薄硯半馬松倦帶白天鴉雪  
雲水雨蹄深鵲雪菊空噪徑  
淡破暮殘漸遠野爲絕暮晴  
日墜成雪覺枝風霜塞雲猶  
商餘風六風翻吹翻聞歸凍  
量滴外七聲凍旅帶邊故  
雪瀝雪里緊影思紫雁堞烟

翠筆孤山雲飛入蒼葉雁江  
栢花梅梢動鴻雲苔盡迷晚  
黃開春有還磨山因孤寒不  
梅凍動梅知月火雨村雨潮  
獸任臘三雪墮照却見下  
緞蒙中四意孤行成夜空  
貧茸花花銷音衣紅燈濠周  
清 明 宋 唐  
厲 錢 高 方 王 韓 伍 皮 劉 許 爭  
謙 日  
鶻 益 啓 岳 琮 駒 喬 休 滄 渾



第五近體類語

|          |        |    |
|----------|--------|----|
| 待○馬○度○寒○ | 謝○髮○萬○ | 袁○ |
| 行○嶺○氣○   | 家○敢○點○ | 安○ |
| 人○有○頭○先○ | 與○爭○瑤○ | 舍○ |
| 二○情○發○侵○ | 先○臺○   | 脩○ |
| 月○應○玉○雪○ | 幾○處○散○ | 然○ |
| 歸○濕○柳○女○ | 郢○影○飛○ | 尙○ |
| 謝○絮○扉○   | 歌○成○來○ | 閉○ |
| 莊○臺○清○   | 花○錦○   | 關○ |
| 衣○街○光○   | 月○帳○   |    |
| 龍○裏○旋○   | 前○     |    |
| 山○飛○透○   | 流○瓊○   | 唐○ |
| 萬○欲○郎○   | 光○透○   | 錢○ |
| 里○舞○開○   | 竹○應○   |    |
| 無○定○     | 煙○比○   | 起○ |
| 遠○隨○梅○   | 淨○     |    |
| 留○曹○花○   | 今○     |    |
| 留○植○大○   | 朝○鶴○   |    |

雪中對雪寄元判官拾遺昆季

宋蘇軾

成大詩作

|      |                    |
|------|--------------------|
| 門○寒○ | 東○梁○聚○不○黃○玉○玉○銀○天○ |
| 雪○更○ | 郭○園○星○夜○竹○樹○馬○盃○地○ |
| 滿○傳○ | 履○客○堂○城○歌○迷○銀○稿○無○ |
| 山○曉○ | 暖○梅○豐○郭○頃○白○       |
| 箭○   | 寒○遜○年○索○刻○龍○古○灞○乾○ |
| 深○清○ | 會○白○兆○聲○花○飛○木○橋○坤○ |
| 巷○覽○ | 居○                 |
| 靜○衰○ | 顏○                 |
| 積○   | 大○蠶○袁○食○姑○白○花○背○白○ |
| 素○隔○ | 如○食○安○葉○射○鰓○       |
| 庭○風○ | 手○葉○臥○聲○肌○皚○斜○十○銀○ |
| 閑○驚○ | 冷○遊○玉○折○鶴○眼○密○瓊○玉○ |
| 借○   | 飛○麪○千○竹○鼉○生○密○樓○樓○ |
| 問○   | 白○市○聲○披○花○         |

第五近體類語

|    |    |    |    |
|----|----|----|----|
| 眼半 | 色斂 | 寒亭 | 深不 |
| 西月 | 三斂 | 勒臺 | 新思 |
| 湖雕 | 千天 | 成經 | 雪朱 |
| 路梁 | 里花 | 雪雨 | 後雀 |
| 燕  | 落  | 壓塵 | 街雪 |
| 錯子 | 酒未 | 未塵 | 新東 |
| 認歸 | 力休 | 先沙 | 昌城 |
| 楊  | 消  | 放春 | 臺  |
| 花  | 時寒 | 一近 | 上  |
| 作  | 正梅 | 城登 | 七  |
| 雪  | 倚疎 | 花臨 | 株  |
| 飛  | 棲竹 | 意  | 松  |
|    | 共  | 氣  | 寺  |
|    | 風  | 加  | 後  |
|    | 流  | 庭  | 鐘  |
|    | 士  | 堅  | 惟  |
|    | 談  | 更  | 憶  |
|    | 江  | 喜  | 夜  |
|    | 山  | 輕  |    |
|    | 一  |    |    |

成大詩作

|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 雪日 | 橋好 | 河東 | 吟尺 | 樓城 |
| 夜暮 | 西開 | 皇  | 水  | 寒頭 |
| 歸者 | 去半 | 曙  | 柱宿 | 起初 |
| 人山 | 逢最 | 世  | 憶麥 | 栗日 |
| 遠  | 雪銷 | 身  | 劉連 | 已  |
|    | 宿  | 從  | 又  | 雲  |
|    | 芙蓉 | 玉  | 有  | 光  |
|    | 蓉山 | 案  | 幾  | 搖  |
|    | 主人 | 尊  | 家  | 銀  |
|    | 貧  | 有  | 海  | 陌  |
|    |    | 記  | 眩  | 上  |
|    |    | 得  | 老  | 生  |
|    |    | 西  | 去  | 花  |
|    |    | 湖  | 自  | 始  |
|    |    | 尋  | 嗟  | 遺  |
|    |    | 酒  | 詩  | 蝗  |
|    |    | 伴  | 力  | 入  |
|    |    | 斷  | 退  | 地  |
|    |    |    | 應  | 合  |
|    |    |    | 空  | 千  |
|    |    |    |    | 玉  |

語類體近章五第

月方人密撲山夜乘但透  
 蟾寒水圓情灑馬勢半興覺室  
 蝓蟾輪不應漁憶蹴有正衾虛  
 定笑簞從天誰須稠明  
 詹銀銀原青粘年銀過披如非  
 諸蟾盤無雲玉少作刻鶴潑月  
 我改屑樂浪曲擊水照  
 金金珠  
 盆蟾胎去板亂點柳年淪不滿  
 住藉隨袍行豐甘知空  
 金霜婦何全馬曾橫何差庭回  
 波蟾娥心歸足逐地處喜院散  
 只白散侍玉不破已是  
 流新姮問帝銀臣為堯龍堆風  
 輝蟾娥雲封盈朝虹民團鹽吹  
 清秋水同袁瞿高白方朱蘇方  
 輝蟾蟾

枚佑啓莛岳熹軾干

成大詩作

惹皎凍飛暮人暗光隨落不  
 砌潔雀花雲家度含車雁枚  
 任無爭厚如修南班翻迷空對  
 從藏餘一潑月樓女綺沙散  
 香處粒尺墨戶月月扇帶浴粉聯  
 粉  
 妬  
 虛棲和春丈寒韻逐飢無  
 繁空鴉月雪室深入馬鳥樹  
 叢自點照不散北楚散噪獨  
 自作暮三成花浴王銀野飄  
 學花林更花天雲絃盃田花  
 小  
 梅元金宋唐  
 嬌張馮尤陸曾杜李韓孟太  
 唐延浩  
 杜翥登裘游鞏甫嶠愈然宗  
 甫

第五近章體類語

四○歌○青○待○  
 更○歌○天○月○  
 山○月○金○懸○月○挂○  
 吐○波○玉○未○席○  
 月○裏○鈎○出○江○  
 上○  
 殘○空○素○望○待○懷○玉○雲○十○  
 夜○瞻○華○江○月○謝○鏡○母○分○兔○嫦○  
 水○鵲○雖○江○有○眺○臺○屏○圓○魄○娥○  
 明○鵲○可○自○懷○開○似○爛○數○生○藥○  
 樓○樓○攬○流○鏡○眉○銀○秋○  
 唐○匣○彎○盤○毫○水○  
 匣○杜○清○俊○唐○匣○彎○盤○毫○水○  
 元○甫○不○城○李○桂○素○廣○  
 開○甫○同○西○白○子○暈○寒○  
 鏡○游○郭○飄○低○宮○

成大詩作

細○七○三○陰○牛○寒○素○上○璧○月○盈○水○  
 學○寶○五○魄○浴○月○華○弦○彩○姊○虧○輝○  
 蛾○合○夜○  
 眉○成○中○  
 水○殘○素○下○皓○菱○團○梅○  
 鏡○月○蟾○弦○月○花○圓○梁○  
 半○圓○金○  
 輪○光○波○  
 眉○似○激○  
 月○扇○澀○  
 銀○丹○滿○度○桂○玉○殘○孤○  
 界○桂○輪○樓○影○兔○蟾○輪○  
 頃○魄○兔○  
 鎗○如○騰○  
 金○圭○精○  
 統○水○廣○映○玉○白○初○中○  
 素○魄○寒○階○盤○兔○三○秋○  
 蟾○金○明○玉○桂○破○月○清○  
 影○餅○月○鈎○輪○鏡○魄○光○

語類體近章五第

人○靜○壺○漢○燒○好○應○南○秋○河○  
 迢○催○家○銀○妨○樓○懷○漢○  
 遞○宮○漏○臺○燭○行○嘯○高○先○浩○  
 隔○扇○水○殿○中○看○雨○詠○與○中○秋○  
 西○風○。○號○禁○紅○行○素○胡○雨○夕○  
 方○多○仙○明○妝○雲○素○胡○雨○夕○  
 雉○音○光○有○娥○牀○  
 影○法○底○多○忙○自○十○  
 涼○曲○月○忙○自○十○怨○日○  
 獻○滿○却○昏○秋○  
 千○覽○秋○  
 里○裳○高○  
 可○夜○明○  
 憐○路○未○楊○  
 同○車○央○慎○  
 此○天○銀○  
 夕○遠○箭○  
 美○聲○金○  
 燒○好○應○南○  
 銀○妨○樓○  
 燭○行○嘯○高○  
 看○雨○詠○與○  
 紅○行○素○胡○  
 妝○雲○素○胡○  
 有○娥○牀○  
 底○多○忙○自○  
 忙○自○十○怨○  
 却○昏○秋○  
 負○金○  
 此○生○觴○  
 愁○此○  
 絕○夜○度○  
 不○老○  
 且○長○未○

成大詩作

月○書○今○皎○此○攀○滿○樹○風○  
 出○樓○夜○皎○時○桂○目○酌○簾○  
 浮○兼○九○新○華○瞻○仰○飛○八○  
 雲○繡○迴○秋○月○白○天○朋○月○  
 盡○夜○戶○腸○月○月○兔○高○鏡○十○  
 風○渾○皓○分○直○水○歸○夜○天○兔○  
 生○是○彩○明○欲○路○心○月○寒○應○  
 中○可○穿○照○數○疑○折○奈○疑○  
 夜○憐○珠○洞○秋○霜○大○九○鶴○  
 清○光○幌○房○臺○雪○刀○秋○髮○  
 星○宋○澄○幾○宋○林○轉○  
 辰○劉○輝○人○文○栖○蓬○  
 競○上○千○彥○見○行○  
 搖○壁○里○博○羽○地○  
 動○璿○別○毛○遠○  
 亦○戀○  
 貂○裘○

第五近章體類語

滿中三碧不吟人影捲關委入  
 衣秋五漢知拌傷閉簾山波河  
 水雲夜通今離千重還同金蟾  
 彩盡中槎夜隔里門照一不不  
 拂出新近月膊別靜客照定沒  
 不消月  
 落海色  
 朱曾翫桂寒倚鳥照搗  
 徧半二樓動覺吐生秋鵲席藥  
 地夜千隔幾兔十獨更自綺兔  
 水露里水人迷分樹隨多逾長  
 光寒外明情離圓秋人驚依生  
 凝嘗故  
 欲碧人明  
 流天心韓翁唐梅錢同同同杜  
 唐邦卷庚臣起  
 殷許白靖居  
 文居  
 圭渾易

成大詩作

張露 關柳 間月 夜暮  
 尹濯 人塘 說宮 不雲  
 將清對 不漠春 天秋 婦 中秋  
 眉輝聯 寐漠 上冷 桂 娥 月  
 學苦 半啼 暗月 不團 明清  
 庭鴉 不知 團 月寒  
 班風 寒 影一 上歲 年銀  
 姬飄 在鏡 憶歲 何漢  
 取素 梨晴 人花 處無  
 扇影 花飛 間開 看聲  
 傳寒 花 玉 今 明 轉 宋  
 唐 呂 自 邊 玉 盤 軾  
 康 杜 華 攀 此 生 此  
 令 審 中 攀 共 在 人  
 氏 言 孚 好 是 夜

第五近體類語

隨○舞○細○紅○杏○飄○紛○嬌○千○花○錦○萬○  
 流○綺○細○欲○花○紅○紅○紅○紅○信○葩○紫○  
 水○筵○香○燃○天○墮○駭○花○萬○  
 粉○綠○紫○紫○潘○玉○錦○  
 金○逐○馥○花○艷○ 縣○英○藥○  
 鈴○晚○郁○影○雪○綠○天○金○梅○  
 護○風○香○重○飄○暗○女○樽○妻○風○野○笑○  
 香○散○檀○菊○妬○花○歷○  
 紅○春○蝶○百○銷○花○板○婢○  
 雨○色○麥○花○ 蝶○怕○蓓○  
 亂○酣○驚○天○萬○燕○合○花○眠○風○蓄○  
 花○憐○歡○明○  
 春○萬○海○錦○如○蝶○巧○柳○芳○紅○破○  
 如○樹○棠○官○海○怨○笑○暗○種○錦○蓄○  
 海○紅○顛○城○

香○怨○  
 雪○雨○

成大詩作

【花】 銀○直○秋○風○雲○

解○瓊○澆○花○芳○花○春○河○擬○將○摩○頭○  
 語○英○花○魂○非○房○花○有○君○寒○露○澆○  
 影○山○玉○洗○澆○  
 薄○多○嬌○花○芬○飛○閑○秋○吹○清○非○開○  
 命○情○紅○姑○芳○花○花○心○笛○風○常○金○  
 老○去○陣○灑○餅○  
 絳○臙○殘○花○殘○殘○幽○  
 雪○脂○紅○神○芳○花○花○仙○渾○月○地○水○  
 露○如○借○潤○面○  
 錦○千○櫻○丹○簪○嬌○秋○無○神○鎗○天○沈○  
 繡○紅○雲○葩○花○花○花○聲○女○銀○高○沈○  
 雁○弄○潑○是○臥○  
 蝶○紅○梨○瓊○幽○芳○花○背○珠○浪○處○彩○  
 夢○飛○雲○葩○葩○華○明○寒○來○花○宜○虹○  
 清 宋  
 爛○風○香○花○春○韶○花○袁○厲○王○孔○蘇○  
 燠○花○雲○朝○葩○華○時○ 平 舜  
 枚○鵝○阮○仲○欽

語類體近章五第

巡老一雪白梅勾斷春竹春寒  
簷幹蓬裏衣妻引橋信外星葩  
索如微聞幸鷓春流  
笑龍雪香相子情水驢早黃水  
背梅鵬心

春水羅號林江水  
星肌浮國下南邊東水破水  
的玉夢夫美消離閣邊臘魂  
際骨斷人人息落

斗鐵翠素山孤竹  
落骨羽面中山外  
參槎呼朝高處一  
橫枿醒天士士枝

暗綠林  
香鬱道  
疎雪羅  
影骨浮  
凌玉仙  
雪骨妃

成大詩作

【梅花】

清寒東滿墨勿萬萬非雪曉花  
癯梅臺城水來國樹紅香濕王  
雪狂霞關無瓊非

清紅 外雙英白 映香  
香梅豐照綺 日櫻

肌東羅芳萬天淺  
寒花潤瀛雲山花香紅 蜀山  
香魁 千臨國霞 錦櫻

扶國樹水色染  
西傳 桑色 散霞  
湖春 種妍壯十扶旭 雪蒸  
丹里桑日

孤偷 花瑪為香仙鮮 豐紅  
山春 七璫婢雲種妍 膩霞  
日紅

水先 含紅  
葩春 露腮

【櫻花】



語類體近章五第

【菊花】

五楚晚金黃周水覆鴛鴦君濯  
 柳臣節精花子殿鴛鴦遊子錦  
 家餐愛香蠶同葉  
 佳霜東睡上香齒  
 彭醉色葩離凌出玉遠香  
 澤金波淤骨翳吳  
 吟香幽餐南穢泥香翠姬連錦  
 艷英山相畫理裳  
 殿冷碧似憐漿  
 衆香金泥幽雲六水  
 芳濃葉露香香郎越紅  
 老媚離淡金溜榜花拆  
 圃秋落艷葩秋池釧苞  
 秋煙水塘  
 傲隱金並  
 霜逸英頭

成大詩作

【蓮花】

【牡丹】

紅江殿一沈姚殿猩妖水何姑  
 裳鄉百捻香黃春唇紅雪遜射  
 花香亭魏姿吟仙  
 西輕北紫玉錦宮  
 施盈帶堂萼妝南贈一  
 笑曉玉枝一枝  
 水濂看日堂豐富紅綻枝斜  
 國溪微富賦貴衣  
 洛醒貴倚處壽  
 不凌陽濃貴紅修士陽  
 染波花金馬艷客妝竹家妝  
 鏤嵬  
 紺荷君玉風紅霞揚三第歲  
 葉花王盤雨艷彩妃弄一寒  
 醉笛春盟  
 翠芙錦檀  
 蓋藻苞心

第五近章體類語

他○懶○宜○春○  
 胡○新○風○  
 蝶○須○着○用○海  
 宿○信○雨○意○棠  
 花○深○丹○勻○棠  
 枝○青○嬌○顏○  
 點○嬌○色○  
 筆○全○  
 遲○在○稍○  
 欲○得○  
 朝○開○携○  
 醉○時○壺○  
 暮○與○  
 吟○莫○賦○鄭  
 看○愁○詩○谷  
 不○粉○  
 足○黛○艷○  
 羨○臨○麗○  
 窓○最○

信○穀○館○落○人○  
 流○恐○盡○問○  
 年○幄○無○深○杜○  
 髮○籠○地○紅○  
 有○輕○始○丹○  
 華○日○看○見○  
 護○到○花○  
 香○子○  
 霞○孫○花○  
 能○能○時○  
 歌○幾○比○  
 鐘○家○屋○  
 滿○事○唐  
 座○門○豪○羅  
 爭○倚○奢○  
 歡○長○  
 賞○衢○買○  
 贊○橫○栽○  
 肯○續○池○

宋  
宋  
祁

成大詩作

低○有○墻○江○離○莫○  
 空○暗○角○南○冷○言○  
 銀○梅○香○數○梅○酒○落○山○山○野○西○重○  
 一○來○枝○梅○酒○開○路○路○人○風○陽○  
 鉤○花○梅○花○何○僻○見○梅○離○零○節○  
 因○晚○  
 把○溪○還○感○  
 一○寒○被○而○  
 盃○水○好○作○  
 照○風○  
 催○  
 晴○  
 日○行○唐  
 數○客○錢  
 蜂○妻○  
 來○涼○起  
 過○  
 重○  
 憶○村○

慘○  
 野○  
 玉○  
 三○  
 尺○  
 愁○宋  
 絕○陸  
 水○游  
 邊○  
 花○  
 無○  
 凌○  
 寒○  
 獨○  
 自○  
 開○  
 遙○宋  
 知○王  
 不○安  
 是○石  
 雪○  
 爲○

語類體近章五第

田○擔○天○籠○淡○薄○數○疎○雪○曾○前○素○  
 水○來○下○外○月○隱○枝○影○後○無○村○娥○  
 四○清○有○鐘○微○山○殘○橫○園○爲○深○唯○  
 園○曉○花○來○雲○家○綠○斜○林○蝶○雪○與○  
 謀○豐○皆○初○皆○松○風○水○纔○戀○裏○月○  
 野○臺○避○月○似○樹○吹○清○半○  
 水○月○席○上○夢○下○盡○淺○樹○  
 空○昨○青○  
 夕○洗○豪○燈○空○歇○一○暗○水○被○夜○女○  
 陽○盡○家○前○山○寒○點○香○邊○雪○一○不○  
 一○浮○無○角○流○江○芳○浮○離○霜○枝○饒○  
 色○華○處○漸○水○店○心○動○落○侵○開○霜○  
 畫○鄭○不○忽○獨○杏○雀○月○忽○  
 春○國○飛○霜○成○花○啞○黃○橫○宋○  
 晴○風○觴○飛○愁○前○開○昏○枝○梅○僧○李○  
花菜藥白丹社梅以明堯齊商  
芍清花上  
 同○吳○趙○同○同○高○蘇○同○林○臣○已○隱○  
 錫○  
 麒○翼○ 啓○軾○ 逋○

成大詩作

夜○竹○鄭○粉○付○淚○作○墜○  
 無○外○清○淡○芳○迴○素○  
 明○相○瓶○明○香○梨○心○章○風○翻○  
 月○逢○路○清○清○與○臺○舞○紅○  
 一○見○梅○自○花○人○各○  
 暫○素○醉○一○去○已○自○  
 托○花○裏○家○骨○落○傷○  
 寒○登○手○春○未○遺○猶○  
 照○影○數○雪○容○香○成○青○  
 斜○朵○枝○桃○一○可○面○煙○  
 喜○明○李○占○宋○無○意○滄○相○  
 還○家○高○年○華○傳○海○忘○  
 雨○啓○常○游○雙○客○  
 窓○今○思○南○蝶○歸○將○  
 珠○飛○  
 盡○遊○更○

妬○雪○對○聊○相○聯○  
 欺○春○不○遂○來○  
 唐○杜○牧○

語類體近章五第

馬登懸螺釜降噴晴攢山峯林  
耳攀崖鬢嗽際吭嵐峯阿樹樹

壘紫尋煙哈崖崖遙屏烟層雲  
嶺翠幽螺研巍嵬嵐顏羅樹樹

衆積捫雲崆巍嶽嵐高危烟重  
嶺翠星鬢峒峩釜光岑峯樹樹

巨滴青煙岩巍嶙嵐雲群孤晴  
嶽翠崖鬢峩巍峒青根峯峯樹

大萬丹雲羊陵巉嵯奇奇危岡  
嶽笏崖煙腸帽巖峨巖峯峯樹

壘玉登千青崦崎龍浮遙層危  
嶂笏山鬢螺齧嘔樅嵐峯峯樹

成大詩作

山

山南連  
林山山

山西雲  
頭山山

山春青  
巔山山

山秋寒  
南山山

山溪空  
東山山

山深東  
西山山

(三) 登 臨

薄遊春粉幾秋正  
命子在壁處到色  
生相東乍夕星遙  
招逢風搖陽橋分  
風終原三紅人曇  
雨是是徑入未佛  
妬別夢月岸渡面

多美生銀數月濃  
情人非盤條斜香  
狂有薄新疎河不  
受壽命剪影漢上  
蝶已不一醉夜女  
蜂無爲籬扶生郎  
憐恩花霜秋憐簪  
上同上同花落菊白花紅花牽上同

趙同袁黃袁汪趙  
秋景

翼枚任卿龍翼

語類體近章五第

松碧一透列佛邸泰疎朝浮馬  
 籟玉逕雲仙頭環山松爽嵐耳  
 寒峰幽關唇青芝如斷夕積雙  
 草礪壁佳翠尖  
 摩攀瞰撐白送  
 碧白太青雲青 神幽白朝千  
 天雲荒空深來 剗篁雲嵐巖  
 鬼密黃暮萬  
 煙訪馬縹叩碧 削篠葉翠壑  
 氣偃耳縵巖噴  
 多怪峰峯扉吮 青松羊白丹  
 玉柏騰雲崖  
 削參九幽翠  
 成天折石壁  
 雲閭馬第入問  
 盪闔壘一煙真  
 胸開峰峰霏源

成詞大詩作

天苔林橫莽密好翠培舉大翠  
 梯徑麓嶺蒼林山微樓窳麓嶂  
 石  
 棧苔黃高翠刺暮亂礪突亂碧  
 石葉嶺嵐天山峯柯兀石嶂  
 玉  
 筍陰樵遙遠翠送亂峭炭烏翠  
 瑤壑徑嶺山螺青山立業徑碧  
 簪  
 拳幽螺碧碧翠碧絕巖萬嶽  
 千石徑髻岑螺屏山壁屏仍雪  
 鬢  
 萬雲蒼林列翠白斷細崩嶽  
 笏嶽翠壑仙樹雲壁徑芳頂  
 眉遙溪點碧萬濟九峯嶽  
 黛翠壑蒼嶺山勝折峯麓

第五近體類語

溪風清洋浴晴春城環廻重滯  
村潭溪洋浴沙溝溝瀛湍溼泉

漁寒寒涓潺寒秋宮東懸長齋  
村潭溪涓溪沙濠溝瀛溫灘嶽

晴冷幽淵淵秋晴城江晴危河  
川冷溪涵深沙汀濠濱灣灘隸

寒漁漫滃清沙煙溝河沙晴靈  
川磯漫滃流洲汀渠濱灣灘源

波苔青滂春盤長清清幽奔瀆  
臣磯潭池流渦汀渠河灣湍溼

龍江深滔芬波沙秋清滄飛南  
龍村潭滔流紋汀渠溝瀛湍溼

成大詩作

【水】

池鷗清秋奔狂銀顏朝五雲春  
塘波江潮濤波濤瀾宗丁際山  
關遠睡

清注滄江危風漣崩蓬  
池湖江潮濤波濤濤萊共捫之  
工蘿字

方明寒觀煙橫晴波滄觸葛路  
池湖江潮波波漣濤浪

六仙臨  
陂平春潮微澄清秋波鼇掌下  
塘湖江頭波波漣濤瀾戴露界

懸湖秋驚滄清淪霄狂巨餐  
泉雲江濤波波濤濤瀾靈沆  
擘瀼

飛江荒長高奔清狂廻  
泉雲江江潮波濤濤瀾

第五近體類語

鮫○漁○鷗○明○如○蹴○渺○水○暮○釣○鳴○紺○  
宮○村○鷺○水○練○天○茫○雁○潮○磯○頭○碧○  
貝○蟹○

闕○舍○鷗○秋○鮫○練○屨○碧○怒○海○綠○湛○  
夢○水○室○光○樓○流○潮○潮○波○碧○  
魚○天○

龍○吳○魚○南○漁○東○醴○穀○白○大○湛○晚○  
曼○蛸○蟹○浦○舍○近○泉○紋○鷗○江○藍○潮○  
衍○象○

垂○漁○帆○新○素○片○水○碧○百○碧○  
合○澄○釣○浦○影○漲○波○帆○雲○江○川○波○  
浦○江○

珠○如○洲○湖○天○春○水○棹○柳○巨○萬○碧○  
還○練○渚○鏡○塹○水○光○歌○塘○江○波○流○

煙○山○潮○湖○一○蟻○海○射○白○碧○  
島○溜○沙○沼○帆○煙○天○潮○沙○泉○

成大詩作

錦○畫○古○蓼○萬○雪○滄○濁○積○潮○水○天○  
纜○鷗○澗○渚○頃○陣○滄○浪○水○海○伯○吳○

畫○澤○浩○野○蟹○白○森○錦○碧○蠡○海○鯨○  
舸○國○瀚○井○舍○馬○森○浪○水○測○若○濤○

欸○大○浩○曉○晚○雪○屨○碧○遠○遠○四○魚○  
乃○澤○浩○井○渡○浪○氣○浪○水○浦○海○龍○

竹○葦○滾○寬○夜○瀑○海○鳴○浦○曲○四○鮫○  
嶼○岸○滾○溜○渡○布○市○綠○樹○浦○濱○宮○

遠○一○桂○絕○曲○注○貝○盪○浦○石○北○馮○  
嶼○葦○楫○澗○渚○壑○闕○漾○激○灑○海○夷○

島○擊○畫○碧○遠○鱗○噴○激○宿○碧○碧○陽○  
樹○楫○漿○澗○渚○窟○雪○灑○浪○灑○海○侯○

語類體近章五第

【城塞】

強要峻頹空荒三千皎陽精白  
 攻害堞塼城城楚帆人侯衛練  
 弱白雨淚怒填飛  
 守古翠湯城金  
 城堞池樓城靈翻限白浩  
 龍霄銀南驚蕩  
 盤麗粉深城孤怒屋北濤波  
 虎譙堞濠門城  
 踞秋桃夕碧鼠  
 城紫城城邊瑟花陽似飲  
 山壘塞池塼城瑟浪渡藍河  
 河  
 襟形十百金江沈鴛波水蜃  
 帶勝切雉塼城壁鴛心拍吐  
 月夢月天樓  
 古雉城山  
 塞堞隍城

成大詩作

杜一水碧桑畫細三白春老滄  
 若帆中糶田舫雨十石水僧海  
 洲風央糶碧朱春六寒煎洗拾  
 海簾帆灣流茶鉢珠  
 雁菱雪白  
 齒荷山蘋海花煙七積春落鐵  
 橋鄉崩洲市潭簑十水水花網  
 蜃竹雨二涵剪流珊  
 翡翠界水樓喚笠灘天羅水糊  
 翠陽青之  
 寒波山干鷗一白鯨白寒桃  
 沙葦鷗怯蘋流花  
 白水吼水鴈凌春鼉秋夕潭  
 馬連春之渚空水擲水照水  
 奔天雷涯



【寺塔】

初°金°紺°紺°佛°奈°彼°禪°蜂°浮°住°浮°  
地°地°園°刹°閣°苑°岸°林°臺°屠°天°雲°  
上°外°

寫°靈°寶°舍°大°梵°七°禪°雲°浮°  
殿°宇°輪°刹°室°殿°寶°房°龕°圖° 摩

山°香°粥°塔°兜°麗°寶°禪°僧°招° 北  
寺°國°魚°鈴°鉢°塔°刹°扉°房°提° 斗

秋°蕭°木°慧°寶°雁°十°莊°仁°伽° 駕  
寺°寺°魚°樓°樹°塔°地°殿°祠°藍° 黃  
鶴

花°金°梵°雀°湧°貝°梵°鹿°珠°祇° 送  
塔°刹°宮°離°地°塔°宇°苑°林°園° 天  
樂

精°禪°石°雁°表°桂°白°淨°飛°蓮°  
舍°刹°龕°堂°刹°宇°馬°土°檀°宮°

【樓閣】

歌°住°雨°讀°仙°雲°翠°酒°邃°旋°飛°仙°  
舞°虛°花°書°觀°閣°樓°榭°閣°臺°樓°居°  
樓°空°臺°樓°

樓°飛°水°曲°繡°靈°紅°層°  
玉°賣°望°白°觀°閣°樓°榭°閣°臺°樓°樓°  
鏡°酒°鄉°雲°

臺°樓°臺°樓°禪°珠°酒°壯°綺°層°朱°高°  
觀°閣°樓°觀°閣°臺°樓°樓°

俯°人°望°夕°  
下°倚°人°陽° 雲°舞°九°舞°涼°歌°岑°  
方°樓°寰°樓° 閣°樓°層°閣°臺°樓°樓°

瞰°百°與°月° 吟°綺°蕙°曲°紫°樓°危°  
飛°尺°雲°當° 閣°樓°樓°閣°閣°臺°樓°  
鳥°樓°齊°樓°

歌°雲°畫°月°傑°塔°豐°  
樹°屋°樓°榭°閣°臺°樓°

語類體近章五第

池○長○時○流○驚○垂○動○八○百○西○  
 歲○歌○相○忽○波○釣○岳○月○窓○  
 月○遊○遊○引○有○常○過○者○陽○湖○臨○夜○  
 深○寶○少○山○不○定○洞○徒○城○水○平○庭○鐘○  
 地○林○行○歌○鳥○半○湖○有○欲○濟○含○湖○聲○  
 紉○徒○寺○浩○飛○應○日○魚○無○虛○混○出○  
 澄○倚○渺○問○長○髮○情○舟○太○太○北○林○  
 夕○對○珠○墮○璣○斑○楫○一○清○  
 碧○帆○端○  
 殿○雁○遠○同○居○氣○  
 下○塔○沈○却○願○許○耻○蒸○孟○  
 秋○丹○徑○如○疑○無○棠○聖○雲○浩○  
 陰○青○期○閑○無○棠○明○夢○然○  
 歸○古○地○漁○坐○  
 路○龍○父○中○看○波○

成大詩作

雲○樓○在○出○一○  
 水○臺○城○曉○宿○  
 自○登○孤○市○堂○金○金○空○青○證○貝○禪○  
 陰○碧○山○雲○山○山○王○蓮○道○葉○室○  
 峯○寺○終○寺○寺○宅○宇○心○宮○  
 斷○日○樹○方○  
 橋○一○醉○影○微○諸○僧○地○選○外○  
 荒○徑○醺○中○茫○天○入○布○佛○  
 蘚○入○醺○流○水○近○定○金○場○方○  
 合○湖○見○國○  
 心○分○琉○清○舍○梵○  
 空○鐘○璃○淨○衛○帝○香○  
 院○不○聲○僧○唐○殿○境○城○宮○火○  
 落○雨○兩○歸○張○  
 花○山○岸○夜○香○物○禮○真○  
 深○長○同○聞○船○祐○積○外○梵○境○  
 潤○月○月○飯○情○王○  
 猶○因○  
 憶○無○悲○龍○

語類體近章五第

蓬瀛去。何從借六龍。  
 俯首無齊魯。山抱東瞻海似杯。  
 信萬山開。仍有日抱瞻海上。  
 秦始後。漢皇桑上。天橫碣石來。君看  
 西嶽嶸。處尊諸女。立似兒孫安得仙。  
 人節杖。拄到玉門。洗頭盆。入谷無歸  
 路。箭括通天。有一門。稍待秋風涼。後  
 尋白帝。問真源。有玉門。稍待秋風涼。後  
 十層突兀。在虛空。浮圖四十門。開面面風。却怪鳥

成大詩作

煙霞晚。山蟬處處吟。  
 嶽立鎮南楚。山蟬處處吟。  
 壘翠連雲。峽得為羣。在陰巖。畫不分。唯應  
 嵩與華。清峽得為羣。在陰巖。畫不分。唯應  
 危欄散暮登。蓬萊閣。重登臨。臥鼓角孤城。月客  
 川萬古。心滯。蓬萊閣。重登臨。臥鼓角孤城。月客  
 終何托。心滯。蓬萊閣。重登臨。臥鼓角孤城。月客  
 百靈朝拱處。嶽。且棲松霧重。鷗。渚煙深。月客  
 臨下。界高。雲。山雙老眼。天。地。一秋毫。欲訪  
 宋陳鑿之。子山

第五近體類語

上○白○  
 一○日○  
 層○依○登○  
 樓○山○鶴○雀○  
 盡○樓○  
 黃○河○  
 入○海○  
 流○  
 欲○唐○  
 窮○王○  
 千○之○  
 里○渙○  
 目○  
 更○  
 驚○層○  
 天○樓○  
 上○高○  
 人○百○  
 尺○  
 寺○  
 手○  
 可○  
 摘○  
 星○  
 辰○  
 不○唐○  
 敢○李○  
 高○  
 聲○白○  
 語○  
 恐○  
 空○陰○州○風○  
 笙○煙○雲○  
 鶴○今○九○一○  
 下○後○點○舉○  
 高○巢○到○  
 寒○居○五○天○  
 亦○更○關○  
 覺○滄○  
 寬○海○快○  
 日○意○  
 笑○三○平○  
 拍○竿○生○  
 洪○有○元○  
 厓○向○此○張○  
 詠○來○觀○養○  
 新○井○萬○浩○  
 句○處○萬○  
 方○古○  
 滿○知○齊○  
 昌○魚○  
 好○  
 便○  
 淹○  
 留○

成大詩作

市○情○誰○  
 橫○將○  
 搖○北○玉○鄂○  
 月○洛○笛○州○  
 旌○弄○南○  
 旗○蜀○中○樓○  
 萬○江○秋○  
 里○無○  
 舟○語○黃○  
 抱○鶴○  
 却○南○飛○  
 笑○樓○來○  
 鱸○識○  
 鄉○燭○舊○范○  
 垂○天○遊○成○  
 釣○燈○大○  
 手○火○漢○  
 三○樹○  
 武○更○有○  
 欄○裏○來○仙○  
 清○烟○人○  
 與○耘○漠○居○  
 與○笠○漠○處○  
 誰○漁○即○  
 同○蓑○大○鼇○  
 笑○江○宮○  
 侶○南○  
 中○去○更○  
 雨○作○  
 剩○濛○層○  
 有○濛○樓○  
 夜○峭○宋○  
 檀○花○倚○鄭○  
 千○鑣○空○  
 里○柳○群○俠○  
 月○策○群○  
 熙○岫○  
 凭○怡○西○  
 城○洞○飛○  
 春○平○  
 樹○絕○地○  
 雨○頂○上○  
 濛○攀○自○  
 似○驚○  
 出○人○  
 籠○語○  
 半○  
 落○天○  
 日○中○  
 鳳○城○迴○  
 佳○梯○  
 氣○暗○  
 合○踏○  
 如○穿○

|               |                           |                                  |                            |
|---------------|---------------------------|----------------------------------|----------------------------|
| 要俯<br>一仰<br>風 | 首只<br>白有<br>雲天<br>低在<br>上 | 在城<br>浮中<br>雲望<br>外衡<br>山岳<br>道中 | 風郡<br>送樓<br>月乘<br>來曉<br>上樓 |
| 舟行<br>明鏡<br>中 | 更無<br>山與<br>齊             | 浮雲<br>作飛<br>蓋                    | 盡日<br>不能<br>回              |
| 蓬萊<br>定不<br>遠 | 舉頭<br>紅日<br>近             | 謁來<br>巖谷<br>遊                    | 晚色<br>將秋<br>至              |
| 正             | 回                         | 却                                |                            |

|                     |                                 |                           |                      |
|---------------------|---------------------------------|---------------------------|----------------------|
| 黑雲<br>翻墨<br>未遮<br>山 | 雲知<br>有松<br>寺                   | 舟無<br>近紛<br>紛落<br>白雲<br>明 | 動樹<br>忽合<br>青山<br>聲滿 |
| 白雨<br>跳珠<br>亂入<br>船 | 六月<br>二十<br>七日<br>望湖<br>樓醉<br>書 | 遊鍾<br>山                   | 山中<br>雜詩             |
| 卷地<br>風             | 夕陽<br>歸去<br>不逢<br>僧             | 白雲<br>明月<br>弔湘<br>娥       | 村荒<br>暮景<br>閑        |
|                     | 勝武<br>陵                         | 晚來<br>波                   | 虹收<br>仍白<br>雨        |
|                     | 宋王<br>安石                        | 乘興<br>輕                   | 金元<br>好問             |

第五近體類語

山○綠○蒼○秋○泉○舜○巖○岸○霞○樓○  
 遠○野○際○虹○臨○耕○懸○花○明○觀○  
 疑○明○千○朋○香○餘○青○明○深○滄○對○  
 無○朝○峯○晚○澗○草○壁○水○淺○海○聯○  
 樹○日○出○日○落○木○斷○樹○浪○日○

聲○山○下○在○始○知○身○出○萬○重○雲○

潮○青○雲○江○峯○禹○地○川○風○門○  
 平○山○端○鶴○入○鑿○險○鳥○卷○聽○  
 似○澹○一○弄○翠○舊○碧○亂○去○浙○  
 不○晚○鳥○晴○雲○山○流○沙○來○江○  
 流○煙○閑○煙○多○川○通○洲○雲○潮○

韋虞張宋沈杜陳李盧駱  
 承世九之佳審子照賓  
 慶南齡問期言昂嶠隣王

大詩作

林○里○半○雨○十○百○江○來○  
 間○兼○夜○渾○二○年○上○忽○  
 風○天○東○日○虛○巫○三○前○荒○楚○吹○  
 鶴○華○湧○風○觀○語○山○峽○事○城○城○散○  
 日○雜○一○鄧○一○九○見○歌○猿○城○望○  
 氣○詩○點○林○夜○峯○有○悲○湖○  
 氤○一○金○猿○灘○聲○隔○樓○  
 乍○鳥○三○啼○船○似○江○下○  
 露○出○山○明○頭○舊○便○水○  
 孤○海○銀○月○彩○舊○時○是○天○  
 峯○心○闕○中○翠○滿○秋○空○同○  
 半○明○香○沈○沈○蕭○  
 未○廖○孔○貢○朝○雲○千○  
 分○說○洪○波○萬○  
 一○夜○雷○

語類體近章五第

霜○瀑○湘○千○一○排○山○縱○翠○野○古○到○  
增○近○水○年○二○雲○經○橫○壁○水○成○江○  
孤○春○堂○餘○里○數○七○一○虎○蒼○餘○吳○  
月○風○堂○故○山○峯○澤○川○牙○煙○荒○地○  
白○濕○去○國○徑○出○斷○水○石○起○堞○盡○

江○松○秋○萬○雨○漏○潮○高○素○平○新○隔○  
截○多○山○事○三○日○自○下○花○林○耕○岸○  
亂○曉○面○只○聲○半○九○數○狼○夕○入○越○  
峰○日○面○空○曉○江○江○家○尾○鳥○亂○山○  
青○青○開○臺○爲○明○回○村○灘○還○山○多○

宋

林趙張朱真揚賀王司歐韓僧  
景師山萬安馬陽處  
熙秀棊熹氏里鑄石光修琦猷

成大詩作

遠○橫○水○樹○峯○日○野○日○卷○芳○水○雲○  
山○雲○田○深○巒○沒○曠○落○籬○樹○從○捲○  
芳○芬○秋○烟○依○鳥○天○江○唯○籠○天○手○  
草○疊○雁○不○枕○飛○低○湖○白○秦○漢○峯○  
外○嶂○落○散○席○急○樹○白○水○棧○落○色○

流○曠○山○溪○世○山○江○潮○隱○春○山○泉○  
水○野○寺○靜○界○高○清○來○几○流○列○和○  
落○際○夜○鶯○接○雲○月○天○亦○遠○畫○萬○  
花○遙○鐘○忘○人○過○近○地○青○蜀○屏○籟○  
中○波○沈○飛○天○遲○人○青○山○城○新○聲○

司韋劉錢李岑孟王杜同李崔  
空應長浩  
曙物卿起頎參然維甫白謚

語類體近章五第

山溪山月松北半江山寒紫黛  
連雲鐘明檜嶺夜對從樹微色  
極初夜古老風秋楚建依已晴  
浦起度寺依煙磬山業微見峰  
鳥日空客雲開江千千遠湖雲  
飛沈江初裏魏色里峯天星外  
盡閣水到寺關動月出外落出

月山汀風樓南滿郭江夕滄穀  
上雨月度臺山山連至陽海紋  
青欲寒閑深氣寒漁灣明初江  
林來生門鎖象葉浦陽滅看水  
入風古僧洞鎖雨萬九亂漢檻  
未滿石未中商聲家派流月前  
眠樓樓歸天顏來煙分中明流

顧許賈項處許劉李皇韋劉錢  
甫應長  
况渾島斯默收滄紳冉物卿起

成大詩作

黑三水地潮月千雨鳥日巖石  
水山搖寒廻在燈花散色瀑峻  
澄半天峰三衆燃知庭不飛溜  
時落地障楚峯雨佛還到寒聲  
潭青白日白頂塔境靜地雪急  
底天

出外  
山天山泉一流龍樹松月  
白二入近歷流聲水歸陰風高  
雲水混鷄五亂出識水渾吼松  
破中汎橫湖葉風禪白似夜影  
處分青秋青中林心虛雲潮圓  
洞白

門驚  
開洲袁同嚴厲高唐僧張黃張  
唐遂善  
白李枚成鶻啓肅住鸞庚斛  
居易白



語類體近章五第

滿鉢梁函巖相松入巖一  
耳龍寺關畔逢濤境底鑑  
只浮鐘月蒼橋振潮泉寒  
聞處來落藤上壑聞飛光  
諸雲殘聽懸無鳴人輕開  
澗生月雞日非天語練玉  
響座落度月客籟好白匣

回巖漢華岸行瀑看峯兩  
頭虎宮岳邊盡布山頭螺  
方歸砧雲瑤江春不龜青  
覺時斷開草南崖厭蝕黛  
乘風早立記都動馬古落  
峯滿鴻馬春是地行苦銀  
低林過看秋詩雷遲青盤

明元  
僧王同高楊薩僧張鄭周  
德守都元  
祥仁啓慎刺益翁祐權

成大詩作

村欲山山谷寺新玉江樵數秋  
如談從重泉是月室月戶家風  
有世飛水噴晉已金轉人茅萬  
雪事鳥複薄時生堂空家屋里  
禱佛高疑秋陶飛餘為隨清芙  
花無邊無逾侃鳥漢白處溪蓉  
白語出路響宅外士畫見上國

山不天柳山記落桃巔仙千暮  
未管向暗翠傳霞花雲源樹雨  
着客平花空隋更流分雲蟬千  
霜愁燕明濼代在水冥路聲家  
楓禽盡又畫率夕失與有落薛  
葉自處一不更陽秦黃時日荔  
丹啼低村開碑西人昏通中村

宋  
方真同陸朱戴張蘇王趙戴譚  
山復安叔用  
岳民游熹古未軾石扑倫之

語類體近章五第

規○離○奇○奇○龐○逢○庸○宗○通○鴻○公○豐○  
模○懷○籌○勳○眉○迎○夫○盟○窮○恩○私○碑○

危○知○奇○奇○支○縫○庸○龍○蓬○洪○功○豐○  
言○時○零○功○持○人○君○顏○蒿○恩○勳○盈○

危○知○兒○奇○枝○勾○封○龍○冬○翁○功○豐○  
機○非○重○文○梧○奴○侯○鍾○烘○茶○名○隆○

師○知○離○奇○移○江○胸○容○農○聰○功○隆○  
儒○幾○居○兵○風○湖○中○儀○功○明○臣○功○

師○知○離○奇○垂○雙○從○庸○宗○通○紅○空○  
承○音○群○才○名○鬢○容○才○支○侯○顏○文○

遲○馳○離○奇○吹○雙○從○庸○宗○通○鴻○公○  
疑○驅○愁○謀○噓○全○軍○人○工○儒○圖○侯○

成大詩作

窮○雄○戎○蟲○忠○中○童○同○同○東○  
年○飛○功○沙○臣○丞○謠○文○儔○邦○

窮○雄○弓○終○忠○中○童○同○同○東○  
交○風○刀○生○勤○勝○時○生○科○洋○

風○雄○弓○戎○忠○中○童○同○同○東○  
流○文○鞋○軒○肝○原○蒙○心○庚○征○

風○雄○弓○戎○忠○中○童○同○同○同○  
懷○才○旌○韜○真○庸○心○鄉○舟○車○

風○融○宮○戎○忠○中○中○同○同○同○  
情○和○中○衣○良○心○年○儕○行○棲○

豐○窮○雄○戎○蟲○忠○中○同○同○同○  
坊○途○圖○行○魚○誠○流○根○僚○倫○

(四)

人

事

語類體近章五第

無○愚○虛○胥○書○歸○衣○威○妃○微○機○緇○  
私○蒙○心○徒○癡○耕○襟○儀○癩○音○性○徒○

燕○芻○虛○鋤○書○歸○衣○機○飛○微○機○治○  
才○莠○懷○耘○淫○心○冠○心○觴○章○牛○兵○

燕○無○虛○鋤○車○漁○衣○機○飛○揮○義○治○  
辭○爲○名○田○書○值○裳○先○仙○毫○皇○民○

巫○無○虛○鋤○興○漁○依○譏○非○揮○呶○治○  
醫○聊○襟○芟○儻○樵○違○訶○凡○絃○晤○邦○

于○無○儲○疎○餘○初○歸○譏○肥○圍○咨○曬○  
歸○能○君○狂○醒○心○田○訕○甘○攻○嗟○歌○

于○無○儲○梳○餘○書○歸○譏○威○圍○微○怡○  
鬢○知○糧○頭○年○生○農○嘲○靈○棋○軀○顏○

成大詩作

錐○羈○私○嬉○遣○隨○詞○詩○詩○詩○悲○龜○  
刀○囚○交○春○蹤○從○章○魂○名○歌○歌○齡○

伊○葬○私○疲○遣○隨○疑○詩○詩○詩○芝○眉○  
周○倫○情○癡○賢○宜○兵○情○葩○壇○眉○尖○

著○葬○私○疲○遣○痴○司○詩○詩○詩○時○眉○  
龜○常○門○羸○才○兒○徒○魔○狂○家○流○愁○

追○飢○窺○卑○遣○痴○司○詞○詩○詩○時○悲○  
陪○羸○窳○官○書○情○農○林○淫○脾○粧○哀○

緇○飢○疵○卑○肌○維○司○詞○詩○詩○時○悲○  
流○寒○環○謙○膚○持○空○場○蛆○餘○人○酸○

緇○衰○羈○斯○披○遣○葵○詞○詩○詩○詩○悲○  
衣○微○官○文○襟○功○心○宗○書○才○人○吟○

第五近體語

純○巾○塵○人○臣○真○來○開○摧○槐○回○乖○  
忠○箱○寰○倫○僚○儒○賓○誠○殘○台○頭○違○

純○民○塵○仁○人○真○來○人○陪○雷○回○懷○  
誠○心○襟○人○工○如○蹤○才○從○同○天○柔○

倫○民○塵○仁○人○辛○災○才○陪○催○廻○懷○  
常○謠○塗○聲○文○酸○祥○錄○筵○詩○文○慙○

宸○民○春○仁○人○新○猜○才○陪○催○廻○懷○  
聰○生○宮○慈○寰○詩○疑○能○臣○租○瀾○人○

宸○民○春○身○人○新○真○萊○杯○催○徘○核○  
衷○人○愁○心○生○人○人○妻○盤○妝○徊○張○

宸○貧○巾○賓○人○新○真○萊○開○催○槐○核○  
謨○家○車○僚○間○交○詮○衣○樽○耕○門○宏○

成大詩作

迷○西○啼○低○驚○吳○吾○徒○胡○扶○諛○儒○  
花○洋○妝○頭○才○姬○儂○勞○僧○輪○言○生○

佳○西○啼○題○齊○巖○吾○圖○胡○趨○驅○儒○  
人○施○眉○詩○民○豪○儕○書○姬○陪○邪○林○

佳○栖○稽○題○齊○巖○吾○圖○孤○趨○驅○儒○  
兒○遲○留○襟○家○才○生○南○懷○炎○姦○宗○

佳○嘶○奚○題○齊○糊○吾○屠○孤○樞○朱○誅○  
名○笱○奴○名○名○塗○人○沾○吟○機○門○求○

佳○梯○奚○提○黎○模○吾○奴○孤○夫○朱○殊○  
篇○航○僮○擗○民○稜○兒○顏○標○家○顏○勳○

排○迷○奚○提○低○獻○吳○吾○孤○夫○扶○殊○  
擠○途○囊○携○回○款○兒○廬○兒○妻○持○途○

語類體近章五第

寬○鸞○端○官○肝○彈○丹○寒○恩○婚○村○尊○  
容○閨○詳○奴○腸○弦○青○門○響○姻○童○嚴○

盤○鸞○端○官○看○彈○安○寒○援○圍○奔○存○  
旋○姿○嚴○司○棋○拳○詳○生○琴○人○馳○誠○

攤○鸞○端○官○看○殘○安○寒○膳○恩○論○敦○  
書○興○莊○家○山○年○心○微○羞○施○心○龐○

癩○觀○冠○官○觀○殘○安○寒○膳○恩○論○屯○  
痕○娛○纓○箴○兵○骸○邦○儒○羊○情○詩○田○

刪○寬○冠○酸○觀○干○安○寒○緜○恩○坤○屯○  
詩○租○裳○寒○光○雲○排○廬○書○榮○儀○營○

刪○寬○冠○端○觀○干○彈○丹○昆○恩○昏○村○  
除○仁○筭○居○心○支○冠○心○仍○波○曹○居○

成大詩作

溫○軒○宛○繁○元○耘○勤○君○群○分○文○質○  
顏○昂○魂○文○妃○紉○勞○恩○居○司○名○恭○

溫○藩○宛○蕃○元○耘○勤○軍○群○分○文○呻○  
純○垣○辭○姬○功○勦○庸○需○言○財○明○吟○

孫○魂○言○萱○園○云○勦○軍○群○紛○文○邊○  
吳○銷○辭○堂○丁○為○勞○機○生○華○星○巡○

門○溫○言○噎○轅○芸○薰○軍○群○紛○雲○文○  
生○良○詮○陬○門○窓○祈○營○戍○爭○臺○章○

尊○溫○軒○喧○煩○元○薰○軍○群○紛○氛○文○  
崇○柔○轅○囂○憂○勦○陶○門○疑○紉○妖○辭○

尊○溫○軒○喧○煩○元○薰○勤○君○焚○分○文○  
王○存○義○呼○襟○戎○奢○王○臣○書○離○園○

語類體近章五第

宵○跳○蕭○傳○專○捐○全○連○禪○仙○邊○淵○  
衣○梁○森○神○征○軀○功○鑿○心○姿○謀○源○

銷○調○貂○傳○專○嬋○宣○連○禪○仙○選○淵○  
魂○琴○蟬○家○攻○娟○言○枝○僧○妃○延○沖○

銷○梟○挑○傳○乾○鞭○宣○連○禪○錢○仙○涓○  
兵○雄○燈○名○元○答○猷○衡○窺○神○凡○埃○

銷○澆○挑○傳○虔○銓○穿○便○禪○然○仙○獨○  
磨○滴○琴○郵○祈○衡○窺○安○機○犀○寰○租○

超○堯○條○傳○權○專○鐫○全○纏○然○仙○邊○  
群○民○分○呼○臣○精○銘○材○頭○箕○儒○愁○

超○堯○髻○蕭○權○專○鉛○全○纏○延○仙○邊○  
倫○廷○年○條○門○權○華○人○綿○賢○才○隅○

成大詩作

田○弦○賢○堅○天○千○先○艱○閒○攀○斑○關○  
家○聲○愚○剛○真○秋○天○虞○人○轅○師○防○

田○煙○賢○堅○天○千○先○艱○閒○頑○蠻○關○  
夫○霞○妻○貞○吳○金○登○辛○居○黯○夷○心○

年○燕○賢○肩○天○天○先○先○蠶○頑○姦○還○  
庚○支○蒙○隨○恩○顏○人○生○夫○冥○臣○軍○

妍○騰○賢○肩○天○天○前○先○嫻○頑○姦○還○  
媼○脂○良○摩○心○家○賢○鞭○都○夫○雄○丹○

研○憐○賢○賢○天○天○前○先○綸○山○姦○還○  
尋○才○能○人○機○然○言○儒○巾○妻○民○家○

研○田○絃○賢○天○天○前○先○艱○山○攀○寰○  
磨○居○歌○明○威○淵○身○秦○難○居○龍○區○

語類體近章五第

郎皇長芳光誇嘉家婆和歌逃  
當謨歎聲榮於謀庭娑柔童名

唐相常芳章爺嘉茶摩和歌逃  
堯思刑顏臺孃祥槍孽平姬禪

唐良忘芳王嗟瑕茶訛科歌勞  
虞工年年庭歎瑜經音名聲徠

囊良莊芳王丫葩華花科歌勞  
錐媒嚴齡孫鬢經胥顏頭喉心

囊良倉長王鄉又華家蛾多饜  
金家皇吟侯人魚顛聲眉才餐

剛郎皇長王鄉奢牙家婆多歌  
柔君居生門音華旗奴心財諸

成大詩作

騷高陶操敵包郊漂妖驕焦超  
擅賢朱持詩藏居淪嬌盈眉凡

韜高陶褒豪包郊飄妖驕焦朝  
鈴吟唐崇奴容勞零姬兵心臣

膏高敖褒豪包茅飄僑驕蕉朝  
肱才遊旌雄羞茨蓬居奢熱廷

膏嘈曹糟毫膠嘲交招驕焦朝  
梁嗽司糠芒舟譏情魂淫琴官

牢搔高葉操苞嘲交招樵椒朝  
愁頭人萊兵苴訃隣賓漁房紳

牢騷高阜操庖鈔交描樵驕朝  
籠人風陶刀丁詩歡羣歌誇班

語類體近章五第

深○偷○幽○休○柔○游○憂○恒○登○仍○丁○經○  
謀○生○栖○兵○膺○民○傷○心○龍○孫○年○綸○

深○尋○幽○休○籌○游○流○優○僧○憑○伶○經○  
憂○盟○明○明○邊○觀○年○游○家○陵○人○營○

心○尋○幽○浮○籌○修○流○優○能○憑○銘○經○  
頭○蹤○貞○生○量○身○離○倡○棋○河○肝○筵○

心○箴○幽○仇○愁○修○流○優○能○矜○蒸○經○  
塵○言○情○響○邊○辭○言○柔○詩○持○民○書○

心○沈○謳○謀○愁○脩○流○優○朋○稱○承○廷○  
期○吟○歌○生○懷○眉○民○獎○從○揚○歡○臣○

心○深○頭○幽○休○柔○流○憂○朋○稱○承○零○  
脾○沈○陀○囚○徵○馴○連○勤○儕○觴○顏○丁○

成大詩作

傾○誠○精○清○爭○耕○生○榮○平○英○防○徇○  
都○心○詳○純○權○佃○民○華○章○魂○邊○律○

輕○真○精○清○清○耕○行○榮○評○英○綱○踰○  
仇○純○純○閑○高○漁○人○枯○詩○風○維○踰○

輕○名○精○清○清○宏○行○榮○評○英○英○滄○  
肥○臣○靈○規○廉○規○吟○名○量○姿○雄○浪○

青○名○盈○精○清○宏○行○兵○驚○平○英○傷○  
衿○流○虧○神○和○謨○歌○端○魂○民○豪○神○

青○名○成○精○清○宏○行○兵○驚○平○英○商○  
囊○譽○功○英○才○才○兵○車○猜○生○才○量○

青○傾○成○精○清○爭○耕○生○朋○平○英○防○  
年○城○家○微○狂○功○耘○涯○時○心○名○姦○



語類體近章五第

翁○洪○功○公○豐○風○宮○蟲○忠○僮○同○東○  
婿○福○過○事○頰○采○女○篆○孝○僕○夢○道○

翁○洪○工○公○豐○風○雄○冲○忠○中○同○同○  
媪○業○巧○族○碩○化○悍○澹○義○正○贊○異○

聰○紅○攻○公○隆○風○雄○終○忠○中○同○同○  
慧○淚○奪○主○替○骨○辯○始○蓋○土○穴○氣○

聰○紅○蒙○功○隆○風○窮○戎○忠○忠○同○同○  
敏○友○蔽○烈○準○俗○士○衛○欸○鯁○產○類○

通○鴻○籠○功○空○風○窮○戎○忠○忠○銅○同○  
敏○緒○絡○績○手○韻○苦○服○直○告○臭○調○

蓬○鴻○豐○功○空○豐○風○躬○忠○忠○重○同○  
首○略○啞○業○屋○儉○格○儉○勇○悃○禪○病○

成大詩作

凡○銜○兼○詹○織○嫌○三○談○探○簪○吟○琴○  
民○恩○併○言○腰○猜○公○天○奇○纓○鬚○心○

○銜○潛○殲○謙○廉○酣○貪○甘○譜○今○琴○  
涎○冤○夫○響○恭○能○歌○權○心○知○吾○樽○

芟○巖○緘○沾○謙○廉○酣○貪○寒○含○襟○琴○  
夷○居○封○恩○虛○貞○呼○財○心○悲○期○書○

芟○凡○讒○沾○添○嚴○慙○貪○談○含○金○吟○  
鋤○庸○誣○濡○丁○親○惶○饑○詩○糊○創○哦○

凡○讒○占○淹○嚴○慙○三○談○含○金○吟○  
材○人○風○留○師○羞○緘○朋○毫○門○鞍○

凡○銜○占○拈○織○鹽○三○談○探○音○吟○  
流○杯○星○花○眉○梅○餘○鋒○幽○塵○朋○

語類體近章五第

羈○斯○披○慈○持○帷○姬○祠○棋○詩○時○悲○  
旅○道○讀○愛○久○幕○妾○宇○敵○格○價○惋○

願○私○披○遺○隨○帷○司○尸○辭○詩○時○悲○  
養○語○閱○愛○處○幄○直○祝○命○思○彥○慘○

衰○欺○嬉○遺○厄○思○司○疑○辭○詩○時○之○  
老○詐○笑○物○酒○慮○隸○懼○令○史○代○子○

伊○欺○卑○肌○廳○思○司○疑○辭○詩○時○時○  
呂○罔○賤○理○下○慕○馬○議○氣○卷○勢○事○

者○管○騎○脂○岐○思○醫○疑○期○詩○時○時○  
卜○杖○馬○粉○嶷○念○國○似○待○集○俊○弊○

追○羈○岐○雌○慈○滋○醫○疑○期○棋○詩○時○  
悔○糾○路○伏○母○味○俗○貳○約○局○傑○病○

成大詩作

龜○師○夷○馳○施○儀○奇○碑○雙○烽○龍○蓬○  
卜○表○險○走○政○表○句○誌○鯉○火○種○鬚○

龜○姿○夷○規○知○儀○奇○奇○支○烽○庸○農○  
筮○致○簡○律○覺○則○器○偶○庶○燧○劣○圃○

眉○姿○師○規○知○皮○奇○奇○移○備○封○宗○  
目○態○尹○矩○己○相○倅○策○檄○貫○建○室○

眉○遲○師○危○知○離○奇○奇○垂○幢○胸○宗○  
宇○速○父○坐○足○別○貨○計○老○標○次○派○

眉○遲○師○危○馳○離○奇○奇○吹○扛○胸○宗○  
態○疾○傳○道○騁○恨○巧○骨○竹○鼎○腹○族○

眉○遲○師○危○馳○施○奇○奇○吹○降○蹤○宗○  
暈○鈍○授○險○逐○設○玩○福○角○伏○跡○黨○

語類體近章五第

臺○推○摧○媒○齊○乖○借○閨○批○稽○題○悽○  
省○殺○折○介○輩○戾○隱○秀○頰○首○榜○慘○

臺○開○堆○媒○齊○乖○詼○閨○迷○稽○提○悽○  
閣○闔○梁○灼○戒○舛○謔○怨○悶○古○誨○惋○

才○開○堆○催○蝸○懷○骸○佳○迷○奎○提○低○  
力○曉○案○迫○角○刺○骨○作○錯○運○挈○首○

才○開○杯○摧○蝸○懷○排○佳○圭○栖○啼○題○  
子○朗○杓○劔○篆○抱○擊○句○誤○醞○泣○柱○

才○哀○推○摧○措○懷○排○佳○圭○栖○啼○題○  
器○慟○引○裂○拭○舊○斥○婿○角○息○恨○詠○

災○哀○推○摧○恢○儕○排○借○圭○栖○雞○題○  
異○咽○勁○辱○復○頰○悶○老○玷○寓○肋○鳳○

成大詩作

誣○蘇○奴○夫○扶○儒○無○愚○衣○肥○者○椎○  
罔○息○婢○婿○掖○術○智○昧○鉢○遞○宿○魯○

鴛○烏○圖○夫○模○儒○無○娛○依○威○微○椎○  
鈍○合○籍○婦○楷○雅○耻○樂○倚○武○意○髻○

逋○烏○屠○狐○模○株○無○娛○虛○機○微○治○  
賦○集○狗○媚○範○守○狀○玩○妄○會○賤○國○

齊○汗○吾○孤○樞○殊○蕪○無○虛○機○揮○怡○  
整○俗○黨○立○軸○遇○沒○益○誕○巧○霍○悅○

妻○廳○吾○孤○樞○偷○巫○無○儲○譏○揮○推○  
黨○飯○道○獨○要○悅○祝○慮○貳○刺○灑○服○

妻○鄙○租○辜○腐○區○于○無○如○希○韋○嗤○  
子○雅○稅○負○受○處○役○賴○意○世○帶○笑○

語類體近章五第

賢天屏顏寰歡端殘捫冤繁勤  
士分弱獷宇朴肅忍馭肅緝格

憐天憊顏蠻寬酸干思言翻斤  
惜縱吝鈍貊猛楚祿誼笑覆斧

田天顏鰥蠻驪酸肝村藩翻筋  
父與布寡觸洽鼻腦氣翰譯骨

年天先開姦刪官肝安魂喧元  
齒祐哲暇黠述職胆飽夢關老

年賢先開攀刪官端安溫喧煩  
少哲聖雅附改守士輯厚聒悶

妍賢前艱攀環官端彈門冤煩  
媿婦輩棘抑塔府正指閔獄累

成大詩作

群聞文塵身仁臣親辛真來災  
牧見獻世外術僕苦辛訪厲

群聞文塵賓仁人親新真裁猜  
小道苑俗主政境授婦訣判忌

君分文塵賓仁人晨新真真猜  
相手士網服聖籟省意率諦忍

君分文巾賓仁人晨新因真胎  
子杖事輻館里主起著果窩教

君墳文倫鄰仁人臣薪因真胎  
長典武理里孝傑庶炭襲安育

軍群文姻噴紳仁臣親茵真來  
陣動雅戚自笏恕妾附蕭履哲

語類體近章五第

生○英○鯨○狂○光○良○皇○王○嘉○蛇○華○苛○  
活○傑○飲○簡○艷○史○統○佐○偶○足○族○酷○

生○英○迎○狂○光○良○皇○方○奢○瓜○家○苛○  
計○物○接○悖○采○弼○德○寸○侈○殿○事○察○

生○英○平○強○芳○剛○良○方○奢○那○家○摩○  
死○氣○素○飯○訊○直○士○正○麗○侈○國○撫○

爭○卿○驚○荒○芳○剛○良○觴○鄉○嘉○車○麻○  
訟○相○駭○縱○躅○猛○友○政○黨○客○騎○面○

爭○生○盟○詳○長○商○良○黃○鄉○嘉○車○華○  
戰○氣○約○覈○揖○賈○相○老○曲○覘○服○燭○

爭○生○榮○詳○娘○綱○良○黃○鄉○嘉○車○華○  
奪○理○顯○審○子○紀○匠○耆○愿○遜○馬○麗○

成大詩作

羅○勞○高○蒿○操○嘲○謠○描○朝○超○權○妍○  
綺○乏○臥○目○捨○笑○曲○寫○賀○逸○術○麗○

阿○歌○高○陶○刀○膠○昭○描○驕○僂○便○仙○  
附○妓○爵○冶○筆○柱○稔○繪○女○賦○辟○客○

阿○歌○高○陶○刀○豪○標○嬌○驕○僂○然○仙○  
黨○曲○義○鑄○尺○貴○榜○艷○恣○役○諾○境○

和○多○韜○遭○褒○豪○巢○漂○招○朝○澆○禪○  
睦○少○略○遇○貶○客○許○泊○辟○服○季○學○

科○多○逃○高○號○豪○交○翹○招○朝○僚○捐○  
舉○寡○竄○潔○泣○俠○態○楚○聘○覲○友○館○

苛○羅○勞○高○號○操○交○僂○招○朝○消○權○  
政○網○動○尚○哭○作○誼○倖○納○野○息○勢○

語類體近章五第

蠶○參○音○淫○擒○沈○幽○浮○翻○憂○恒○稱○  
婦○證○信○佚○斬○溺○獨○躁○酢○揚○產○述○

蠶○南○音○臨○吟○沈○愁○謀○籌○流○憑○稱○  
織○面○調○幸○嘯○厚○悶○面○策○竄○恃○賀○

探○諳○簪○陰○今○心○愁○眸○休○流○憑○稱○  
討○練○笏○德○是○迹○怨○子○沐○弊○弔○讚○

貪○含○參○瘡○襟○心○尋○侯○休○游○優○朋○  
匪○垢○考○痘○抱○醉○逐○伯○養○俠○寵○友○

貪○含○參○歆○箴○心○斟○幽○囚○游○優○能○  
賄○哺○照○羨○諷○算○酌○雅○虜○冶○渥○吏○

貪○涵○參○音○淫○心○沈○幽○裘○游○憂○能○  
景○養○贊○樂○鬼○火○瀦○澹○葛○客○威○事○

成大詩作

憎○承○冥○停○經○愴○輕○誠○營○清○行○氓○  
惡○順○感○滯○理○父○薄○悃○作○介○色○隸○

興○承○冥○丁○刑○勃○名○誠○羸○清○行○兵○  
替○嗣○討○壯○辟○敵○利○實○滿○穆○役○甲○

興○凌○銘○醒○形○振○名○誠○精○清○行○兵○  
運○虐○骨○覺○象○觸○分○慙○采○福○止○革○

徵○登○懲○靈○庭○青○名○征○貞○程○清○情○  
問○覽○惡○德○訓○眼○士○戍○婉○限○範○致○

徵○僭○懲○靈○廷○經○廣○征○貞○程○清○情○  
士○道○艾○慧○議○濟○和○稅○淑○式○節○韻○

徵○增○承○零○廷○經○廣○輕○貞○營○清○盈○  
辟○損○寵○落○論○世○韻○俠○烈○繕○雅○滿○

第五近體類語

偉祀梓士理暑喜否爾累委講  
績典匠卒窟景兆泰汝卵曲武

匪子矢士理子紀姊侈累委講  
類母石氣趣夜錄妹靡世命學

語子死仕裏耻紀市企累委講  
獸息士路外辱律隱及歲棄習

禦比死仕起耳技恃旨妓詭講  
侮擬友進敬目巧寵酒樂詐席

旅鬼履齒起耳技恃美妓詭棒  
夢嘯歷豁痿食倆勢貌女辯喝

旅鬼履齒士里鄙喜美綺詭毀  
館氣信列女諺俚氣妾靡術謗

成大詩作

勇冢寵孔監讒恬織嚴儻三耽  
往子愛孟守嫉澹手急石輔樂

勇冢寵總芟讒恬織嚴慙三談  
退宰命角斫妬靜巧刻態黜笑

踊奉冗總芟讒恬瞻嚴廉酣談  
躍養散覽刈謗退仰訓吏醉柄

拱捧重踵几讒熾兼占廉酣甘  
手腹幣武拙詔惡備候潔飲脆

悚勇重寵几監懸霑占嫌慙三  
懼士鎮賜俗史首醉驗忌悔畏

講勇重寵几監讒潛謙嚴慚三  
解決器幸例察毀伏讓肅德益

語類體近章五第

窈·表·選·善·伴·盟·遜·晚·遠·隱·泄·忍·  
窕·式·擇·士·侶·嗽·世·學·志·几·勉·耻·

掉·鳥·選·善·伴·款·穩·晚·遠·謹·粉·準·  
舌·篆·註·罵·食·接·臥·節·客·厚·臉·則·

巧·了·奢·曲·簡·款·蹇·反·本·近·粉·惘·  
笑·慧·謬·禮·慢·曲·躓·省·始·狎·黛·捌·

巧·曉·舛·轉·簡·款·婉·偃·本·念·憤·惘·  
慧·事·錯·眼·約·狎·變·蹇·領·嫉·世·恤·

狡·紹·小·轉·簡·懶·婉·偃·本·忿·憤·墮·  
黠·述·妹·瞬·易·惰·曲·武·末·怒·漉·涕·

狡·矯·表·選·厚·散·很·衰·晚·勿·隱·緊·  
美·飾·裏·士·目·逸·悞·職·暮·頓·者·急·

成大詩作

軫·罪·悔·解·啓·俯·撫·斧·譜·父·女·子·  
恤·譴·恨·慍·沃·仰·弄·鑿·牒·毋·壻·奪·

敏·愷·改·解·啓·騰·撫·部·乳·父·許·處·  
捷·弟·俗·脫·廸·仕·玩·伍·臭·祖·嫁·士·

敏·怠·改·駭·洗·禮·撫·柱·補·父·俎·處·  
速·惰·竄·異·硯·樂·恤·石·袞·老·豆·子·

允·乃·採·灑·洗·禮·撫·武·補·古·羽·處·  
協·父·集·落·淨·讓·掌·備·缺·聖·客·女·

引·乃·採·楷·洗·體·主·武·普·古·舞·處·  
領·祖·拾·式·濯·要·客·事·濟·史·妓·置·

盡·軫·罪·賄·洗·米·祖·苦·拊·賈·父·女·  
美·念·戾·賂·耻·汁·廟·口·脾·豎·子·弟·



語類體近章五第

意降縱控痛貢掩感負口首颯  
氣格慾制哭獻口遇恃吻選直

志巷訟重痛貢掩感負友首耿  
士說獄寄癢賦抑憤荷愛領介

志事綜誦痛凍染澹負友手酪  
節務括說楚餒翰泊擔道澤酊

志意俸統諷凍夢噉品婦口鼎  
氣馬祿帥誦噤寐蔗藻德舌鼎

治意供統諷痛衆儉狂婦口有  
要態養領詠飲怨素席順授德

治意供統勵痛衆儉枕狗口酒  
世緒給攝哭快謗德席盜吃客

成大詩作

靜請長掌養雅禍藁考老老皓  
玩託上握老什福草檢病大齒

靜請賞黨養寡野草考好老皓  
肅益識鋼氣婦客聖課酬健首

猛永賞黨鞅寡野皂槁好老藻  
將訣罰禍掌合袂隸項爵將翰

猛穎頌廣象社野荷保道老藻  
士悟袖坐教稷服黃傅契朽思

哽穎警長獎把野裸保道老藻  
咽脫省幼勵玩史跣護藝耄鑑

秉整警長拄把雅跋鴛討老早  
正頓蹕者屈讀韻暨母伐櫛慧

語類體近章五第

按·翰·怨·訊·信·愛·叡·帝·藝·吐·墓·故·  
糝·墨·氣·問·義·婿·藻·德·圃·哺·誌·里·

贊·岸·萬·瞬·進·輩·外·帝·藝·孺·注·故·  
化·憤·姓·息·退·出·舅·則·苑·子·目·業·

贊·斷·健·迅·陣·載·貝·帝·厲·世·注·願·  
迹·獄·啖·疾·法·籍·錦·裔·鬼·路·意·託·

冠·斷·健·訓·順·配·債·帝·涕·世·駐·願·  
者·訟·脚·誨·逆·偶·鬼·子·淚·味·驛·命·

換·幹·鈍·郡·駿·未·內·替·涕·麗·駐·願·  
骨·蠱·賊·守·烈·耜·寵·否·泗·質·馬·兩·

悍·按·鈍·怨·峻·信·愛·叡·契·濟·寤·願·  
婦·罪·劣·鬼·刻·宿·妾·哲·濶·世·寐·問·

成大詩作

痼·樹·著·慰·氣·悲·醉·棄·致·次·利·吏·  
疾·怨·姓·問·節·忿·夢·置·仕·序·用·案·

素·度·著·慰·氣·伺·議·媚·翠·智·利·吏·  
手·曲·述·喧·煽·察·論·態·黛·巧·病·隱·

怒·賦·庶·畏·貴·庇·侍·媚·騎·智·利·義·  
罵·別·孽·友·介·蔭·妾·藥·射·慧·鈍·憤·

附·賦·倨·馭·貴·肆·忌·鼻·試·智·器·義·  
費·稅·傲·馬·種·業·刻·祖·策·畧·識·勇·

故·布·露·助·貴·揣·忌·鼻·試·記·位·義·  
奮·政·頂·長·盛·栗·憚·息·帖·憶·次·舉·

故·步·樹·著·貴·嗜·饋·醉·棄·記·戲·義·  
老·武·黨·作·寵·好·餉·臥·婦·載·狎·胆·

第五近體類語

沐·熟·懺·任·富·釘·勝·詠·盛·令·命·尚·  
浴·達·悔·意·庶·餽·敗·史·滿·德·世·友·

漉·收·鑑·任·富·壽·應·姓·盛·令·命·王·  
酒·守·賞·事·瞻·福·變·氏·怒·色·令·氣·

竺·宿·鑑·飽·陋·秀·應·慶·聖·政·正·妄·  
典·怨·識·色·俗·骨·召·樂·哲·令·直·想·

俗·肅·福·劔·舊·秀·應·慶·聖·政·正·糊·  
客·穆·德·氣·放·傑·接·拜·智·欵·氣·業·

俗·僕·德·念·舊·秀·贈·勁·聖·政·正·敬·  
氣·妾·壽·慮·誼·士·答·卒·學·化·始·遠·

俗·淑·熟·梵·任·富·贈·勁·聖·政·正·敬·  
士·德·練·冊·俠·厚·賄·敵·統·務·士·事·

作詩大成

上·化·佐·孝·少·妙·嘯·倦·傳·殿·慢·判·  
宰·育·命·感·艾·悟·傲·想·記·最·媒·斷·

相·暇·挫·號·誚·妙·嘯·忤·練·面·憤·諫·  
業·佚·翎·令·讓·手·月·悅·達·目·習·諍·

相·嫁·挫·報·驃·詔·笑·戀·鍊·面·幻·諫·  
馬·娶·折·効·騎·令·諠·愛·樂·命·惑·議·

將·罵·破·盜·校·耍·笑·善·宴·縣·卬·宦·  
相·嘗·虜·竊·勘·路·語·射·樂·尉·角·女·

唱·罵·臥·暴·校·釣·廟·善·謹·變·擐·晏·  
和·賊·起·橫·字·弋·算·罵·責·詐·甲·起·

曠·上·貨·懊·孝·少·廟·善·薦·戰·簞·慢·  
野·將·賄·惱·弟·長·略·戰·引·恠·奪·侮·

語類體近章五第

惰·少·顯·遠·罪·祖·武·古·非·士·恃·綺·  
容·年·榮·圖·囚·宗·夫·書·才·心·恩·執·

禍·早·闢·本·盡·祖·武·古·語·士·子·綺·  
機·行·幽·源·心·孫·功·今·言·人·孫·羅·

禍·老·撚·晚·盡·祖·苦·股·女·仕·死·美·  
胎·衰·髡·年·忠·先·吟·肱·奴·途·生·人·

野·老·小·晚·準·體·苦·樹·舞·仕·俚·美·  
人·殘·人·生·繩·裁·辛·恩·姬·官·言·姬·

寡·老·小·管·遠·詆·主·樹·古·偉·起·美·  
人·翁·心·絃·征·譏·寶·勳·人·人·居·官·

寡·道·少·典·遠·楷·主·武·古·偉·士·市·  
言·人·恩·刑·行·書·人·威·賢·才·風·人·

成大詩作

寵·閱·節·壓·克·德·客·折·薄·逸·濯·局·  
光·歷·婦·卷·己·澤·氣·樞·福·足·魄·促·

寵·合·狎·怯·克·國·格·物·腹·骨·握·蓐·  
姬·吞·妓·懦·復·色·物·色·筍·肉·髮·食·

講· 玉·狎·泣·國·驛·客·惡·烈·筆·樂·  
筵· 女·暱·血·士·使·旅·客·士·陣·府·

講· 策·狎·粒·逆·落·客·爵·血·筆·濁·  
堂· 士·客·食·旅·魄·寓·祿·淚·硯·世·

是· 說·嬰·俠·億·百·客·爵·薄·筆·濯·  
非· 客·鏢·士·兆·姓·次·秩·倖·削·髮·

妓· 傑·絕·懦·畫·伯·客·博·薄·律·濯·  
園· 士·代·伏·策·仲·舍·識·命·呂·用·

語類體近章五第

夜·悼·廟·片·戰·竄·雋·背·快·大·麗·寓·  
行·亡·堂·言·機·流·才·讓·人·臣·姬·言·

下·課·妙·擅·膳·喚·憲·賽·敗·大·麗·計·  
交·書·年·名·羞·呼·章·恩·軍·材·妹·官·

下·破·妙·擅·見·叛·斷·賽·敗·大·濟·勢·  
車·瓜·姬·才·聞·民·機·神·機·官·民·家·

下·破·效·街·練·諫·散·信·愛·大·裔·世·  
堂·愁·顰·媒·兵·臣·樞·書·姬·家·孫·途·

謝·臥·權·嘯·宴·宦·半·陣·愛·拜·細·世·  
恩·雲·歌·梁·安·宦·生·營·兒·官·腰·間·

霸·駕·蹈·笑·賤·面·鬢·鬢·輩·快·細·麗·  
王·車·歌·歌·人·談·炊·絲·行·書·君·人·

成大詩作

炷·布·貴·侍·異·事·縱·衆·走·後·猛·雅·  
香·恩·妃·兒·常·君·談·生·尸·生·威·音·

住·素·畏·侍·異·淚·縱·真·耦·後·挺·治·  
山·封·途·姬·鄉·痕·囚·諷·耕·身·身·容·

住·故·慰·寄·翠·吏·訟·痛·狃·友·等·假·  
居·人·安·衣·蛾·人·爭·心·恩·生·儕·恩·

成·故·諱·寄·棄·吏·俸·棟·感·友·酒·黨·  
兵·鄉·名·言·材·胥·錢·梁·恩·情·徒·人·

妒·暮·路·懿·醜·異·俸·諷·點·斗·首·賞·  
才·年·人·親·魂·材·緝·吟·頭·管·盟·心·

措·駐·賦·貴·醉·異·事·控·夢·厚·首·往·  
刑·車·才·人·迷·能·功·拉·魂·顏·魁·來·

第五近體類語

列·未·竭·逸·出·浴·足·卜·讀·腹·飽·幼·  
仙·光·忠·才·家·恩·音·居·書·心·姬·冲·

列·雪·滑·逸·出·筆·曲·俗·復·收·飽·幼·  
侯·冤·稽·詩·門·耕·肱·喧·響·民·妻·歸·

結·節·達·匹·室·出·曲·俗·育·收·服·識·  
茅·財·材·儔·家·群·從·情·英·童·膺·符·

結·絕·達·乞·疾·出·綠·俗·育·伏·福·暗·  
交·交·官·骸·呼·塵·鬢·氛·才·兵·祥·愁·

穴·絕·達·乞·吉·出·束·玉·六·宿·熟·濫·  
居·絃·觀·恩·祥·遊·脩·顏·師·綠·眠·觴·

折·絕·未·發·吉·出·續·玉·卜·宿·谷·濫·  
肱·倫·流·姦·辰·奇·絃·喉·隣·儒·神·誅·

成大詩作

授·舊·甌·病·聖·性·敬·尚·壯·帳·望·霸·  
衣·知·塵·骸·恩·靈·恭·賢·夫·中·塵·圖·

授·舊·奏·勁·聖·盛·正·創·放·浪·望·霸·  
官·邦·功·兵·明·名·音·基·心·遊·洋·功·

秀·舊·奏·淨·聖·盛·正·創·放·唱·望·上·  
才·交·章·心·賢·年·身·懲·懷·歌·鄉·台·

秀·救·富·應·姓·盛·令·蕩·放·曠·將·上·  
眉·災·家·酬·名·勳·儀·心·魚·夫·門·公·

茂·教·富·應·慶·聖·令·蕩·暢·壯·將·上·  
才·時·人·兵·祥·人·譽·平·懷·年·壇·寶·

茂·救·舊·佞·病·聖·性·敬·匠·壯·將·望·  
長·荒·封·臣·軀·凡·真·神·心·心·才·雲·

語類體近章五第

七陽白蒼栽邯伏功梅急水君  
賢春衣蠅花鄂波名妝流霜臣  
六白宰附種學銅富蓮勇勵魚  
逸雪相驥竹步柱貴步退志水

北倚刻攀悲光東浮傾榮鹽同  
窓門舟龍歌風山雲城花梅功  
高賣索附棟霽携富傾妙燮一  
臥笑劍鳳慨月妓貴國舌理體

室巫鼻王王登龍佳小朱功忠  
如山端侯郎徒顏人蠻唇成誠  
懸神出將研好日薄樊皓身貫  
馨女火相地色角命素齒退日

成大詩作

兆龍允法答立直力國赤白落  
民行文家恩言言攻恩貧眉成  
爲虎允  
子步武洽衲立直力國劇白弱  
聞衣功臣田家談頭齡

以撫瓊祛愜立直息國阨白幕  
賢軍枝夫心威躬心儲窮丁僚  
爲監玉  
寶國葉

協立飾息德惜伯託  
同維辭肩輝陰兄孤

邦黎巍  
家民巍  
柱父穆  
石母穆

甲入飾息食擇格客  
科神非兵言隣心途

甲合刻息力國赤客  
兵歡舟耕耕光心遊

第五近體類語

馬○螳○對○跋○竹○金○變○主○錦○守○虎○凌○  
氏○臂○酒○屨○帛○屋○理○聖○心○株○皮○雲○  
白○當○當○將○功○阿○陰○臣○繡○待○羊○賦○  
眉○車○歌○軍○名○嬌○陽○賢○口○兔○質○筆○

紅○鄭○斗○亂○織○錦○開○四○元○抱○蕙○高○  
葉○袖○米○世○手○瑟○閣○海○輕○薪○心○談○  
良○工○折○英○細○華○招○為○白○救○蘭○風○  
媒○讒○腰○雄○腰○年○賢○家○俗○火○質○月○

國○白○烈○皮○諸○尤○草○社○燕○文○城○美○  
士○水○士○裏○葛○物○莽○稷○領○章○狐○人○  
無○真○暮○陽○臥○移○微○棟○虎○報○社○香○  
雙○人○年○秋○龍○人○巨○梁○頭○國○鼠○草○

成大詩作

青○相○鶯○長○頭○陶○立○頭○金○杏○貞○雕○  
衫○如○期○風○董○潛○言○巾○衣○林○心○蟲○  
司○題○燕○破○齒○歸○千○習○玉○名○勁○末○  
馬○柱○約○浪○豁○去○古○氣○食○手○節○枝○

青○魯○長○榮○耕○紅○英○科○拔○先○文○樂○  
雲○連○房○枯○雲○顏○雄○頭○山○憂○章○天○  
意○蹈○縮○得○釣○易○兒○箕○蓋○後○氣○知○  
氣○海○地○喪○月○老○女○昭○世○樂○節○命○

故○昨○環○人○煙○人○陳○雕○焚○桑○樹○安○  
人○非○肥○情○霞○生○琳○雲○香○間○經○心○  
青○今○趙○世○痼○七○草○刻○墜○濃○酌○立○  
眼○是○瘦○態○疾○十○檄○露○茗○上○史○命○



第五近體類語

羽○避○水○意○腹○出○故○昔○斷○髻○笑○萬○  
林○風○魚○中○心○無○人○人○騰○了○相○夫○  
軍○塵○親○人○臣○車○書○非○醉○雙○逢○雄○

憤○淚○百○夢○棟○醉○浣○食○淚○影○白○滑○  
背○沾○年○中○梁○如○花○無○淋○成○雲○藉○  
童○巾○身○人○臣○愚○居○魚○漓○雙○蹤○雄○

貫○葛○綺○賞○老○守○子○註○世○鹿○睡○感○  
日○天○羅○音○成○錢○雲○蟲○情○門○魔○無○  
忠○民○身○人○人○奴○居○魚○違○龐○降○窮○

報○送○苦○素○眼○樂○白○換○與○五○望○奪○  
國○窮○吟○心○中○天○雲○鷺○心○經○風○天○  
忠○文○身○人○人○真○居○書○違○師○降○工○

成大詩作

白○王○孟○刮○倚○閉○世○濯○飯○淨○野○詩○  
頭○蔡○母○垢○馬○戶○上○魄○後○几○鶴○膽○  
翁○登○斷○磨○雕○讀○浮○水○黑○明○閑○輪○  
樓○機○光○籠○書○名○壺○甜○窓○雲○困○

讀○  
書○傍○一○彈○折○詩○搖○貧○行○世○土○柳○  
童○若○飯○缺○柳○酒○嶽○賤○脚○味○木○骨○  
無○感○歸○攀○琴○凌○論○頭○辛○形○顏○  
人○恩○來○花○書○滄○交○陀○酸○骸○筋○

應○  
門○  
僮○幸○李○嫂○五○白○宿○國○痛○幸○絲○島○  
相○廣○不○柳○面○志○士○飲○野○竹○瘦○  
憐○數○下○先○書○蹉○無○讀○躬○陶○郊○  
寸○才○奇○機○生○生○跏○雙○驢○耕○情○寒○  
心○  
忠○

語類體近章五第

情斷酒地飄有幾不聖風高以  
多送債經零詩人才圖塵談文  
最一尋兵猶酬千明天三百常  
恨生常亂有歲里主廣尺戰會  
花唯行後客月別棄大劍術友  
無有處

語酒在  
歲經無今多宗社爵惟  
愁尋人盡濟夢夜病祀稷作德  
破思生客豈到九故日一萬自  
方百七愁無功廻人光戎夫成  
知計十中人名勝疎輝衣雄隣

酒不古  
有如來

權間稀  
同高陳文孟同杜李祖  
與彥浩  
鄭韓杜 啓義博然 甫白詠

谷愈甫

成大詩作

含繼  
章文 宗游雨笑蟻處鼎往汗  
光遵 廟俠露語豔士可事馬  
後後 臣兒恩親臣廬扛空功  
列軌 句

千輕握物聚失一一竹  
里薄手外歛意字夢帛  
繼循 情兒歡身臣人師空功  
武武

嗣監  
前前 身箋藪質雨薄錦筆國  
雄王 後笠水勝露倅字札士  
名翁歡文仁人詩工風

駱唐 青游壯一骨社萬百氣  
賓太 史子士飯肉稷卷代吐  
王宗 名顏顏恩親臣書宗虹

明去衣酒四一子浮  
 時國白邊塞品美生  
 抱尚山怨山也集己  
 病思人別河須開悟  
 風王經看歸妨詩莊  
 塵祭國長板白世周  
 下賦計劍籍髮界夢  
(去聲)  
 短逢朔馬百千伯壯  
 褐時方上年金陽志  
 論空孤驚父莫書仍  
 交惜將心老惜見輸  
 天賈出見見買道祖  
 地生群斷衣青根遜  
 間才才蓬冠春源鞭

李何李楊高丁王杜  
 攀景夢禹  
 龍明陽基啓謂偁牧

第六章 五言古詩

(一) 韻到底格

古詩を學ぶには、一韻到底の五言短古より入手するを捷徑となす。

各人○生○無○百○歲○  
雜露歌  
 各已歸山阿○  
(何阿韻)  
 百歲復如何○  
劉基  
 古來英雄士○  
 各白○鷗○養○雛○時○  
換櫛歌  
 各自東西去○  
(字押韻)  
 夜夜啼達曙○  
 如何羽翼成○

此二首の如きは單に四句なるを以て、近體の絶句となすものあれども、其調は純乎たる古樂府なり。唐詩選に載せたる五言絶句の大半

成 大 詩 作

亦然り。古詩を學ばんと欲せば、先づ此等の作を熟讀玩味すべし

長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不盡。良人罷遠征。

李太白

此詩は長安の月に對して、空閨を守る少婦が、衣を擣つときの情を述べたるものなり。結末二句を除けば絶句と異なるところなし。然れども四句にては十分の意を現はす能はざるを以て更に二句を添へ

少婦の意中を寫せるなり。

南登碣石館。遙望黃金臺。丘陵盡喬木。驅馬復歸來。

陳子昂

詩 古 言 五 章 六 第

薊丘は薊門にして、今の北京の西南に在り。古燕の昭王之に都し、臺を築きて、天下の賢士を招き、齊を破りて、功業を立てたり。詩中黃金臺と云へるは是なり。然れども其臺は空しく丘陵となりて、昭王なるもの亦無し。千古の霸業も、廢滅に歸して悵然歎息すべく依て馬を驅りて徒らに歸ると。此の如くにして八句、十句、乃至數十句に至れば、長篇の古詩を得べきなり。然れども大抵四句にして一の意味を成す。之を一解と稱し。二解三解若くは數解にして、一段と稱し。數段を累ねて一章と爲す。唐初の五古は、其平仄近體と同じきもの多しと雖も、時代愈近きに隨つて、古今兩體の平仄自ら別れ、古詩の平仄は近體と漸く相異なれり。

成 大 詩 作

亦然り。古詩を學ばんと欲せば、先づ此等の作を熟讀玩味すべし

子夜吳歌  
長安一片月。萬戶擣衣聲。  
秋風吹不盡。  
良人罷遠征。  
總。是。玉。關。情。何。日。平。胡。虜。  
(聲情征三字押韻)

此詩は長安の月に對して、空閨を守る少婦が、衣を擣つときの情を述べたるものなり。結末二句を除けば絶句と異なるところなし。然れども四句にては十分の意を現はす能はざるを以て更に二句を添へ少婦の意中を寫せるなり。

陳子昂  
南登碣石館。遙望黃金臺。  
丘。陵。盡。喬。木。  
驅。馬。復。歸。來。  
(驅馬復歸來三字押韻)  
昭王安在哉。霸圖悵已矣。

詩 古 言 五 章 六 第

薊丘は薊門にして、今の北京の西南に在り。古燕の昭王之に都し、臺を築きて、天下の賢士を招き、齊を破りて、功業を立てたり。詩中黃金臺と云へるは是なり。然れども其臺は空しく丘陵となりて、昭王なるもの亦無し。千古の霸業も、廢滅に歸して悵然歎息すべく依て馬を驅りて徒らに歸ると。

此の如くにして八句、十句、乃至數十句に至れば、長篇の古詩を得べきなり。然れども大抵四句にして一の意味を成す。之を一解と稱し。二解三解若くは數解にして、一段と稱し。數段を累ねて一章と爲す。

唐初の五古は、其平仄近體と同じきもの多しと雖も、時代愈近きに隨つて、古今兩體の平仄自ら別れ、古詩の平仄は近體と漸く相異なれり。

詩古言五章六第

塞下曲  
 日暮五原寒  
 朔氣傳金柝  
 千門萬戶閉  
 黃雲空  
 日暮五原寒  
 朔氣傳金柝  
 千門萬戶閉  
 黃雲空

此詩十句の中、近體の平仄に叶ふもの籍役、感慨の二句あるのみなり。先づ叙景を以て起し、胡虜を征すること年々止まず、徒らに干戈を弄び、邊境を拓くと雖も、其地は以て耕すべからず、漫りに人命を損するのみなりと痛罵し、結ぶに又叙景を以てし、首尾願應す飛狐、雲中は邊境の地名なり。

閑居感懷

一方孝孺

成大詩作

此詩、十二句の中平仄の近體に叶ふもの唯明月在雲端の一句のみなり。天岡琴聲の如く、押韻ならざる句尾を平となすも妨げなし。首四句、幽幕寒燈、蟲聲月色、旅中の夜景を寫して、情味凄然。次の四句、美人遠く山河を隔つるを云ふ。こゝに所謂美人とは會心の友ならず。次の四句は琴を弾じて其意を寄せんとするも、和するものなく、且つ絶絃を嘆すと。叙景より層々叙情に入るところ最も佳なり。

寒燈旅與  
 明月在雲端  
 幽幕寒燈  
 蟲聲月色  
 美人遠隔山河  
 琴聲寄意  
 絶絃嘆

(蘭梅漫園雜歌六字押韻)

詩古言五章六第

老禪伏虎處。遺跡在澗西。巖翠多冷光。  
 竹禽無鷲啼。僧樓滿落葉。幽思窮藥躋。  
 穿林月墮規。泉咽風淒淒。  
 此詩は單に景を叙するのみなれども、造語幽峭にして奇趣あり、能く其境と副ふものに似たり。清人にあらざれば、此體無し。

曉色能移山。置之煙裡。重簾隔美人。  
 藤蓐倦梳洗。須臾雲霧帷。闕然裝俶詭。  
 物忌太分明。以此悟妙理。若若有若無間。  
 目成而已矣。  
 (五字押韻) (五字押韻) (五字押韻) (五字押韻) (五字押韻)

煙雨中の山を以て、隔簾の美人に比し、形容一々新警の語を用ひ、

成大詩作

我非今世人。空懷今世憂。所愛諒無地。  
 慨想禹九州。商君爲秦謀。周公以爲周。  
 哀哉萬年後。誰爲斯民謀。  
 池魚不知海。越鳥不知燕。蚯蚓霸一穴。  
 神龍行九天。小大萬相殊。豈唯物性然。  
 君子勿歎息。彼誠可哀憐。  
 前首は今世の人にあらずして、今世の事を憂ふ、而も古人亦各其主のために計りて、斯民のために計らず、真に能く天下萬民の爲に謀るものは、幾萬年の後に出るぞと、慨乎たる其言、最も味ふべし、後首、池魚越鳥蚯蚓神龍、大小の分あるが如く、人にも亦大人小人の別ありと、先づ比興の體を以て起し、結ぶに感慨の語を以てす、共に學者の詩たるに負かず、立意正大、識見千古に絶す。

成大詩作

織巧と雖も亦奇作なり。殊に曉色山を移すの一語、率然人を驚かすところ、起手の妙なり。要するに清人の詩文字上に於て、狡猾の手段を弄すること多く此の如し、新警喜ぶべきが如きも、一步を誤れば忽ち邪徑に入る、慎まざるべけんや。

月○行○南○斗○邊○  
草○露○濕○芒○屨○  
凄○清○醒○醉○魂○  
佇○立○叩○逢○戶○  
夜○出○偏○門○還○三○山○  
人○歸○西○郊○路○  
漁○歌○起○遠○汀○  
荒○怪○入○詩○句○  
穉○子○猶○讀○書○  
水○風○吹○葛○衣○  
鬼○火○出○破○墓○  
到○家○夜○已○半○  
一○笑○慰○遲○春○

(踏履塞句月暮六字押韻)

前八句は歸途の夜景を述べ、次に家に到りて穉子の讀書に勤むるを見て、衰老猶慰むる所あるを云ふ、情味甚だ厚し。叙景のところ造

詩古言五章六第

語平凡といへども、自然を失はず、是れ宋人の清人に異なるところなり。

東○東○家○家○出○岫○  
東○家○鳴○珮○環○  
東○家○與○麥○飯○  
雞○犬○意○自○閑○  
西○家○籠○半○山○  
西○家○籠○半○山○  
日○不○對○離○數○掩○  
我○亦○思○往○還○  
各○有○非○三○間○  
兒○女○若○一○家○  
餘○地○君○勿○慳○

(山環間還開暨六字押韻)

山中の茅屋、東西相隣りて親しく往還交際するを述べて、我亦卜隣を欲すと、語意淺近にして、情致愛すべし。此等の詩を熟誦せば、五古を作る亦容易なり。

陶公醉石、歸去來館

朱熹



首四句は陶淵明の賢を慕ふ意を述べ、次に醉石を得ると共に其風景を賞し、廬を結びて優遊、以て古賢を弔するの意を言ふ。

子○生○載○後○  
獨○淵○明○賢○  
况○復○壑○古○  
俯○聽○飛○泉○  
結○廬○倚○峭○  
亂○以○歸○來○  
前賢の字はテサムルこと訓す

尚○友○千○載○前○  
及○此○逢○石○  
縹○緲○藏○煙○  
景○物○自○清○絕○  
學○勝○醉○源○委○  
亂の字はテサムルこと訓す

每○尋○高○士○傳○  
謂○言○公○所○  
仰○看○喬○木○  
優○遊○一○可○  
臨○風○一○長○嘯○

大 哉 造 化 工。  
左 手 遮 赤 日。  
扇 笠 競 要 功。  
雨 變 清 涼。

右 手 招 清 風。  
南 山 隨 吐 雲。  
萬 物 隨 疏 通。

揮 汗 不 能 已。  
戴 復 古 冠。  
向 人 無 德 色。

大 哉 造 化 工。  
赤 日 を 遮 る は 笠 な り、清 風 を 招 く は 扇 な り、四 句 先 づ 苦 熱 の 光 景 を 述 べ、雲 雨 を 以 て 意 を 轉 じ、造 化 の 功 の 大 な る を 説 く、亦 奇 想 な り。

岱 宗 夫 如 何。  
陰 陽 割 昏 曉。  
會 當 凌 絕 頂。

齊 魯 青 未 了。  
盪 胸 生 層 雲。  
一 覽 衆 山 小。

造 化 鍾 神 秀。  
決 皆 入 歸 鳥。  
(丁曉鳥小四字押韻)

泰山の形勝は其れ如何、青翠の色齊魯二國に亘りて未だ窮まらず。陰陽昏曉此より分れ、層雲胸を盪し、歸鳥皆を決す、好し他日其絶頂に登りて、衆山を俯瞰すべしと、極めて雄偉の作なり。

前 出 塞 曲 九 首  
戚 戚 去 故 里。  
悠 悠 赴 交 河。  
公 家 有 程 期。

成 大 詩 作

前出塞曲は、玄宗の天寶年間、哥舒翰吐蕃を征せしときに作れり。  
 第一首先づ征夫の始めて室家に別る、悽慘の状を述ぶ。已に出征の命を受け、戚々然として故郷を辭し、將に悠々たる道途の遠き交河に赴かんとす、交河は吐蕃に備ふる要害の地なり。官已に令を下して行を促がし、嚴に程限期會を定む、之を厭ふて亡命兵を避れば、必ず誅戮の禍に嬰らん。天子四海の富を有ちて、疆土已に廣し、何を足らずとして、更に邊境を開き、百姓を苦むるや。父母の恩愛を棄絶して、歎歎聲を吞みつゝ、戈を荷ひ長征するの情憐れむべしと前四句は叙事にして、下にあるもの、義に率ふを勉めしめ、後四句は叙情にして、上にあるもの、仁を推すことを諷す。

亡命嬰禍羅。君已富土境。開邊一何多。  
 棄絶父母恩。吞聲行負戈。  
(河羅多戈四字押韻)

詩 古 言 五 章 六 第

第二首は道中の事を叙す。故郷を辭して、日を経る已に久しく、軍伍に習熟して、同行従旅の欺侮を受すといへども、男兒一たび軍に従へば、生死時を限らず、親子兄弟の恩愛を絶ちて、之を顧みる暇無し。馬を走らせ轡を脱し、手に青絲の控轡を挑げて、萬仞の高岡を疾く馳せ下り、身を俯して旗を攀き將を斬るの勇を試むと、決意の在るところを示す。

出門日已遠。不受徒旅欺。骨肉之恩豈斷。  
 男兒死無時。走馬脫轡頭。手中挑青絲。  
(歎時絲旗四字押韻)  
 捷下萬仞岡。俯身試攀旗。  
(歎時絲旗四字押韻)  
 磨刀鳴咽水。水亦刃傷手。  
 心緒亂已久。丈夫誓許國。憤腕復何有。  
(手久有朽四字押韻)  
 功名圖麒麟。戰骨當速朽。

成 大 詩 作

隴頭の古歌に云ふ、隴頭流水、鳴聲嗚咽、遙望秦川。肝腸欲絶  
と今隴頭嗚咽の水に臨みて、刀を磨すれば、感慨自ら生じて、覺え  
ず手を傷け、流水血を濺はす。男子の壯心、固より此嗚咽斷腸の歌  
曲を輕んずと雖も、心緒紛亂、魂を驚かすを如何せん。されども丈  
夫身を以て國に許すを誓へば、何ぞ悲むことあらん、功を邊塞に立  
て、名を麒麟閣に列すれば、戰骨の速かに朽る亦當に願ふべきとこ  
ろなり、區々たる手指の微傷の如き顧みるに足らずと。  
送徒既行長。遠成亦有身。生死向前去。  
不勞吏怒。路逢相識人。附書與六親。  
哀哉兩決絕。不復同苦辛。  
(身臨親辛 四字押韻)

詩 古 言 五 章 六 第

人に逢ひ、家書を托して、故郷の六親に寄す、其書中に云ふ、此れ  
より天涯地角、萬里隔絶、復苦辛を共にするを得ずと、六親は父母  
兄弟妻子なり、賈誼の策論に見ゆ。  
迢迢萬里餘。願我赴三軍。軍中異苦樂。  
主將寧盡聞。隔河見胡騎。倏忽數百群。  
我始爲奴僕。幾時樹功勳。  
(軍中苦樂 四字押韻)

第五首始めて軍中に至ることを叙す。萬里迢々の道途を経て、長吏  
我を領し漸く陣中に至れり。到れば軍中紀律あり、上下分を立て將  
卒苦樂を異にす、卒徒は徒らに使役せられて、其苦に堪えず。之を  
主將に訴へんと欲するも、主將悉く聞くべけんや。時に河を隔て、  
胡騎あり、倏忽數百群を成し、勢太だ盛なり。之を驅逐して功を建  
てんと欲するも、我初めより奴僕となりて、攻戰の策を建つべき身

成天詩作

分にあらず、知らず何れの時か功を奏し凱旋するを得ん。生きて卒伍の賤隷となり、死して無名の冥鬼となる亦悲しからずやと。  
 挽弓當挽強。用箭當用長。射人先射馬。擒賊先擒王。殺入亦有限。立國自有疆。  
 苟能制侵陵。豈在多殺傷。  
 弓を挽くには當に強弓を挽くべく、箭を用うるには當に長箭を用うべく、敵人を射るには先づ馬を射て其逃走を防ぎ、賊を擒するには先づ其賊魁を擒せよ、是征戰の要計なり、苟くも要計定まるときは其他枝葉の事は一々問ふに及ばざるなり。獨り征戰に要計あるのみならず、國家を有つものも亦要計を知らざるべからず、師を興して人を殺す固より限りあり、國土を立る亦疆界の定めあり、其疆界を守りて夷狄の侵陵さへ防げば、以て足れりと爲す、何ぞ漫りに干戈

詩古言五章六第

を動かして、殺傷の多きに誇ることを爲すべけんやと。  
 驅馬天雨雪。軍行入高山。逕危抱寒石。指落層冰間。已去漢月邊。何時築城還。  
 浮雲暮南征。可望不可攀。  
 馬を驅りて陣を出れば、天正に雪を降す、道を高山に取り、徑路危険、寒石を扶抱して、積雪層氷の間を行けば、奇寒指を墮す、我漢地を去る已に遠く、南の方遙かに故郷の月を望めども見えす、何れの時か築城の役を罷め、生きて家に歸るを得ん、唯暮雲の南征を望むべきのみ、攀ちて俱に去るべからずと、吐蕃は西にあり、而して詩中北方に在るかの如くなるは、漢の匈奴を伐ちし事を假用せるがためなり。築城は天寶中哥舒翰屢軍城を築きて吐蕃に備ふと云ふ事實に由れり。

成 夫 詩 作

彼軍爲我奔。單于寇我壘。百。里。風。塵。昏。雄。劍。四。五。動。  
 潛身備三行。一。勝。何。足。論。繫。頸。提。轅。門。  
(昏奔門論) (四字押韻)  
 こゝに單于と云ふも、亦匈奴の事を借りて吐蕃王を指すなり。單于  
 軍を率ゐて、我陣壘を攻め、百里の間風塵昏蔽、我將士雄劍を揮ふ  
 て、戦ふこと四五たび、胡兵敗走す、是に於て其名ある王を虜して  
 歸り、頸に紐を施して、之を轅門に繫ぐ、然れども我は卒隸にして、  
 身を行伍の間に潜め、一戦の捷、何の關する所あらんとなり、名王  
 の字は漢書に出づ、曰く、衛青、霍去病、名王貴人を虜すること百  
 を以て數ふと。  
 從軍十年除。能無分寸功。衆人貴苟得。  
 欲語羞雷同。中原有鬪爭。況在狄與戎。

詩 古 言 五 章 六 第

丈。夫。四。方。志。安。可。辭。固。窮。  
(功同戎窮) (四字押韻)  
 軍に従ふこと十餘年の久しきを経て、豈分寸の微功なからんや。他  
 の衆人は苟且功を挟み、賞を得んことを求むるも、我は衆人に雷同  
 するを恥ぢ、言はんと欲して言はず、中原に鬪争あるは國家の不幸  
 之に頼りて功名を立て、富貴を計るは、私の忍びざる所、況んや西  
 戎北狄區々の征戦に於てをや。丈夫生れて四方の志あり、今其萬一  
 の報效を致すのみ、安んぞ貪冒以て私を營まん、宜しく國家を守る  
 べきなりと、忠順の心を揚げ、純臣の節を效し、功を伴ふの軍士、  
 功を喜ぶの世主をして、競躁の心を抑へしむ。  
 右前出塞九首、第一首は全體の眼目、第二首は家漸く隔り、軍伍漸  
 く親しむ事を叙し、出征路あるを點染して當時の情狀宛然目に在り  
 第三首志を言ふて一幅血性の語を寫し、第四首訣絶の一語、絃斷矢絶

成大詩作

死生國に許すを誓ひ、第五首、前後の過峽にして、上、赴役の情を結び、下、行軍の状を起す、紀律嚴明のところ、宜しく細玩すべし第六首遙かに首章開邊の字に應じて規諷を寓し、第七首邊關の寒苦によりて婦を思ふの情を寫し、上、骨肉六親等に照應し第八首題の正意を透發す、僅々六句大舉入寇山岳を震撼するの勢及び我軍精銳神速戎に臨める敵愾の勇と、夫の鋒を推し陣を陥れ轍亂れ旗靡き追奔捕敵の情形、畢く四十字の中に傳ふ。第九首は上潜身の二句を承けて全體の結局となす。仔細に看來れば、親を思ふの孝、國に盡すの勇、士を恤むの仁、勝を制するの略、悉く備はりて、武を尙ばず功に誇らず、窮を諱まざるの義亦之を寓せり。九首之を分ては各自五言八句の短篇と雖も、之を合すれば一大長篇となり、首尾呼應、叙次齊整、其位置を轉換すべからず、之を熟誦

第六十五章言古詩

すれば、短古の作法を知ると共に、長篇大作の結構亦悟るを得べきなり。

後出塞五首  
男兒生世間。及壯當封侯。  
馬能守舊丘。召募赴前門。  
千金裝馬鞍。百金裝刀頭。  
親戚擁道周。斑白居上列。  
少年別有贈。含笑看吳鉤。  
戰伐有功業。間動不可留。  
送我行。酒酣進進羞。

後出塞は天寶十四載三月、安祿山奚契丹と潢水に戰ふて之を敗りし時に作る、出兵の漁陽に赴くがためなり。

第一首、募に應じて軍に従ふの初、意氣の壯なるを寫す。男子世に生れては、壯にして當に戰功を立て封侯を取るべし、何ぞ故郷に蟄

成大詩作

伏して碌々老死せんや。依て召募に應じて薊門の鎮營に赴く、衆軍の行動暫くも止まらず。千金の馬鞍、百金の刀劍、財を惜まずして軍裝を盛にし、閭里の舊故、我を送りて行色を壯にし、親戚の人々道上に環擁し、鬚髮斑白の父老は上座に在りて、酒間種々の嘉肴を侑め、少年の朋友は別に心を籠めたる贈りものあり、依て笑を含みつゝ、寶劍を檢し、此を以て國家の爲に功名を建んと、壯士の得意を描寫す、歡欣踴躍の狀、前出塞の辛苦悲酸、戚々故里を去ると全く相反し。彼は險を履み難を蒙るの情あり、此は利に趨り功を邀むるの心見ゆ。此時安祿山薊門を守りて、勢已に強盛、而して逆謀未だ露れず、且重賞を以て、軍士に結ぶ、故に壯士功を喜ぶもの、樂みて以て之に従ひ、其裝飾餽送の盛此の如し。吳鉤は吳王闔閭の寶刀なり。

詩古言五章六第

第二首軍容の整肅を寫す。東門は洛陽の東門なり、河陽橋は河陽縣の浮橋なり。始めて入營して出征の途に上れば、夕陽大旗を照し、軍馬嘶きて風蕭々たり。夜に入れば浩々たる平沙の上に千萬の營幕を連ねて、一部一伍此に招集せらる。此時明月天に懸りて、四顧寂寥、軍令嚴肅にして夜を警め、悲笳數聲、壯士感傷して、些も驕慢の態無し、軍容の整肅此の如きを致すは、何に由るぞ、試みに其大將を問へば、何人たるを詳かにせずと雖も、恐くは漢の霍去病の如

朝進東門營。馬鳴風蕭蕭。中天懸明月。壯士慘不驕。

暮上河陽橋。平沙列萬幕。令嚴夜寂寥。借問大將誰。

落日照大旗。部伍各見招。悲笳數聲動。恐是霍嫖姚。

(橋蕭招臺驍姚六字押韻)

成 大 詩 作

きものならん、果して然るや否やと、霍去病は衛青の姉の子にして  
嫖姚校尉となる、邊功ありと雖も、元來内寵によりて貴盛を致す、  
安祿山が楊貴妃に頼りて、恩倖を得たるを諷するに似たり。

古人重守邊。今人重高勳。  
出師巨長雲。六合一已家。  
豈知英雄主。遂使貔貅士。奮身勇所聞。  
拔劍擊大荒。日收胡馬群。誓開玄冥北。  
持以奉吾君。

(勳靈軍聞群君六字押韻)

第三首驥武倖功の禍端を叙す。古人の重んずる所は、守四夷に在り  
今人は徒らに戰伐の功勳を重んじて、漫りに兵を動かす覺を開く、  
豈知らんや英雄の主、師を出して軍馬騾騾長雲の綿亘せるが如きを  
六合已に一家となり、四夷孤立の勢を爲し、別に憂ふべきものなきに

詩 古 言 五 章 六 第

貔貅の衆をして、聞く所の旨に従ひ、奮闘せしめんと欲す。天子邊  
功を重んずるがため、下亦上意を迎合して、征戰を事とす、是に於  
て劍を抜き大荒を侵襲し、日々邊地の馬群を收めて、猶足れりとせ  
ず、更に玄冥極北の地を開拓し、以て天子に奉じ、榮爵を求めんと  
誓ふと、此時祿山禍心を包藏し、單于護眞の大馬を畜ひ、戰鬪を習  
はしむるもの數萬匹あり、日收胡馬群の句は、此事實を指すなり。

獻凱日繼踵。兩蕃靜無虞。  
擊鼓吹笙竽。雲帆轉滄海。  
越羅與楚練。照耀輿臺軀。  
氣驕凌上都。邊人不識議。  
主將位益崇。死路獨。

(盛平吳疆都衛六字押韻)

第四首主將の驕慢豪華を寫す、天寶四載奚契丹、唐より降嫁せる公



成 大 詩 作

主を殺して以て叛す、祿山契丹の諸酋を締き、置酒高會、毒を投じて悉く其酋を殺し、首を闕下に獻ず、起句獻凱の字は此事を指す、兩蕃は奚と契丹にして、今や安靜愛ふべきものなし、漁陽は今の直隸省の大半にして、古の燕なり、祿山の時范陽と稱して此に鎮す、其風俗豪華任俠を貴び、加ふるに戰捷の餘、鐘鼓を撃ち笙箏を吹きて、日夜宴樂度無く、雲帆遼海より來りて、漕運陸續、東吳よりは粳稻を輸送して、糧餉山の如く、越羅楚練、錦繡の美、輿僮皂隸の軀に照耀す、下位に在る人々の豪奢すら此の如し、況んや其上に在るものをや、主將の威益々崇く、氣益々驕りて、帝都をも凌駕する勢なれども、邊人目を側て、之を議せず、苟くも之を議する者あれば、忽ち主將の怒に觸れて、刑戮の禍に罹り、屍を路傍に横ふべしと、祿山の驕滿玄宗の濫恩、形容態を盡せり、

詩 古 言 五 章 六 第

我 本 良 家 子  
身 貴 不 足 論  
坐 見 幽 州 騎  
故 里 但 空 村  
出 師 亦 多 門  
躍 馬 二 十 年  
長 驅 河 洛 昏  
惡 名 幸 脫 免  
將 驕 益 愁 思  
恐 孤 明 主 恩  
中 夜 聞 道 歸  
窮 老 無 兒 孫

(門論恩賞村孫六字押韻)

第五首禍を畏れて間道より故郷に脱れ歸る事を叙し、首章の得意功名を願ふの狀に反襯す。我は元來良家の子弟にして、朝廷師を出せしより多く主將の門を歴、以て今日に至りしが、主將功に誇り寵を恃み驕傲日に甚しく、反形已に見はる、斯くて其麾下に在り在再日を送らば或は反賊の群に混せらるゝとあらん。果して然らば其身富貴を得るも何ぞ論するに足らん。軍に従ひ馬を躍らすこと二十年の久しきを経て、國家に寸功無く、却つて天子の恩澤に孤負すること

成大詩作

あるは我本志にあらず。而して幽州(范陽は幽州に屬す)の騎卒長驅して河南洛陽に迫り、煙塵昏濛、上國を侵凌する形迹已に見えたり。さては主將の心早くも天子に叛するかと、驚き懼れて半夜間道より逃走して故郷に歸れば、軍需の誅求に堪へかねて、民皆流離散亡、徒らに空村を餘すのみ。我は幸に叛賊の悪名を脱免するを得たるも年老て貧賤、扶養を受くへき兒孫も無しと、少年の血氣功名に誤まられて、窮老無告の民となれる者の心事を詳悉す。天寶十四載祿山河北諸郡を陥れ、其十二月遂に洛陽を犯す、長驅河洛昏の句は、此時の事を指す。玄宗武を驥し恩を濫りにし、虎を養ふて患を遺せしは、千古史家の慨歎する所、少陵當時に在り、戔兵の辭を借りて其情形を寫し、剴切悲痛、千古の炯戒となす、彼の武功を恃みて邊土を開き、得る所は失ふ所を償はざるもの之を讀み以て如何と爲す。

詩古言五章六第

飲酒一節  
結。廬。在。入。境。  
心。遠。地。自。偏。  
山。氣。日。夕。佳。  
欲。辨。已。忘。言。  
而。無。車。馬。喧。  
飛。鳥。相。與。還。  
此。中。有。真。味。  
陶。潛。問。君。何。能。爾。  
悠。然。見。南。山。  
五古の正宗として最も學ぶべきは陶淵明なり。但し其平仄は唐以後古今體の區別あると異りて、今體に入るべきもの多し。此詩の押韻、喧言は今の十三元、山還は十五刪、偏は一先の韻にて、古は皆通用す。  
首四句、廬を結びて人里を離れずと雖も、亦車馬喧霧の俗地にもあらず、人或は問ふて云ふ、君俗を厭はし蓋ぞ深く山林に入らざると答へて云ふ、心さへ俗を忘るれば、其居る所山林偏僻の地に似たり



成・大詩作

安佳誰青休願珊頭  
知人不樓者盼瑚上  
彼慕希臨以遺間金  
所高冷大忘光木爵  
觀義顏路餐彩難釵

盛求媒高借長羅腰  
年賢氏門問嘯衣佩  
處良何結女氣何翠  
房獨所重安若飄琅  
室難營關居蘭瓊玕  
中衆玉容乃行輕明  
夜人帛華在徒裾珠  
起徒不耀城用隨交  
長嗷嗷安日端息駕還體  
歎

曹植は魏の曹操の子にして文帝の弟なり、漢魏間の大家と稱す。此詩美女を以て君子に喩へ、君子美行あり、賢君を得て之に事へんと欲し、遂に遇ふ所なくして閑居節を守ることと述ぶ。起四句美人路

詩古言五章六第

傍に桑葉を採ることを云ひ、次の四句素手皓腕其艶色を説き金雀の釵、翠玉の佩、其艶装を説く。爵雀古通用す。次の四句明珠珊瑚羅衣輕裾、前意を敷衍して、其盛飾を述ぶ、木難は裝飾の珠なり。次の四句願胸する毎に光艶四邊を照し、呼氣芬蘭に似て、行人も爲に恍惚として歩を停め駕を駐め、驛舎に憩ふ者も食を忘る、光景を説く。次の四句其居る所を問へば、妾の家は大路に臨める青樓にして高門重關尋常の人を容れずと、此時青樓の字、後世の如く未だ酒樓茶館の意に用ゐざるなり。次の四句容色の美、何人も愛する所にして、媒妁に頼り、之を得んと欲し、玉帛の重資を以て聘するも、美人は斥けて受けずと。次の句は美人義を慕ひ、賢夫を得て之に事へんと欲す、凡庸衆々として其美色を悦ぶも、美人の意に中るべきものなし、如何にして其意中を知らんとなり。而して結二句美人遂

成 大 詩 作

に身を托すべき賢夫を求め得ず、妙齡の身を以て、猶空房に居り半  
夜轉輾反側、起て長歎すと、君子の世に賢主無きを慨するに比す。  
子建の詩は此外名都、白馬、聖皇、棄婦の諸篇皆五古を作るの規矩  
と爲すべし。

古詩十九首節一  
迢○迢○牽○牛○星○  
札○札○弄○機○杼○  
河○漢○清○且○淺○  
脈○脈○不○得○語○  
皎○皎○河○漢○女○  
終○日○不○成○章○  
相○去○復○幾○許○  
盈○盈○一○水○間○  
織○織○擢○素○手○  
泣○涕○零○如雨○  
（女婦兩許語）  
（五字押韻）

古詩十九首は、漢代何人の作る所なるやを知らず、蓋し其作者は一  
人にあらずして、逐臣棄妻若くは種々心に感ずる所あるもの、作り  
しを收拾したるなり。此詩亦牽牛織女の事を借りて、君臣朋友或は

詩 古 言 五 章 六 第

男女間の濶絶を歎するものに似たり。思慕の念切なりと雖も、之に  
親みて語を得ず、中心懊惱のために機杼章を成さずと、語淺くし  
て意極めて長し、殊に迢々、皎々、織々、札々、盈々、脈々、疊字  
の用法最も其妙を見るべし。

怨歌行  
新○裂○齊○紈○素○  
團○團○似○明○月○  
常○恐○秋○節○至○  
恩○情○中○道○絕○  
皎○潔○如○霜○雪○  
出○入○君○懷○袖○  
涼○颯○剋○炎○熱○  
裁○成○合○歡○扇○  
班○婕○妤○好○  
乘○動○搖○微○風○發○  
棄○捐○篋○筒○中○  
（雪月發熱絕）  
（五字押韻）

班婕妤は漢の成帝の寵妃なり。趙飛燕の貴幸寵を得るに及んで、班  
女自ら恩情の久しからざるを知り、長信宮に退き太后に侍養せんと  
乞ひ、紈扇を詠じて以て自ら傷む。齊の白き練絹を裁して團扇を作

り、炎熱を驅るの用に供し、常に君の懷袖に出入すと雖も、秋涼の候に至れば、忽ち棄捐して顧みられず、妾が身も亦此團扇に似たりとなり。

李陵、蘇武唱和の詩皆一韻到底にして、五古の濫觴となす、亦學者の熟誦玩味すべきものなり。

要するに漢魏六朝より唐宋金元明清を通じて、其時代に隨ひ、格調措字各異なる所あり、諷誦の久しき自ら之を辨識すべし。爰には唯其一斑を擧げて作例となすのみ。

(二) 換韻格

五言古詩は普通韻を換へざれども、亦換韻のものあり。而して換韻の法大抵意の轉すると共に韻を換ふ。或ひは四句を一解として、毎

解換韻のものあり、或は二句六句八句等にして韻を換へ、決して一格に拘々たらず。然れども初學の解し易きを旨とし、四句換韻の例より掲ぐべし。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 贈 | 太 | 豈 | 春 | 慎 | 華 | 爲 | 光 | 勿 | 侍 | 生 | 微 | 掃 | 作 | 御 | 長 | 麟 | 地 | 桃 | 黃 | 松 | 折 | 盡 | 李 | 裳 | 亭 | 』 | 』 | 』 |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |   |   |   |   |   |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |   |   |   |   |   |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |   |   |   |   |   |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |   |   |   |   |   |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |   |   |   |   |   |

李 白  
天 與 百 尺 高  
路 人 行 且 迷  
願 君 學 長 松  
然 後 知 君 子  
(押韻三解李平仄互用)

第一解四句は、太華峯頭百尺の長松、其高さ天と同じく、亭々として霜雪を凌ぎ、風のために折られずと、専ら松の勁節を稱し、第二解四句は、桃李陽春に當りて妖艶を衒ひ、行路の人をして其目を迷

詩古言五章六第

第一解は我日暮石濠村に投宿せし時、吏來り昏夜人を捉ふ、蓋し壯丁を徴召して、征役に就かしむる爲なるが、壯丁既に盡るを以て、更に老翁を驅迫するなり。老翁之を恐れ牆を踰へて遁逃し、家に留りて吏を迎ふるは唯老婦あるのみと、老夫老婦狼狽恐懼の状想ふべし。第二解、吏怒り婦啼き、且つ訴へて曰く、老夫婦の間に三人の男子ありしも悉く徴せられて、鄴城の戍卒たりと、此處仄韻より仄

二男新戰死。室中無人。出無完裙。急應河陽役。如聞泣幽咽。

存者且偷生。惟有乳下孫。老婦請從吏。無別。

天明登前途。獨與老翁別。

押韻一解村人門、二解怒苦戍、三解至矣四解人孫租、五解衰歸炊、六解絕咽別。

成大詩作

はしむるも、春色盡れば、徒らに綠葉のみにして、花は已に零落泥土に委すと、艶色の恃むに足らざるを悲み、第三解は松と桃とを併せて、松の勁節を學び、桃李の妖艶を學ぶことなかれ、たとひ一時の屈を受るも、千歳の節を改めざるは、松の霜雪を凌ぎ、天と高きを争ふが如くにして、君子たるを知ると、段落極めて分明、初學の最も學び易き作法なり。

四句一解の押韻は、大抵平仄互用を以て常格と爲す、平仄互用とは此詩の如く仄韻より平韻に換へ、平韻より仄韻に換ふるなり。

石濠吏  
暮投石濠村。  
有吏夜捉人。  
老婦踰牆走。  
聽婦前致詞。  
吏呼一何怒。  
婦啼一何苦。  
三男鄴城戍。

杜甫

成大詩作

韻に轉換す、平仄互用の常格にあらず。第三解、更に老婦の語を續て曰く、鄴城の戍卒となりし三男子の一人、書を寄せて其二人の戦死を報じ、且云ふ我は存して暫時の生命を偷むも、死せる兄弟は長く此世を辭し萬事休せりと、第四解、猶老婦の語なり、曰く、されば一家の中老夫婦を除けば寂として人無く、唯其身長未だ乳の邊に達せざる孫あるのみ、孫の母即ち我媳婦も、良人の出征後節を守りて、未だ我家を去らざるが、貧苦のために出入完衣無き窮境に在りと、此處又平韻より平韻に轉換す。第五解、老婦は更に訴へて曰く妾老て力衰ふと雖も、老夫に代りて、貴官に隨ひ往き、河陽軍に至りて、糧食を炊ぐの勞に服せんとす、夫は老ひ子は死し、孫は幼、媳は寡、皆憐むべきものなり、老婦の一身を棄て、官命の急に應ずべしと、痛絶慘絶此を讀みて泣かざるものは人情にあらず。第六

詩古言五章六第

解、夜深けて老婦哀訴の聲も絶え、たゞ涕淚潸然嗚咽の聲を聞くが如く、夜叉の如き酷吏も、此哀訴を聞かば、徵募を止むるならんと思ひしに、翌朝に至れば、老婦の願の如く、夫に代りて河陽軍に赴くと見え、老夫と別れて途に就けりと、酸鼻の狀を寫して一字一淚。石壕村は陝州にあり、鄴城は史思明の寇する所にして、郭子儀爲に河陽を守れり。

五言の四句一解、大抵、二四兩句に韻を押しのみ、此詩六解悉く一二四の句に韻を押し、亦一格と爲す。

送運判朱朝奉入蜀  
蘇軾  
我游江湖上。明月濕我衣。白雲呼我歸。  
照我光不滅。我在塵土中。白雲呼我歸。  
我游江湖上。明月濕我衣。白雲呼我歸。



成大詩作

猶若使路跳夢雲  
 塘逢者穿被尋月  
 踏山我慈吹西在  
 泉中友竹枕南我  
 石友生林屏路側  
 問聽父送獸謂  
 我詔老君數是  
 歸如拜無短山  
 何家馬二長中  
 日人下物亭人  
 爲細不用清似相  
 話說爲驚飲江聞望  
 腰爲汝走君嘉了  
 脚評藏馬陵不  
 輕

此詩第一解、我塵土の中に在るも青城の雲我に隨ひ、峨眉の月我を照し、第二解雲は我を呼び歸らしめんとし、月は我衣を濕し、第三解雲月の情厚きを述べ、第四解、意境全く一轉して、朱朝奉の將に赴かんとする道上の景を言ひ、第五解、始めて本題に入り朱を送る事を述べ、第六解父老に論して朱の愛すべき人にして畏るべき人にあら

詩古言五章六第

ざるを説き、第七解、故人朱に向つて我事を問は、塵土の中にあるも、猶山中の人たる本色を失はずと答へんことを囑し、以て首解の雲月と照應す。此詩の押韻は全く平仄互用なり。  
 四句一解、解を逐ふて韻を換ふの例は、以上三首にて其大體を知るべし。或は又二句にして韻を換ふものあり、六句八句乃至十數句にして韻を換ふものあり。解を累ねて段落となし、一段落毎に韻を換ふるものあり。一々之を絮説するは、煩瑣に失して、却つて初學の人を惑はしむる恐れあれば此に略す、たゞ二三の作例を掲げ、聊か鄙意を付す。

子房未虎嘯。破産不爲家。  
 經下邵圮橋懷張子房。  
 惟秦博浪沙。報韓雖不成。  
 滄海得壯士。  
 天地皆震動。

詩古言五章六第

感○落○門○翟○常○千○十○遠○妾○  
 此○葉○前○塘○存○喚○四○床○髮○  
 傷○秋○遲○澗○抱○不○爲○弄○初○  
 妾○風○行○顧○柱○一○君○青○覆○  
 心○早○跡○堆○信○迴○婦○梅○額○

坐○八○一○五○豈○十○羞○同○折○  
 愁○月○一○月○上○五○顏○居○花○  
 紅○胡○生○不○望○始○未○長○門○  
 顏○蝶○綠○可○夫○展○昔○干○前○  
 老○來○苦○觸○臺○肩○開○里○劇○

早○隻○苔○猿○十○願○低○兩○郎○  
 晚○飛○深○聲○六○同○頭○小○騎○  
 下○西○不○天○君○塵○向○無○竹○  
 三○園○能○上○遠○與○暗○嫌○馬○  
 巴○草○掃○哀○行○灰○壁○猜○來○

徐泗は徐州泗水、其地一帯の總稱たり、張良一たび去りて後來復人傑を産せざるを歎す。

成 大 詩 作

下○邳○の○圯○橋○は○今○の○江○蘇○省○徐○州○府○邳○州○に○在○り、  
 を○以○て○名○く。張○良○の○黃○石○公○に○遇○ひ○し○處○な○り。  
 張○良○元○韓○に○仕○へ、韓○亡○  
 び○た○る○後、其○讐○を○復○せ○ん○が○た○め、壯○士○を○募○り○て、博○浪○沙○に○始○皇○を○推○  
 殺○せ○ん○と○す、事○成○ら○ず○し○て○下○邳○に○遁○れ、黃○石○公○の○三○略○を○受○け、漢○を○  
 佐○け○て○秦○を○滅○ぼ○せ○り。此○詩○第○一○解○四○句、張○良○未○だ○志○を○成○さ○し○る○時○の○  
 事○を○云○ひ、第○二○解○四○句、其○智○勇○義○烈○を○讚○歎○し、第○三○解○六○句、其○古○跡○  
 を○憑○弔○し、今○の○世○黃○石○公○の○如○き○隱○君○子○も○張○良○の○如○き○英○雄○も○俱○に○無○  
 き○を○悲○しむ、古○詩○韻○範○は○嘆○息○以○下○二○句○を○更○に○第○四○解○と○な○す、復○妨○げ○  
 な○し。段○落○を○分○て○は○前○八○句○後○六○句○を○以○て○分○界○と○し○前○後○二○大○段○な○り。

潛○匿○遊○下○邳○  
 懷○古○歎○英○風○  
 嘆○息○此○人○去○  
 蕭○條○徐○泗○空○  
 豈○曰○非○智○勇○  
 唯○見○碧○水○流○  
 曾○無○黃○石○公○  
 我○來○圯○橋○上○

成大詩作

預將書報家。

相迎不道遠。直至長風沙。  
(神韻首二句韻脚、次十八句來梅猶開題灰、  
善堆哀苦次六句掃早草老、末四句巴家沙)

此詩首六句は男女の幼時を叙す、其中二句先づ女を叙し次の二句男を叙し、次の二句男女併せ叙せり。長干里は今の江寧府即ち金陵の附近にて古來繁華の地なり。劇は戯に同じくタハムルと訓ず、無嫌猜は無邪氣の態を云ふ。以上を第一段となす。  
十四爲君婦より生緣苔に至る十四句、夫婦となりて相別れ、天涯相隔ることを叙す。其中、其十四の四句嬌羞の態を寫し、十五の四句伉儷の情篤きを云ひ、十六の四句夫の遠行を送りて、道上の危険を憂ふる女心を描き、末二句女の空房を守ることが述べ。瞿塘灘韻は峽中の絶險にして、五月水漲るときを以て最も危しとなす。以上第二段と爲す。此處苔の字を疊みて韻を換ふ。

詩古言五章六第

苔深以下六句、歲月を経て良人歸らず、女の容色の衰ふを歎す。以上第三段と爲す。

末段四句良人の歸るときは、豫め其歸期を報するならん、さらば途中の長風沙まで出で迎へんとなり。

古詩韻範は妾髮二句を以て一解となし、次に二解、三解、四解、五解俱に四句、門前の二句を六解となし、七解四句、八解二句、九解四句と爲し、韻法を論じて曰く、起二句一轉し、中間長段を用ひ(仄韻の處)末四句を以て收め、平仄互に用ふ、長段の中或は解を逐ふて韻を換ふるも亦可なりと。

其他李白の酬談少府の篇は、十句の中起二句仄韻を用ひ、次の八句は平韻を用ひ、杜甫の潼關吏も亦起二句仄韻にして次の十八句は平韻なり。李白の送崔氏昆季之金陵は起四句仄韻にして次の十二句は

平韻なり、或は數十句の長篇にして、結末二句若くは四句のみ韻を換ふるものあり。要するに毎解或は毎段落韻を換ふるを以て常格と爲すと雖も、時に變化の妙を見ることあり。されども行くべきに引き止るべきに止りて、自ら法度の合するを要す。  
五古は元來換韻の作例少し、但李太白の集中其多きを觀るのみ。初學者は容易に之に倣ふべからず。畢竟一韻到底を以て五古の常格と爲すべし。

第七章 七言古詩

(一) 平仄の定式

七言古詩の平仄は王漁洋に至りて發明する所多し。依て左に其の説の梗概を掲ぐ。  
曰く、出句は第二字平、第五字仄、其餘四仄五仄亦諧ふ、落句は第五字平、第四字仄、上に三仄四仄ある亦古詩の正式なりと、之を平韻到底格の常格と爲す。  
出句とは上下兩句の中、其上句を云ひ、落句は下句にして即ち押韻の句なり。

山 中 答 人  
問 余 何 意 栖 碧 山  
笑 而 不 答 心 自 閒

成 大 詩 作

桃○花○流○水○杳○然○去○

別○有○天○地○非○人○間○

此詩は古來絶句として傳誦すれども、普通近體の絶句と異りて、其平仄は古詩の正式に合するものなり。故に古詩の平仄を知らんと欲せば、先づ此詩を熟誦して其聲調を學ぶべし。

起句は落句にあらざるも、韻を押むを以て其平仄落句と同じ。王漁洋の落句第五字平と云へるは、此詩の栖、心、非の三字に當り、第四字仄と云へるは、意、答、地の三字に當れり。

又出句の第二字平と云へるは桃花の花の字、第五字仄と云へるは杳然の杳の字なり。

出句の第二字平を以て定式となすがため、落句の第二字は之に反して古人多く仄を用う。然れども必ずしも拘泥せず、此詩に於ても余而の如き平を用ひたり。但し下三平なるときは第二字仄にして、下

詩 古 言 七 章 七 第

三字平仄平なるときは第二字平なるが如し。例へば非人間の三平の句は、第二字有の仄字を用ひ、栖碧山、心自開の平仄平なるときは第二字余、而の平字を用ひること多し。

千○賀○男○孤○當○公○江○延○  
年○蘭○兒○城○時○卿○頭○秋○張○  
海○不○竟○落○不○相○老○門○中○  
上○斬○爲○日○識○率○臣○上○丞○  
見○上○忠○百○顏○作○淚○烏○廟○  
廟○劍○死○後○原○虜○滴○霜○

古○英○碧○瘦○豈○草○萬○翔○  
苔○雄○血○馬○復○間○乘○兒○  
叢○有○滿○食○知○拜○西○曉○  
木○恨○地○盡○有○位○去○登○高○  
秋○何○嗟○人○張○如○關○天○  
風○時○誰○裏○唯○攀○山○子○  
荒○忘○藏○瘡○陽○羊○長○牀○



成 大 詩 作

叶はず、近體の平仄即ち律句にも合はざるものにして、其例を擧ぐれば○○●●●●○○○、●○○○○○○○、●●●●○○○○の類にして前詩の媚兒曉登天子牀、忠魂或能來故郷の如きは即ち別律句なり。平韻到底格の平仄は、大要右に述べたる如くなるが、仄韻到底の古詩に至りては亦自ら異なれり。

半●苦●八●何●天●九●  
空●花●窓●年●涯●州●天●  
擲●錦●玲●氣●一●上●涯●  
下●石●瓏●母●峯●游●山●  
金●燦●透●此●今●推●  
芙●可●朝●融●日●大●  
蕖●喜●日●結●看●鹵●

想●乞●洞●鬼●快●獨●  
得●與●穴●鑿●似●恨●  
飛●雲●慘●神●昂●山●  
來●煙●澹●鏡●頭●形●  
自●相●藏●未●出●頗●  
元●媚●雷●奇●環●椎●  
圃●嫵●雨●古●塔●魯●

元 好 問

詩 古 言 七 章 七 第

漁洋の説に曰く、仄韻到底は多く第二字第五字を以て關振となすと、前詩を以て之を證すれば、出句第二字州、涯、年、窓の如く平字を用ゐ、落句第二字は上と相對して多く仄を用うることは、恨、似、鑿、穴等の諸字の如し。又第五字も出句平を用うる時は落句に仄を用うることも多し。然れども第二字の如く嚴ならず。

傳●五●東●敬●酒●喚●詩●  
聞●雲●州●亭●船●起●狂●  
絕●飛●死●不●何●山●他●  
頂●步●愛●著●時●靈●日●  
更●吾●非●謝●朝●槌●笑●  
虛●未●不●宣●復●石●遺●  
異●能●注●城●暮●鼓●山●

云●風●同●斷●倒●漢●飯●  
是●袂●在●岸●卷●女●顚●  
清●冷●何●隨●何●滄●湘●  
都●冷●邦●緣●沱●妃●妨●  
羣●已●何●比●浣●出●嘲●  
玉●輕●足●天●塵●歌●杜●  
府●舉●數●姥●士●舞●甫●

詩古言七章七第

此詩は四句換韻の格にして、其平仄前述の平韻到底、仄韻到底と亦自ら別なり。然れども下三字川途開、從南來、聲如雷、何徑徑、終伯、雨、杖の如く必す仄字を用う。隨ふて第二字多く平字を置く、其仄を用うるは楫、耐の二字のみ。是古詩自然の調なり。

早官魚吁發蓄夜  
 辦繪龍嗟鼓滑深  
 人裘潛河催難側  
 夫酒逃伯船施聽  
 候自科何喚櫓流  
 治高斗經打枝漸  
 裝臥匿徑水折響

明只殊白衝舟瑣  
 日話耐棹寒人碎  
 推篙鞭如十霜玲  
 水又非終西毳漸  
 上手窮無風鬚結  
 過坐民聲裂白成

簡以庚陋庚  
 韻上真上厝上厝上

成大詩作

溜相雪帆下新北  
 過逢深橋流成河打  
 湘羨沒山湍雲風水  
 寬殺裸齊悍中高詞  
 放順衣排川千水  
 插流露浪途騎生  
 平船肘進開馬骨

長急背牽吹橫玉  
 年問挽船箔津墨  
 穩來頭百官直銀  
 望時低丈舫渡橋  
 一河風聲從無堆  
 帆凍寒如南行幾  
 輕否口雷來迹尺

有以 仄以 月以  
 韻上 韻上 韻上

敬亭不著謝宣城、詩狂他日笑遺山の如きは近體の平仄に合す、漁洋の所謂仄韻到底は、問律句に似たるも妨げ無しとは是なり。要するに仄韻古詩の平仄は、平韻古詩に比して、其法稍寛なり。但二五の關振に注意するを以て、大體を得たりとなす。



成 大 詩 作

然れども換韻の七古は、律句を用うる妨げ無し。殊に四句換韻に至りては、殆んど近體の絶句を數首連接したるが如く、悉く律句を以て作るものあり、但四句の中、前二句と後二句と相粘せず、絶句の拗體に似たるものあり。或は上下の兩句近體の如く粘せざるものあり。例へば東坡武昌銅劍歌中の上句、水上青山如削鐵に對して下句第二字平なるべきに、神物欲出山自裂と云へるが如き、之を不粘と云ふ。古詩を作るもの此に注意すべし。長短句に至りては平仄の定式無きが如きも、李太白の蜀道難に就て之を檢すれば、

不<sub>下</sub>與<sub>三</sub>秦<sub>寒</sub>通<sub>人</sub>煙<sub>上</sub>  
然<sub>後</sub>天<sub>梯</sub>石<sub>棧</sub>相<sub>鈎</sub>連<sub>上</sub>  
上<sub>有</sub>六<sub>龍</sub>廻<sub>日</sub>之<sub>高</sub>標

詩 古 言 七 章 七 第

等の句亦古詩の音調に諧ふて、下三平の上仄字を有せり。白樂天の長恨歌、換韻七古の長篇として、最も人口に膾炙するものなるが、其起手八句

漢<sub>王</sub>重<sub>色</sub>思<sub>傾</sub>國<sub>一</sub>  
楊<sub>家</sub>有<sub>女</sub>初<sub>長</sub>成<sub>一</sub>  
天<sub>生</sub>麗<sub>質</sub>難<sub>自</sub>棄<sub>一</sub>  
回<sub>頭</sub>一<sub>笑</sub>家<sub>生</sub>頭<sub>の</sub>如<sub>く</sub>平<sub>字</sub>に<sub>し</sub>て、  
使<sub>百</sub>猿<sub>欲</sub>度<sub>愁</sub>攀<sub>緣</sub>  
百<sub>步</sub>九<sub>折</sub>紫<sub>巖</sub>巒<sub>一</sub>  
使<sub>人</sub>聽<sub>此</sub>洞<sub>朱</sub>顏<sub>一</sub>  
六<sub>宮</sub>粉<sub>黛</sub>無<sub>顔</sub>色<sub>一</sub>  
養<sub>御</sub>字<sub>多</sub>年<sub>求</sub>不<sub>得</sub>  
一<sub>朝</sub>選<sub>在</sub>君<sub>王</sub>側<sub>一</sub>  
六<sub>宮</sub>粉<sub>黛</sub>無<sub>顔</sub>色<sub>一</sub>

成大詩作

なり。出句の第二字平なれば落句の第二字仄を用うるは、近體の定式なれども朝、宮の如く平を用うる亦古詩の調なり。第一句の平仄は二四不同、二六對の法に叶ひて、近體に入るべきものなれども、前後上下を檢すれば、所謂不黏の聲律なり。次の支韻四句

春寒賜浴華清池  
侍兒扶起嬌無力  
始是新承恩澤時  
溫泉水滑洗凝脂

是亦前三句の第二字寒、泉、兒の如く皆平なり。全篇百二十句中、近體に似たるものを求むれば

雲髻半偏新睡覺  
花冠不整下堂來  
春宵苦短日高起  
侍兒扶起嬌無力  
初長夜

歌孤從芙蓉帳暖春宵  
歌燈挑君王不早春宵  
星挑盡未成眠  
河欲曙天

詩古言七章七第

と僅かに三解、十二句に過ぎざるなり。而して出句六十句中、第二字平を用うるもの四十八句の多きに至る、亦學者の注意すべきところなり。

篇中對聯を用うる所は上下相對して、聲律の諧協を要す、例へば

金屋妝成嬌侍夜  
玉樓宴罷醉和春  
行宮見月傷春色  
夜雨聞鈴斷春聲  
春風桃李開  
秋雨梧桐落  
遲鐘鼓初長夜  
秋風雨星河欲曙天

諸句の如き近體律詩の平仄と全く相同じ。梨園弟子、椒房阿監、又昭陽殿裏、蓬萊宮中の如き聲律相諧はざる對聯もあれど極めて稀なり。

詩古言七章七第

此詩は四句換韻平仄互用の格なり。第一解、長江の水、萬里滾々、山勢と共に東に赴き、唯江中の鍾山屹然として、破浪乘風の勢あることを形容す、起手の斗健能く全篇を振起して、筆力鼎を扛くべし且つ高處より俯瞰して、目睫の間、其地勢を按ずるの狀、題意と相副ひ、臺に登るを言はずして、自ら臺上の人たるを知るべし。

成大詩作

七言古詩の稱甚だ廣し。類によりて之を分ち、一々詳説せば、其説長きに失するを以て、古人の作例を擧げ、略解を試みんとす。

(二) 七古作例

大○登○金○陵○雨○花○臺○望○大○江○  
 鍾○山○如○龍○獨○西○山○中○  
 江○山○相○雄○不○相○讓○  
 秦○皇○空○此○塞○何○由○開○  
 我○懷○爵○塞○何○由○開○  
 坐○覺○蒼○茫○萬○古○意○

遠○酒○佳○形○欲○山○大○江○  
 自○酣○氣○勝○破○勢○江○  
 荒○走○葱○爭○巨○盡○  
 煙○上○葱○誇○浪○與○  
 落○城○至○天○乘○江○高○  
 日○南○今○下○長○流○  
 之○臺○王○壯○風○東○啓○

承以 東以  
 韻上 韻上

成 大 詩 作

第二解、江山の形勝、天下の壯觀たるを説き、更に秦の始皇、東南に王氣あるを壓するため、此處に黄金を埋めしことに及ぶ（金陵の名の起る所以）而も佳氣今に至りて王すは後段聖人（明の太祖）南國に起るの伏線たり。

第三解、始めて金陵の雨花臺に登ることを説き、併せて懷古の意を寓す。荒煙落日九字の句殊に其妙を覺ふ。

第四解、石頭、鐵鎖、黃旗、飛渡、金陵の故事を引用して、蒼茫萬古の意を實にす。

第五解、吳晉宋齊梁陳即ち三國の時代より六朝に及びて、帝王の都する所なりと雖も、今は悉く亡びて宮闕草を生じ、英雄割據の陳迹徒らに憑弔の涙を灑ぐのみなりと、感慨無量なり。

第六解、即ち結末に至り、前意を一轉し、明の太祖を出して、四海

詩 古 言 七 章 七 第

一家となり、魏の文帝の天の南北を限る所以と歎じたる長江の險も今は不用となれりとの意を以て結ぶ。起結は共に全力を用ゐたるもの、如し。

前三國、後六朝の如きは、三字を一句と爲すも、七言一句に當て、之を視るべく。故に四句一解の詩中に之を用うるときは、更に七字三句を添へて一解となすを常格とす。

遠自荒煙落日之中來の如き長句は、漫りに之を用うべからず、本篇の如き、起結の雄健異常なるを以て、中間亦驚心駭目の好文字なかるべからず、故に此を以て氣格を整ひたるなり。

既に長句あれば、短句無かるべからず。前三國。後六朝の句を用うる所以知るべきなり。

平仄を論ずれば、江流東、乘長風、何由開、城南臺、之中來、何蕭

成 大 詩 作

蕭。流。寒。潮。の。如。き。下。三。平。の。上。は。必。ず。仄。字。を。用。ひ、又。獨。西。上。、至。今。王。未。爲。固、起。南。國、專。林。息、限。南。北、萬。古。意、務。割。據、等。下。三。字。多。く。●○●若。く。は。仄。三。連。を。用。う。是。古。詩。に。於。て。自。ら。然。ら。ざる。を。得。ず。更。に。出。句。の。第。二。字。を。檢。す。ば。江。山、山、山、皇、懷、頭、旗、雄、生。今。の。十。字。に。し。て、仄。字。を。用。う。る。もの、坐。覺。の。覺。の。字。一。あ。る。のみ。四。句。換。韻。の。平。仄。は、一。韻。到。底。に。比。す。ば。頗。る。寬。な。れ。ど。亦。此。の。如。し。

至。疾。孫。曹。馬。赤。壁。圖。今。雷。郎。瞞。老。一。壁。圖。畫。山。矯。去。蹴。荆。門。空。見。出。人。不。解。事。赤。壁。火。龍。

髡。旗。願。誤。鼓。髡。幟。盼。認。聲。燒。北。叱。孫。怒。虜。捲。叱。郎。與。江。流。東。留。天。生。作。阿。琮。除。紅。風。琮。

元好問

詩 古 言 七 章 七 第

此詩一韻到底格にして、通篇東韻を押し、但孫龍蹤の三字冬韻を通用す。出句の第二字仄なるは得意の意の字のみ、餘は悉く平なり。下三平の上即ち第四字の必ず仄なる亦注意すべし。孫郎矯矯人中龍令人長憶眉山公、得意江山在眼中の三句は普通韻を押しむべからざるものなり、而して韻を押しむは單行句と稱するなり。單行句は出句落句を合したるに同じく、一にして二を兼ね。遺山の集中最も此例多し。然れども對聯には單行句を用うべからず、何となれば對聯は二句にして一句に同じきものなるが故なり。たとひ對聯ならざるも二

令。人。長。憶。眉。山。公。得。意。江。山。在。眼。中。可。憐。當。日。周。公。瑾。

載。酒。夜。憑。夷。宮。凡。天。濤。雲。閑。今。古。同。惟。悴。今。誰。是。出。羣。雄。

成大詩作

句の意味相屬して離るべからざる時は、單行句と爲すを得ず。  
馬蹄一蹴荆門空、鼓聲怒與江流東は、曹操が八十萬の軍を以て、江東を席卷せんとしたる當時の威容を寫し、句勢極めて雄拔、七古の起手は偏に此の如きを要す。次は急に一轉して、曹操が孫權を認め劉琮一輩の豚犬兒とせしを嘲けり、之に接して孫權の英物たることを説く、層々轉下、用筆の變化極めて妙なり。次で曹操赤壁の大敗焦頭爛額、纔かに身を以て免れし事を叙し、本題の圖書に入る。而して赤壁と云へば、既に東坡を聯想す。是に於て憑夷の幽宮に俯すといふ赤壁賦中の字面を用ゐて、其風流を寫し、戰伐と詞賦、其事殊なりと雖も、俱に千古の快事、憑弔羨慕の意なきを得ず。  
得意江山在眼中、凡今誰是出群雄は、圖に對して、當年の英雄君子を想ひ、今其人無きを歎するなり。而して江湖の譎客たる東坡と勳

第七言古詩

名赫々たる周瑜と、俱に名聲を後世に垂るゝを感歎して筆を收め、餘意を言外に置き、含蓄不盡の味あり。  
事殊興極愛思集、凡今誰是出羣雄、共に杜子美の成句を用う。  
前半天爲紅に至るまでは、専ら赤壁の戰を叙し、眉山公、馮夷宮の句、専ら東坡を寫し、其中間の兩句は上を收めて下を起す關鍵にして、赤壁は東坡を追出し、餘蹤は曹と孫とを收め、事殊興極の句以下兩者を併せ叙し、更に周瑜を點出したるところ、筆墨の變化、端倪すべからざるものあり、起すに曹操を以てして孫權を陪客となし結ぶに東坡を以てして周瑜を陪客となす、前後其宜しきを得て、偏重輕偏の患なく。古詩を作る者、此より悟入せば、完作を得るに庶幾んか。

大雪歌

陸游

成 大 詩 作

此詩四句一解三韻、二句一解二韻、平仄互用の格なり。出句第二字は例によりて悉く平字を用う。

第一解は大雪山の甚しきを状す、句勢雄健喜ぶべし。第二解壯士の豪爽豁達を寫す。第三解、南山の猛虎を獵することを説き、驚天

人○曳○擊○千○五○虬○黃○長○  
 間○歸○空○年○更○鬚○河○安○  
 壯○擁○爭○老○未○豪○鐵○城○  
 士○路○死○虎○醒○客○牛○中○  
 有○千○作○獵○已○狐○僵○三○  
 如○人○雷○不○上○白○不○日○  
 此○觀○吼○得○馬○裘○動○雪○

胡○擗○震○一○衝○夜○承○潼○  
 不○體○動○箭○雪○來○露○關○  
 來○作○山○橫○却○醉○金○道○  
 歸○枕○林○穿○作○眠○盤○上○  
 漢○皮○裂○雪○南○實○凍○行○  
 天○蒙○崖○皆○山○釵○將○人○  
 子○鞍○石○赤○遊○樓○折○絕○

紙以寒以錫以 尤以 屑以  
 韻上韻上韻上 韻上 韻上

詩 古 言 七 章 七 第

動地の概あり。第四解寒韻二句、前解を承けて、壯士の意氣益壯なるを歎稱し、第五解は、長安に此の如き剛勇の壯士ありと雖も、天子は棄て、顧みず、何れの他に蒙塵したまふや、何ぞ早く歸來せざるぞと歎息せるなり。蓋し此時徽欽二帝、金に虜せられて、遠く胡地に在るより、慷慨悲憤の意を寓したるなり。且つ此詩の題下自ら注して、累日雪を作して竟に成らず、戯に此篇を賦すと、察するに雪らんとして雪無きに大雪の歌を作るは、此の如き壯士無くして、徒らに其人を想ふがため、無中に有を生じて、感慨を洩せるなり。されば其詞章は壯快の極と雖も、其意は悽愴悲慨大聲を放ちて慟哭すべきものあり。而して戯に賦すと云ふ、嗚呼、詩人として亂離の世に生るゝの不幸知るべきなり。

黄河鐵牛、承露金盤は對聯にして、上の句尾宜しく平字を用うべし

第七十七章言古詩

安祿山の亂を作すや、顏真卿、顏杲卿常山太守の兄弟義兵を起して之を禦ぎ、爲に肅宗位に靈武に即くを得、李光弼、郭子儀賊を討して唐室亡びざるを得たり、李郭の功固より大なりと雖も、顏氏兄弟牽制の力亦多きに居ると、庚韻十二句専ら其忠勇功烈を歎稱す。而して次の八句は、顏杲卿、祿山の虜となり、賊を罵りて其舌を鉤斷せられて死するを悲み、真卿亦同一の危難に遭はんとせしも、漸く免れて四朝に歴史し、忠節天下に知られしが、榮達の地位に至らず晩年叛臣李希烈の陣に使し、遂に殺さる、蓋し宰相盧杞聖明を塗蔽

當年幸脫安祿山  
 亂臣賊子歸何處  
 公死於今六百年

白首相陷李希烈  
 宰相虛杞欺日月  
 忠精赫赫雷當天  
 先韻以上

作詩大成

平公一家朝原過  
 明皇開家漁太守顏  
 唐家父失兄弟奮動  
 哀哉再父子色分奮  
 崎嶇坎珂不  
 得志

長安天子  
 大將入京  
 不敵夏盟  
 由是長驅  
 心歸牽制  
 出四朝老  
 入廷氣不  
 節

庚以上

而して動の仄字を置くは破格なり。蓋し下句入聲の韻なるを以て妨げなしとするものか、入聲は或る場合に於て平字と同視することあり。



第七十七章言古詩

寸陋忽不先雨林朱自也媽江  
 根邦逢問生中深唇然知然城  
 千何絕人食有霧得富造一地  
 里處艷家飽淚暗酒貴物笑療  
 不得照與無亦曉暈出有竹蕃  
 易此衰僧一悽光生天深籬草  
 到花朽舍事愴遲臉姿意間木

衝無歎杜散月日翠不故桃只  
 子乃息杖步下暖袖待遣李有  
 飛好無敵遺無風卷金佳漫名  
 來事言門遙人輕紗盤人山花  
 定移措看自更春紅薦在總苦  
 鴻西病修捫清匯映華空巖幽  
 鶴蜀目竹腹漱足肉屋容俗獨

作詩大成

して、可惜忠臣を此境に至らしめたるものなれば、希烈の殺すにあらずして、盧杞の殺せるものなりと、深く其奸惡を慨して、真卿の忠を惜み、次に反して忠勇義烈真卿の遺靈は、六百餘年を経たる後、猶雷霆の天に轟くが如く、人をして悚然相警ましむとなり。此詩第一韻十二句分ちて三解とし、第二韻八句分ちて二解となすべし。韻を換ふるに解を逐はずして、段を逐ふものなり。然れども末段は二句毎に韻を換ふ、亦一格なり。出句の第二字、平十にして仄二、落句の第四字、平九にして仄三、亦常格を失はず。

寓居定惠院之東雜花滿山有海棠一株土人不知貴也 蘇軾

成大詩作

是亦一韻到底の格なり。東坡謫地に在りて作る所。先づ南方瘴氣多くして草木長茂し、雜花目に滿つる處、圖らずも一株の海棠あるに驚き且つ喜ぶ(四句一解)蓋し佳人をして幽谷に居らしめ、自然の富貴を保全せしむるもの亦造物の深意ならんと歎じ(四句一解)次で朱唇翠袖花の艶を稱し、地の幽と時の宜しきを説き、雨月中下殊に賞すべきを云ふ(第三解)以上は専ら海棠に就て叙し、第一段と爲す。

次に筆路一轉して自己に及び(四句一解)意外の名花に遇ふて、其來由を怪む、蓋し海棠は多く蜀に産して、東坡亦蜀の人なり、以て好事家の蜀より移るものにあらずやと疑ひ、其身亦郷土を離れて、遠く此地に流落するを歎するの意を寓す(四句一解)而して寸根千里齎らし至

天○涯○流○落○俱○可○念○  
 明○朝○酒○醒○還○獨○來○  
 爲○飲○一○樽○歌○此○曲○  
 雪○落○紛○紛○那○忍○觸○

詩古言七章七第

るべきものにあざれば、或は鴻鵠など花實を銜み來り、地に落して此一株となりしにあらずやと疑ひ、何れにしても花と人と俱に天涯に相遇ふ、豈懷に感傷せざらんや、依て花に對して酒を飲み、此一曲を歌ふ(四句一解)と詞意既に此に盡き第二段と爲すもの、如し、而して更に餘意を述べて云ふ、明朝酒醒めて再び來り訪へば、落花紛々雪の如し。嗚呼我亦窮途に老死すること、此花の薄命に似たるなからんやと(第七解)結語の悽愴悲涼、人をして一讀斷腸の思に堪へざらむ。

此詩亦出句第二字十三平一仄、落句第二字は悉く仄なり、古人聲律の嚴此の如し、然れども第五字に至りては稍寬にして、拘泥せざるところあり。二五關振の語ありと雖も、第二字は第五字より嚴なるを知るべし。

詩古言七章七第

但途即將幹弟至玉斯詔是先  
看窮今軍惟子尊花須謂日帝  
古反飄善畫韓合却九將牽天  
來遭泊畫肉幹笑在重軍來馬  
盛俗干蓋不早催御真拂赤玉  
名眼戈有畫入賜榻龍絹墀花  
下白際神骨室金上出素下聽

終世屢必忍亦困榻一意廻畫  
日上貌逢使能人上洗匠立工  
坎未尋佳驛畫太庭萬慘閭如  
壤有常士驪馬僕前古澹闔山  
纏如行亦氣窮皆吃凡經生貌  
其公路寫凋殊凋相馬營長不  
身貧人真喪相悵向空中風同

眞以韻上 濛以韻上 東以韻上

成大詩作

褒良凌開丹學英將  
公相煙元青書雄軍丹  
鄂頭功之不初割魏青  
公上臣中知學據武引  
毛進少昔老衛雖之  
髮賢顏引將夫己子  
動冠色見至人矣孫

英猛將承富但文於  
姿將軍恩貴恨彩今  
颯腰下數於無風爲  
爽間筆上我過流庶  
來大開南如王猶爲  
酣羽生薰浮右尚清  
戰箭面殿雲軍存門

儀以韻上 元以韻上

朱唇、翠袖、林深、日暖、雨中、月下、海棠を形容する處對聯を用  
う。亦詩家の常法なり。前に名花幽獨の字を用ひ、後に還獨來の句  
あり、兩獨字遙に呼應するところ亦學ぶべし。

成大詩作

此詩は八句換韻平仄互用の格なり。先づ曹霸の家系を叙して、其門閥の高きを稱し、曹操(魏武帝)の武略、今亡ぶと雖も、猶其文彩風流の存するを以て、曹霸の身上に歸到す。次に曹の書を學び、之を棄て、更に力を畫事に専らにし、功名富貴を度外にすることを述べ。英雄割據の字面、魏の正統の天子にあらざるを示し、揚中に抑あり、此公語を下す苟もせざるを見る。富貴如浮雲は、後段曹霸の盛名ありて、坎壞其身を纏ふの伏線となす(以上元)開元中曹霸屢南薰殿に於て召見せられ、凌煙閣功臣の圖像古びて色を失ひしを以て、更に新像を描きしが、筆墨新生面を開き、褒鄂二公を始め、二十四功臣の英姿颯爽として新に戰場より凱旋したるもの、如しと、曹の人物を描くに工なるを稱す。褒公は段志元、鄂公は尉遲敬德共に唐の功臣なり。(以上段)次に曹又畫馬に妙なるを叙す。玄宗の愛馬玉花

詩古言七章七第

驄と名くるもの、幾多の畫工をして其真を寫さしむるも、一も似たるものなし。此日丹陛の下に牽き來り、曹霸に勅して之を描寫せしむるに、曹暫時意匠を凝して筆を下せば、眞龍俄かに躍り出で、從來の驚駭を一洗すと、此處の形容、沈雄雅健の極、全篇の驚策と爲す(東韻)是に於て玉花驄は却つて御榻の上にあるかと疑はれ、庭前の眞馬と相對し、孰れが畫にして孰れが馬なるや辨すべからず。天子喜びて金を賜ひ、太僕(馬官)圜人(馬丁)も其能を感歎す。而して曹の弟子韓幹、畫馬の法を得たるも、畫く所到底其師に及ばずと曹の技倆神に入りて、他に匹無きを述べ(漢韻)末段曹霸の如き神技を有して、今や窮途に彷徨することを歎す。然れど富貴を以て浮雲となすは、元より曹の志なりと、一面慰藉する所あるなり。一韻八句の中、每段分ちて二解と爲す。故に解を分てば十解なり。

詩古言七章七第

信西夫驅隴生君邊去或道牽  
 知卒敢不欽荆不庭時從傍衣  
 生伸異無杞開流里十過頓  
 男縣恨犬東紙以漢血正五者足  
 惡官間以與西韻上家成與北問欄  
急 縱山海裏防行道上  
 反索且齊以况有東水頭河人哭  
是租如復健二  
 生今長秦婦百武歸便行哭  
 女租年者兵把州皇來至人聲  
 好稅冬雖耐鋤開頭四但直  
從有苦犁千邊白十云上  
 生何未問戰村意還西點于  
 女出休禾萬未成營行雲  
 猶實上關役被生落已邊田頻霄  
通川

先以上  
 通用真  
 蕭以上  
 韻上

成大詩作

褒公鄂公毛髮動，英姿颯爽來酣戰。詔謂將軍拂絹素，意匠慘澹經營  
 中，斯須九重真龍出，一洗萬古凡馬空。幹惟畫肉不畫骨の詩句、少  
 陵以外に於て見るべからざる筆力あり。學者の深く玩味するを要  
 する所なり。  
 此篇畫馬を以て主と爲し、畫人を以て賓と爲す。又畫を以て主と爲  
 し、書を以て賓と爲す。又曹を以て主と爲し韓を以て賓と爲す。賓  
 主相形はし以て其妙を極む。  
 清の翁方綱此詩を稱して氣勢充盛、古今七言詩第一の壓卷と爲す誠  
 に然り。

耶車兵  
 孃轡車  
 妻轡車  
 子馬行  
 走蕭蕭  
 相蕭蕭  
 送蕭蕭  
 塵行人  
 埃人  
 不見箭  
 咸各杜  
 陽在  
 橋腰甫

成大詩作

得<sup>レ</sup>嫁<sup>ニ</sup>比<sup>レ</sup>鄰<sup>ノ</sup>生<sup>ル</sup>男<sup>ヲ</sup>埋<sup>メ</sup>没<sup>ス</sup>隨<sup>フ</sup>百<sup>草</sup>以上  
 不見<sup>ル</sup>青<sup>海</sup>頭<sup>ノ</sup>古<sup>來</sup>白<sup>骨</sup>無<sup>人</sup>收<sup>メ</sup>新<sup>君</sup>以上  
 鬼<sup>煩</sup>冤<sup>舊</sup>鬼<sup>哭</sup>天<sup>陰</sup>雨<sup>濕</sup>聲<sup>啾</sup>啾<sup>尤</sup>以上  
 兵車行は、玄宗兵を吐蕃に用ゐ、民行役に苦しむが爲に作れるなり。  
 首段先づ兵役に就く者の父母妻子別を悲みて痛哭するの状を寫す。  
 隣々は衆車の聲なり。蕭々は衆馬の嘶きて譁しからざるなり。弓箭  
 腰に在るは、軍装の儼然たるなり。塵埃紛々として咸陽の長橋も見  
 へざるは、其人の衆きなり。送る者は行く者の衣を牽き、足を頓し  
 て道を遮り、痛哭の聲天を貫くと、當時の狀態宛然目に在るが如し。  
 以上  
 蕭<sup>韻</sup>旅客は其何事たるを知らずして、行役の人に故を問へば、答へ  
 て曰く、新兵召募の屢なるがためなりと韻<sup>以上</sup>更<sup>に</sup>語<sup>を</sup>繼<sup>で</sup>曰<sup>く</sup>、  
 今<sup>回</sup>召<sup>募</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>し</sup>者<sup>の</sup>中<sup>に</sup>は、十<sup>五</sup>歳<sup>の</sup>時<sup>よ</sup>り防<sup>河</sup>の<sup>役</sup>に<sup>服</sup>して、

第七言古詩

漸<sup>く</sup>歸<sup>り</sup>來<sup>り</sup>、年<sup>四</sup>十<sup>に</sup>し<sup>て</sup>更<sup>に</sup>西<sup>陲</sup>の<sup>屯</sup>田<sup>卒</sup>と<sup>な</sup>る<sup>あり</sup>。往<sup>く</sup>と  
 きは里<sup>正</sup>の<sup>爲</sup>に<sup>始</sup>め<sup>て</sup>頭<sup>髪</sup>を<sup>衰</sup>ま<sup>れ</sup>し(我<sup>邦</sup>の<sup>元</sup>服<sup>の</sup>如<sup>し</sup>)者<sup>も</sup>、歸<sup>り</sup>  
 りしときは白<sup>髪</sup>の<sup>老</sup>人<sup>と</sup>なり、又<sup>邊</sup>城<sup>を</sup>成<sup>る</sup>に<sup>至</sup>れ<sup>り</sup>先<sup>韻</sup>今<sup>や</sup>邊  
 城<sup>の</sup>戰<sup>止</sup>ま<sup>ず</sup>、流<sup>血</sup>海<sup>を</sup>成<sup>す</sup>の<sup>慘</sup>狀<sup>な</sup>れ<sup>ども</sup>、天<sup>子</sup>は<sup>邊</sup>境<sup>を</sup>開<sup>く</sup>  
 意<sup>盛</sup>に<sup>し</sup>て、我<sup>等</sup>住<sup>民</sup>を<sup>驅</sup>り、鋒<sup>鏑</sup>に<sup>委</sup>す。君<sup>聞</sup>か<sup>ず</sup>や、壯<sup>丁</sup>悉<sup>く</sup>  
 召<sup>募</sup>に<sup>遭</sup>ひ<sup>て</sup>、耕<sup>種</sup>を<sup>廢</sup>す<sup>る</sup>に<sup>よ</sup>り、山<sup>東</sup>(此<sup>山</sup>東<sup>は</sup>今<sup>の</sup>山<sup>東</sup>に<sup>あ</sup>  
 ら<sup>ず</sup>して<sup>華</sup>山<sup>以</sup>東<sup>を</sup>指<sup>す</sup>)二<sup>百</sup>州<sup>の</sup>千<sup>村</sup>萬<sup>落</sup>悉<sup>く</sup>荆<sup>棘</sup>を<sup>生</sup>じ<sup>て</sup>、荒  
 蕪<sup>に</sup>委<sup>す</sup>紙<sup>韻</sup>上<sup>た</sup>と<sup>ひ</sup>家<sup>に</sup>健<sup>婦</sup>あ<sup>る</sup>も、男<sup>子</sup>の<sup>力</sup>作<sup>に</sup>比<sup>す</sup>べ<sup>く</sup>も<sup>あ</sup>  
 ら<sup>ず</sup>。隴<sup>畝</sup>の<sup>禾</sup>稼<sup>東</sup>西<sup>の</sup>畦<sup>町</sup>な<sup>く</sup>狼<sup>藉</sup>に<sup>任</sup>せ<sup>たり</sup>。山<sup>東</sup>既<sup>に</sup>此<sup>の</sup>如<sup>く</sup>  
 戦<sup>に</sup>堪<sup>る</sup>者<sup>を</sup>驅<sup>る</sup>こと<sup>雞</sup>犬<sup>に</sup>異<sup>なら</sup>ず<sup>役</sup>夫<sup>の</sup>語<sup>此</sup>に<sup>止</sup>ま<sup>る</sup>齊<sup>韻</sup>上<sup>而</sup>  
 して<sup>長</sup>上<sup>の</sup>人<sup>、</sup>役<sup>夫</sup>の<sup>疾</sup>苦<sup>を</sup>問<sup>ふ</sup>こと<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>、尊<sup>卑</sup>の<sup>勢</sup>隔<sup>絶</sup>して、

成大詩作

其心中の苦を訴ふる能はず。たゞ官府の命のまゝなり以上問且つ今年冬の如き、關西征成の役に加へて、縣官が租税の催督苛急なれども、何によりて租税を出さんや。月賀通用是に於て男子を生むの悪しく女子を生むの好きを知る也。女子なれば比隣に嫁して生涯存問するを得れども、男子は邊城に戦死して、徒らに百草を肥すのみ以上君見すや、青海(吐蕃に接したる邊地)の白骨、古來幾十万の戦死者にして、一も埋葬せらるゝものなく、新鬼舊鬼哭聲啾々、陰雨の時以て聞ゆと、其慘痛の情狀を敘す。  
天寶六載、玄宗王忠嗣をして、吐蕃の石堡城を攻めしむ。忠嗣上言して曰く、石堡堅固にして數万人を殺すに非れば克つ能はずと、帝喜はず。董延光上意を迎合して自ら石堡を取らんと請ふ、帝忠嗣に命じ、兵を分ちて、之を助けしむるも克たず。八載帝哥舒翰をして

詩古言七章七第

之を抜かしむ、士卒死する者數萬人、邊庭流血成海水の語此事を指す。  
唐人の詩、玄宗を稱して多く武皇と云ふ。  
人哭を以て起り、鬼哭を以て結ぶ、起結照應の法を悟るべし。  
車轆々、馬蕭々、三字の句既に中間五字の短句を聞るの準備を爲す君不聞は漢家山東二百州七字の句に冠し、君不見は青海頭三字の句に冠す。長短錯綜、變化を示すの手段なり。  
長者雖有問以下五字の句は、情促りて辭自ら短きが爲にして、歎歎嗚咽の形容を、聲調の上を示す、亦詩家の最も注意すべきところなり。  
仇註に云ふ、此篇は一頭兩脚體にして下面兩扇、各起結あり、各四韻を換へ、各十四句、條理秩然たりと、蓋し兩扇一は道傍過者問

成 大 詩 作

行人の句より被驅不異犬與雞の句に至り、一は長者雖有問の句より結末に至り、各四韻十四句なり。  
此篇前後出塞曲と同じく樂府の一體として、尋常の古詩と同じからず。但便宜を以て古詩と樂府とを併せ録す、讀者之を諒せよ。

高門徘徊動爾王短歌行贈王郡司直  
 歌踞珠履魚西得浪滄開豫章翻風白日  
 望吾子仲宣樓頭春色深矣  
 王氏は少年、故に王郎と稱す。然れども當時司直即ち官僚彈劾の職

詩 古 言 七 章 七 第

にあり。杜子美を其門下に致し、幕僚と爲すの意あり。是に於て劍を抜き地を斫り、意氣の壯を示し、莫哀の曲を歌ひ、曰く、君の如き才學ありて、何ぞ徒らに哀むことを須めん、我能く君が抑塞せる磊落の奇才を拔擢して、要地に置くべし。豫章は大木なり、鯨魚は大魚なり。我にして君の奇才を擢用せば、大木白日を動かし、大魚滄海を開くが如き驚天動地の作用を作すを得ん。因て其劍佩を脱し行装を解きて、躊躇顧慮することなかれ。君嚮に西蜀に遊び、嚴武の幕下にありしと聞く、今復何處に至り、何人の門に向つて、珠履の客とならんとするぞ。昔は王仲宣荊州に至つて劉表の客となり、樓に登りて賦を作り、日を経る久しく歸を懐ふと聞く、我今青眼を以て君を迎へ、意氣既に相許し、高歌以て君の我幕僚たらんことを望む、君の意如何と、是に於て余は答へて曰く、足下の眼中に余の如



成 大 詩 作

き不肖を認めらるゝは大に謝すべしと雖も、余は既に老衰して、到底足下の望に副ふ能はざれば敢て辭すと。  
此詩一韻五句、二韻合して十句なり。而して起手十一字の長句を運用し、且脱劍佩休徘徊、眼中之人吾老矣の二單句を以て、聲調を整ふ。單句の妙用是に至りて一唱三歎すべし。豫章、鯨魚、奇木、奇魚を以て奇才に喩へ、盛に王郎意を屬する事を叙し來りて、唯一句眼中之人吾老矣の語を以て之に答ふ。萬馬馳騁、刀槍交も鳴るの後金鼓一聲三軍肅然として聲無きに似たり。  
平仄は古詩の定式に叶ひて、十句の中韻を押まざるは、鯨魚、仲宣の二句のみ。古詩の平仄韻法を學ぶには、最も好適の作例なり。  
錦水は蜀の錦江にして、珠履は春申君の上客皆珠履を躡むの故事を用う。

詩 古 言 七 章 七 第

惟古○今○白○但○皎○人○青○  
願○人○人○兔○見○如○攀○天○把○  
當○今○不○搗○宵○飛○明○有○酒○  
歌○人○見○藥○從○鏡○月○月○問○  
對○若○古○秋○海○臨○不○來○月○  
酒○流○時○復○上○丹○可○幾○  
時○水○月○春○來○闕○得○時○

月○共○今○嫦○寧○綠○月○我○  
光○看○月○娥○知○煙○行○今○  
長○明○會○孤○曉○滅○却○停○  
照○月○經○棲○向○盡○與○杯○李○  
金○皆○照○與○雲○清○人○一○  
尊○如○古○誰○間○輝○相○問○白○  
裏○此○人○鄉○沒○發○隨○之○

紙以 眞以 月以 支以  
韻上 韻上 韻上 韻上

此篇一解四句、四換韻にして平仄互用なり。前段二解八句は眼前の情景を詠じ、後段二解八句は古今月同じきも古今人同じからざるを歎ず。而して前段二解の中、一は天上月ありてより幾億萬年ぞ



成大詩作

長天上有卷微長  
相長地青望凄思  
思遠冥之空簾在  
摧魂飛長長色長  
肝苦天嘆寒安

夢下美人孤絡  
魂有綠如不秋  
不到水花明啼  
關之隔思金井  
山波雲欲井  
難瀾端絕

是亦樂府なり、尋常の古詩にあらず。一韻到底にして、第一解三言二句、第二解七言四句、美人如花は單行句なり。第三解七言四句、第四解三言二句、作法甚だ奇なり。  
通篇成婦の夫を思ふ辭なり。霜隕ちて簾寒く、井欄秋蟲啼きて、孤燈黯澹、帷を卷き月を望みて、相思の情を寄するも、其人は關山千里の外にありて、阻するに長天大江を以てす、夢魂飛で其傍に至ら

詩古言七章七第

んも容易ならず、相思の苦、心腸寸断すと、蓋し假りて以て、賢臣讒を蒙りて遠けられ、君を思ふ眷々の意を示すなり。美人の語は此處妻の夫を指すに用うれども、實は臣の君に對する語なり。嚴羽云ふ、夢魂不到は欲到に作るべきに似たりと、

楊白花  
陽春三月  
夜入閨闥  
含情出戶  
春去秋來  
雙燕無子  
願街楊花  
入窠裏  
胡太后  
春風  
以上麻韻五言  
二句七言二句  
以上紙韻

梁書に、魏の楊華少うして勇力あり、容貌雄偉なり。魏の太后逼りて之に通ず。華事露はれ禍の身に及ばんことを懼れ、其部曲を率ゐて梁に降る。太后之を慕ふて止まず、爲に楊白花の歌を作り、宮人

成 大 詩 作

をして臂を連ね足を踏み、之を歌はしむ、其聲甚だ悽惋なりと、歌意、陽春の候、楊花開き、一夜風に随ふて閨中に入りしも、更に飄蕩して南家に飛び去ると、以上第一解四句、楊華の姓名を楊花に寓して、其一且情を通せしもの、我を棄て、南朝の梁に降りしを歎するなり。依て我は其跡を慕はんとするも、身の自由ならず、空しく戸外の楊花を拾ふて相思の涙を灑ぐのみと、第二解二句、思慕の情切なるを説く。斯くて春去り秋來り、時日の久しき中には、燕子が楊花を銜み來りて、舊巢に還ることもあらんかと、萬一の事を願ふなりと、楊華の歸還を望むの情を叙す。是亦樂府の一體なり。沈德潛曰く、音韻纏綿讀者をして其穢褻を忘れしむ。後人此題を作るもの、竟に楊花を賦し、其旨を失ふ。柳子厚の一篇隠るゝが若く露はるゝが如く、劇だ佳なりと。

詩 古 言 七 章 七 第

起一句、河水東流を以て、流年の過ぎ易きを況し、次に女兒長育の次第を説き、嫁して子を生むことに及ぶ。以上尤韻を前段となし、陽韻に轉じて毎句韻を押し、六句富貴驕奢の状を叙し。末段二句、富貴の長く恃むべからざるを歎じて、貧しと雖も幼より相知れる東

河○中○水○之○東○流○  
 莫○愁○十○五○嫁○  
 盧○家○蘭○室○  
 頭○上○金○釵○  
 珊○珞○挂○鏡○  
 人○生○富○貴○何○所○望○

洛○陽○女○兒○名○莫○愁○  
 十○四○采○桑○南○陌○頭○  
 十○六○生○兒○字○阿○侯○  
 中○有○絲○履○五○文○香○  
 足○下○  
 平○頭○奴○子○東○家○王○  
 恨○不○早○嫁○

梁武帝  
 以上尤韻

成大詩作

家に嫁せざりしを悔るの辭なり。其妙說破せざるにありて、樂府歌  
行の當行本色なり。  
此詩古今兩體未だ相分れず、故に平仄は後世の所謂律句を間ること  
多し。

樂府古題要解に曰く、石城に女子あり、莫愁と名く、歌謠を善くす  
と、後世假りて美人の名となす。女紅餘志に曰く、欲知菌苔色、但請  
看芙蓉、欲知莫愁美、但看阿侯容と、阿侯は假りて男兒の名となす。

奉君金卮之美酒  
七綵芙蓉之羽帳  
紅顏零落成將暮  
願君裁悲且減思  
聽我抵節行路吟  
九瑋玉匣之雕琴  
寒光宛轉時欲沈  
聽我抵節行路吟  
瓊瑀玉匣之雕琴  
寒光宛轉時欲沈

詩古言七章七第

不見栢梁銅雀上  
寧聞古時清吹音

起頭四句、一連直下、美酒、雕琴、羽帳、錦衾を以て君に奉ずと、  
次段紅顏は老い易く、光陰は過ぎ易し、されど漫りに悲むを止めて  
我行路難の曲を聴けよとなり、而して未段漢武の栢梁臺、魏武の銅  
雀臺の事を引きて、古時帝王の風流に誇れる聲樂も、今は亡びて聽  
くに由なきを述べ、我歌曲を以て之に當てんとの意を言外に示す。  
本題八首此篇其冠たり。蓋し文章に於ける題序の如きものなり。不  
見の字は後世の君不見の用法と同じく、見ずやと訓すべし。  
唐以前の七言は大抵樂府にして、詩と云へば五言に限りたるもの、  
如し、讀者其區別を知らざるべからず。

秋風蕭瑟天氣涼  
草木搖落露為霜  
燕歌行  
魏文帝

成 大 詩 作

爾●星●短●不●賤●糠●群●  
 獨●漢●歌●覺●妾●慳●燕●  
 何●西●微●淚●擘●思●辭●  
 幸●流●吟●下●擘●歸●歸●  
 限●夜●不●沾●守●戀●雁●  
 阿●未●能●衣●空●故●南●  
 梁●央●長●裳●房●鄉●翔●

牽●明●撥●憂●君●念●  
 牛●月●琴●來●何●君●  
 織●皎●鳴●思●淹●客●  
 女●皎●絃●君●留●遊●  
 遙●照●發●不●寄●思●  
 相●我●清●敢●他●斷●  
 望●牀●商●忘●方●勝●

燕は北方の地にして、境を匈奴に接す、古時人の此に戌役するや、其妻歌を作りて思を托す。之を燕歌行と云ふ。此篇亦良人邊を戌りて歸らず、秋を悲むと共に良人を慕ふ情を詠す。毎句押韻にして、平仄後世古詩の定式に合するもの、僅々三兩句に過ぎず。是に於て詩に古今の變あるを知るべし。

詩 古 言 七 章 七 第

城●有●丁●  
 郭●如●令●  
 故●鳥●威●  
 人●鳥●歌●  
 民●丁●  
 非●令●  
 威●  
 去●  
 家●  
 不●千●  
 學●歲●  
 仙●今●  
 冢●來●  
 崇●歸●  
 崇●

搜神記に曰く、遼東の城門に、華表柱あり。一白鶴柱頭に來り、少年之を射んとするに、鶴乃ち空中に徘徊して此を歌ふと、蓋し時人の寓言なり。其意は我も元來此城中に住める人なりしが、千歳の昔飛び去りて長生の道を學び、今歸り來りて視るに、城郭は昔と異らざるも、人は新陳代謝幾十代を経たるや知るべからず、我識れる人は一人もなく、悉く枯骨となりて、纍纍たる塚の下に在り。これを觀ても人生の果敢なきを知る。されば我と同じく去りて盍ぞ仙を學ばざるぞとなり。

七言四句、後世の絶句に似たれども、四句悉く韻を押用せり。

成大詩作

後漢の末、桓靈二帝の時、紀綱紊亂、公卿其知る所を濫擧するを譏りし童謠なり。  
舉<sup>○</sup>秀<sup>○</sup>不<sup>○</sup>知<sup>○</sup>書<sup>○</sup> 舉<sup>○</sup>孝<sup>○</sup>廉<sup>○</sup>父<sup>○</sup>別<sup>○</sup>居<sup>○</sup>  
寒<sup>○</sup>素<sup>○</sup>清<sup>○</sup>白<sup>○</sup>濁<sup>○</sup>如<sup>○</sup>泥<sup>○</sup> 高<sup>○</sup>第<sup>○</sup>良<sup>○</sup>將<sup>○</sup>怯<sup>○</sup>如<sup>○</sup>胆<sup>○</sup>  
書居二 字魚韻 泥音涅 胆音減

文學の秀才として擧げられたる者も書を知らず、品行の方正を以て孝廉に擧げられたる者も、父母と相憎みて別居し、窮に處しても食らず、清廉潔白の名ありし者も、官に就けば、貪穢濁亂、泥土の如く。忠勇の良相として高第に居る者も、鼈魚の頭足を縮むるが如く。怯懦なりと、語簡にして盡せり。泥胆の音デツ、ベツ相叶ふ。

失<sup>○</sup>我<sup>○</sup>焉<sup>○</sup>支<sup>○</sup>山<sup>○</sup> 令<sup>○</sup>我<sup>○</sup>婦<sup>○</sup>女<sup>○</sup>無<sup>○</sup>顔<sup>○</sup>色<sup>○</sup>  
何<sup>○</sup>奴<sup>○</sup>歌<sup>○</sup>

詩古言七章七第

失<sup>○</sup>我<sup>○</sup>祁<sup>○</sup>連<sup>○</sup>山<sup>○</sup> 使<sup>○</sup>我<sup>○</sup>六<sup>○</sup>畜<sup>○</sup>不<sup>○</sup>蕃<sup>○</sup>息<sup>○</sup>  
焉<sup>○</sup>支<sup>○</sup>、祁<sup>○</sup>連<sup>○</sup>は、共に匈奴の疆内に在る山の名にして、水草の美、匈奴の依りて以て生を營むものなり。然るに漢のために攻奪せられしを悲みて、此歌を作る。

焉<sup>○</sup>支<sup>○</sup>、臙脂と音相同じ、臙脂は婦人の顔色を妝ふものなり。依りて假りて焉<sup>○</sup>支<sup>○</sup>山<sup>○</sup>を奪はれしより、妻孥を養ふこと能はざるを説き、祁連山を失ひしより、牛馬を牧養蕃息せしむるを得ずと歎す。

七言の詩は、漢の栢梁體に始まること、人の知る所なり。高帝大風歌を以て祖となすものあれども、大風歌は句中に今の字を加へて音節を成し、後世の七言に比すれば、大に異なるものあり。以上は七言の作例として、九牛の一毛たるに過ぎずと雖も、反覆諷

成 大 詩 作

誦して、其音節意義を尋味すれば、思半に過ぐるものあらん。

作 詩 大 成 大 尾

明治四十四年一月一日印刷  
明治四十四年一月五日發行

著 者

井 土 靈 山

發 行 者

東京市神田區裏神保町貳番地  
高 橋 爲 吉

印 刷 者

東京市淺草區小島町六十八番地  
笹 川 欽 藏

印 刷 所

東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場



發 行 所

東京市神田區  
裏神保町貳番地

崇 文 館

(總發行所 東京市本所區番場町四番地)